

諫早市文化財調査報告書 第16集

お わ たに
尾 和 谷 城 跡

2004. 3

諫早市教育委員会

発刊のことば

尾和谷城跡は大村市との境界付近にある城跡で、戦国時代に諫早を領した西郷氏の武将 尾和谷軍兵衛元光が居城をした跡といわれています。

この城は大村氏との境の番手城、あるいは境目の城として重要であったにもかかわらず、尾和谷城について記した文献は諫早には伝存してなく、人々の口伝として長く伝えられてきました。

この尾和谷城の城主であった尾和谷軍兵衛は本明川の源流である落から延々 5 kmほどの用水路を堀割った優れた土木技術者としても伝承されており、この用水は今も城跡遺跡の中央を流れ四百有余年間、開地区の灌漑用水として利用されています。

この用水の利用については昔から仕来りがあり、日の出から日没までは上の集落が利用し、また反対に日没から日の出までは下の集落が利用するというものでした。

これは、下の田が終日太陽の光を受けるにもかかわらず、上の田は半日ほどしか太陽の恵みを受けず、稲の成育に差を生じさせないための、先人の知恵であったことが分かります。

確かに、東斜面には多くの棚田が作られており、現在私たちはその見事な景観を目の当たりに出来ますが、往時は作田には大変な労苦があったであろうことを髣髴させます。

今回、この大渡野丘陵先端部に基盤整備事業が計画・実施されることとなり、尾和谷城跡の発掘調査を実施することとなりました。

本書はこの先人たちが残した当時の生活や生産、そして信仰の記録であります。

この報告が今後の地域研究の一助となれば望外の喜びであり、また地域研究や考古学を志す学究の徒の指針となりうればさらなる喜びであります。

最後に、この発掘調査に関し長崎県諫早農村整備事務所をはじめ関係行政機関、地元町内会、地権者及び寒暑にかかわらず調査に従事していただいた皆様に衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月19日

諫早市教育委員会

教育長 前田重寛

例　　言

1. 本書は諫早市下大渡野町2273番地外、上大渡野町73番地外に所在する尾和谷城発掘調査報告書である。
2. 調査は県営中山間地域総合整備事業（生産基盤型）本野西部地区（開工区）事業に伴って実施した発掘調査である。
3. 調査は長崎県諫早農村整備事務所の委託を受けて、諫早市教育委員会が実施した。
4. 調査は3年次に及ぶ。
即ち、第1年次は遺跡の存在を確認する調査を諫早市教育委員会が主体となって平成11年度に実施し、
第2年次は基盤整備事業実施地区に対する埋蔵文化財の包蔵状況を諫早農村整備事務所の委託を受けて平成12年度実施した。
第3年次は、第2年次の調査結果を受けて遺跡保存の協議を実施し、調整不可能な部分についての記録保存のための発掘調査を平成14年度に実施した。
5. 調査に際しては、長崎県文化財保護指導委員　吉福清和氏、佐世保市教育委員会副理事久村貞男氏、長崎県立口加高校教諭　大石一久氏に調査指導を頂いた。
6. 整理作業は平成15年度諫早市郷土館で行った。遺物、図画類は諫早市教育委員会が保管の任にあたり、諫早市郷土館で整理・保管・展示している。
7. 本書で使用した方位は真北を示し、高度値は海拔高を表している。
8. IV-1-1、IV-2-1に記した建物の寸法に関する数値は、柱芯間の距離の測定によって算出した。柱芯間の距離は、柱材及びその腐食痕が残るものについてはそれを用い、柱穴のみ残る場合は、柱穴底面の中心を基準として測定したが、一部推定も含まれている。
9. 本書の執筆は
　第Ⅱ章を古賀力
　第Ⅳ章第1節第1項、第2節第1項を橋本幸男
　第VI章を大石一久
　その他を秀島貞康が行い、編集は秀島が行った。

目 次

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の地理的・歴史的環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III. 調査の概要	7
1. 遺跡確認調査の概要	7
2. 範囲確認調査の概要	7
3. 本調査の概要	8
IV. 遺構	12
1. 1区、2区の土層	12
2. 1区の遺構	12
①建物遺構	12
②池状遺構	18
③ミゾ状遺構	19
④ミゾ様遺構	20
⑤土壤	20
3. 2区の遺構	36
①建物遺構	36
②ミゾ状遺構	40
③土壤	40
④炭窯遺構	41
⑤公道遺構	41
⑥祭祀遺構	42
V. 出土遺物	56
VI. 年神社石塔群・平松社石塔群	75
1. 年神社石塔群（明教寺石塔群を含む）	75
2. 平松社石塔群	79
VII. 総括	82

挿図目次

第1図 諸早市位置図	2
第2図 遺跡周辺地形図	3
第3図 遺跡分布図	4
第4図 安山岩製宝篋印塔実測図（明教寺歴代住職墓地）	6
第5図 郷図（部分）	6
第6図 本調査トレント配置図	9~10
第7図 第1・2年次トレント配置図	11
第8図 土層図	21
第9図 建物1、2、3、4、28	22
第10図 建物5、6	23
第11図 建物7、8	24
第12図 建物9、10	25
第13図 建物11、12	26
第14図 建物13	27
第15図 建物14	28
第16図 建物15、16、17、29	29
第17図 建物18~21	30
第18図 建物22~27	31
第19図 池状遺構	32
第20図 ミゾ1、ミゾ様遺構	33
第21図 ミゾ2、3、土壤4	34
第22図 土壌1、2、3、5、10、13	35
第23図 建物1-1~1-3	43~44
第24図 建物2-1、2-2	45~46
第25図 建物3-1、3-2	47
第26図 建物3-3、3-4	48
第27図 建物4、5	49
第28図 建物6、9	50
第29図 建物7、8、10、11	51
第30図 ミゾ1、2、3、4、祭祀遺構	52
第31図 土壌1、2、5、6	53
第32図 土壌3（建物12）、土壌4、炭窯	54
第33図 公道、ミゾ9	55
第34図 遺物実測図1	65

第35図	遺物実測図2	66
第36図	遺物実測図3	67
第37図	遺物実測図4	68
第38図	遺物実測図5	69
第39図	遺物実測図6	70
第40図	遺物実測図7	71
第41図	遺物実測図8	72
第42図	宝塔宝珠実測図	81

別 図

別図1	1区遺構配置図
別図2	1区遺構配置図
別図3	2区遺構配置図

表 目 次

第1表	建物主軸分布図・表	13
第2表	建物主軸分布図・表	36
第3表	遺物観察表1	73
第4表	遺物観察表2	74

図 版 目 次

図版1	尾和谷城跡全景
図版2	1 1・2区全景
	2 1区全景
図版3	1 1区A～Cトレンチ全景 (建物1～4、28)
	2 1区A3・4トレンチ池状及びミゾ様遺構
図版4	1 1区C～Kトレンチ全景 (建物5～21、29)
	2 1区C～Eトレンチ全景 (建物7～12)
図版5	1 1区H・Iトレンチ全景 (建物13～18、29、土壤5、8～10)
	2 1区V～Zトレンチ全景 (建物24～27)
図版6	1 2区全景

- 2 2区C～Fトレンチ全景（建物1～3、ミゾ1～4、土壤1、2、5）
- 図版7 1 2区C・Dトレンチ全景（建物4、5、土壤1、2、5）
2 2区E～Hトレンチ全景（建物6～12、炭窯、公道）
- 図版8 1 1区Aトレンチ池状遺構全景
2 同上
- 図版9 1 1区Aトレンチ 池状遺構 濡水状況
2 1区A～Cトレンチ ミゾ1完掘状況
- 図版10 1 1区A・Bトレンチ ミゾ3完掘状況
2 2区F7トレンチ 土壤3・建物12完掘状況
- 図版11 1 2区F7トレンチ ミゾ9検出状況
2 2区F7トレンチ 炭窯完掘状況
- 図版12 1 2区F7トレンチ ミゾ3（棧瓦、塊石出土状況）
2 2区F～Hトレンチ 公道
- 図版13 1 2区G7土壤4検出状況
2 2区H9土壤6検出状況
3 2区F2祭祀遺構（ピット29）宝篋印塔相輪（65）出土状況
4 2区F2祭祀遺構（ピット29）宝篋印塔相輪取上げ後の状況
5 2区F2祭祀遺構（ピット29）白磁碗（44）出土状況
6 1区G3ピット1柱痕
7 1区H4ピット3柱痕
8 1区I5ピット5柱痕
- 図版14 1 2区F3ピット15、15-1～5
2 2区G7ピット2、63
3 1区H3ピット4 青花（11）出土状況
4 2区E2ピット3茶臼（63）出土状況
5 2区E2ピット3同上
6 2区E3ピット11土師質火舎（61）出土状況
7 2区F3ピット15-1土師質火舎（59）出土状況
8 2区F3ピット143青磁碗（43）出土状況
- 図版15 遺物写真1～18、20～42、45～56
- 図版16 遺物写真68～82、132～166
- 図版17 遺物写真19、43、44、57～62
- 図版18 遺物写真63～67、85、86、明教寺墓地確認宝篋印塔火輪、平松社確認宝塔宝珠、
1区池状遺構7層出土陶器
- 図版19 遺物写真82、84、88～92、93～127、128～131、167、168

I 調査に至る経緯

尾和谷城跡が存在する諫早市下大渡野町・開地区と上大渡野町にまたがる地区に、圃場整備事業が計画されていることを諫早市農林水産部農村建設課より通知を受けたのは平成10年であった。

その後、田地の整備事業にあわせて畠地区の追加や、古場谷、湯野尾谷をも含めた広範囲の中山間総合整備事業として県施行となった経過については、平成12年度に確認・認識することになった。

さて、本教育委員会としては、当該事業施行予定地区周辺に佐賀型六地蔵（市指定文化財）や五輪塔や宝篋印塔などの古い石造物が多く認められるものの、従来から想定されている尾和谷城が実際に存在するのか否かの、遺跡の有無についての確認調査を平成11年度において実施することとした。

同地区には「ドイノウチ」、「アブラトイ」、「マガリ」、「トンヤシキ」、「ノギント」、「ジゾウダ」、「ブクデ」などの小字名や通称地名があるものの、城に付随する遺構としての掘り切りや土壘、堀などが視認できない状態であったからである。

そこで遺跡の有無を確認する調査（第1年次調査）を、平成12年2月22日から3月27日まで実施した。

その結果、大半のトレンチで柱穴などの遺構の確認がなされ、また遺構成立の時期も従来言われていた16世紀頃の西郷氏時代のものと見てよく、これらの確認により尾和谷城が存在することが実証されたのである。

その後、文化財保護法に則り、遺跡の発見届の提出など所要の手続きを行って、周知の遺跡として登載がなされた。

一方、県諫早農村整備事務所では県施行事業として、事業の範囲や整備の方法などの計画図面が進捗・完成し、この計画図を基に協議を実施した。施行面積は8haと広大であり、平成11年度の調査結果と必ずしも整合しないため、平成12年度において県からの受託事業として遺跡の範囲確認調査（第2年次調査）を実施することとした。

範囲確認調査は平成13年1月17日から3月19日まで実施した。

調査結果は半数のトレンチで遺構あるいは遺構面の確認がなされたが、丘陵の西側のトレンチにおいて後世の田のマチ直しに伴う地形の改変が重篤であることが理解された。

この結果を踏まえ、県農村整備事務所と再度協議を実施し、可能な限りの遺跡保存の方法をとることとした。

しかし、事業実施の上で遺跡保存が不可能な部分について、記録保存のための調査（第3年次調査）を実施することとし、平成14年6月25日から平成15年3月25日まで調査を実施することとした。

II. 遺跡の地理的・歴史的環境

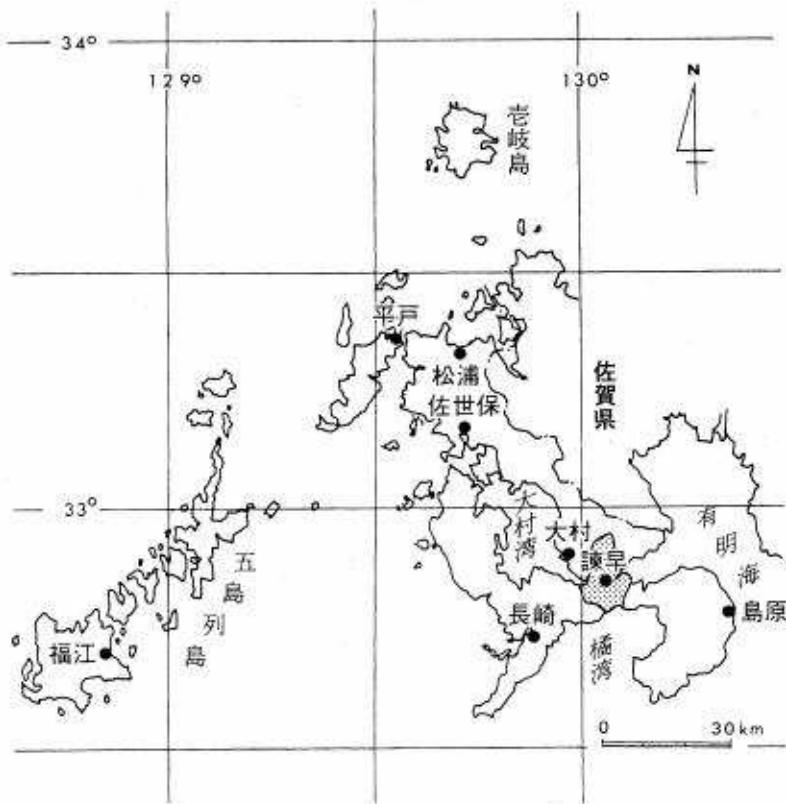
1. 地理的環境

尾和谷城遺跡は諫早市の北東部、下大渡野町と上大渡野町が接するところに所在し、東経 $130^{\circ} 01' 23''$ 北緯 $33^{\circ} 53' 07''$ を計り、西側は大村市と境界を接している。遺跡の立地は多良山地の火山碎屑物によって形成された火山性台地末端部で概観は標高 $127.5m \sim 119.0m$ にわたって傾斜する尾根筋である。調査を実施した地点では1区J付近を谷頭として浅い谷が南へ西谷川に向かって開析され、従って台地先端部はこの谷により東西に分割された馬蹄形状を示している。東側は本明川、西側及び南側は西谷川の開析によって谷が形成され、それぞれの河川と遺跡との標高差は、調査地点付近でほぼ東側で $60m$ 、西側で $50m$ である。特に東側の本明川による開析は急峻である。南側は西谷川に沿って国道34号とJR大村線が走り、この狭隘な谷を隔てて玄武岩噴出によって形成された風觀岳（標高 $236.2m$ ）の急な山肌が迫っている。北側は1区Zの北方 $500m$ 付近で台地は縫れるように極端に狭くなり、馬の背状の地形を成している。これらの地理的環境が示すように、尾和谷城遺跡は天然の要害に立地していると言えよう。

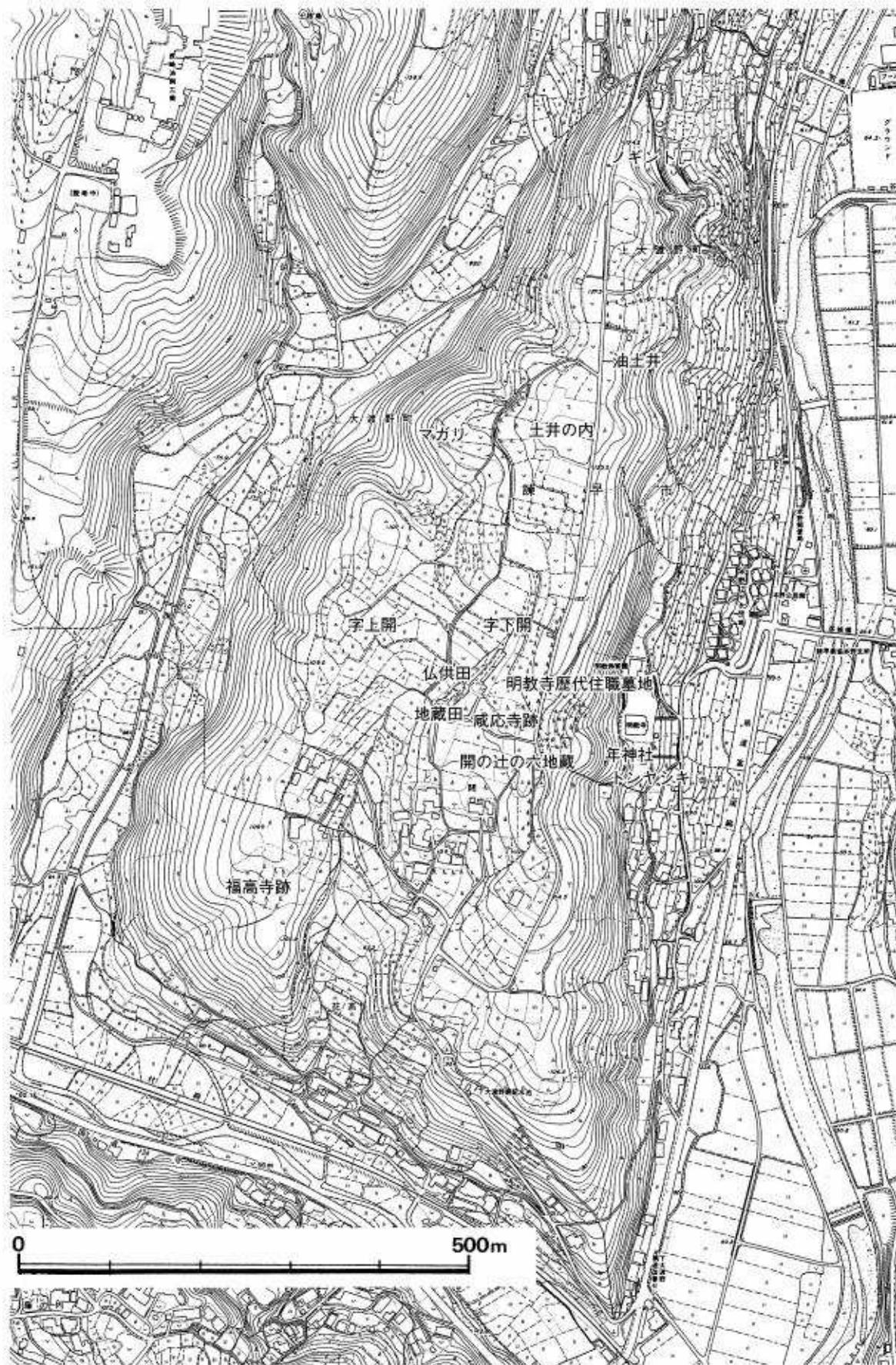
2. 歴史的環境

多良山地を形成する火山

性台地には旧石器時代をはじめ先史時代の遺跡が広く分布し、人類の生活基盤になっていたことが窺われる。現在も山林資源の活用及び農耕による生活基盤が中心になる農村主体の地域である。中世には本遺跡の南東 $1.5km$ に立地条件をほぼ同じくする平松城遺跡があり、水田基盤整備工事に伴う、根小屋跡推定地の発掘調査により $13 \sim 14C$ の中国製青磁などが出土している。また遺跡周辺の神社・墓地・寺院跡には五輪塔・宝篋印塔等の石造物残欠を集合した場所がみられ、これらの

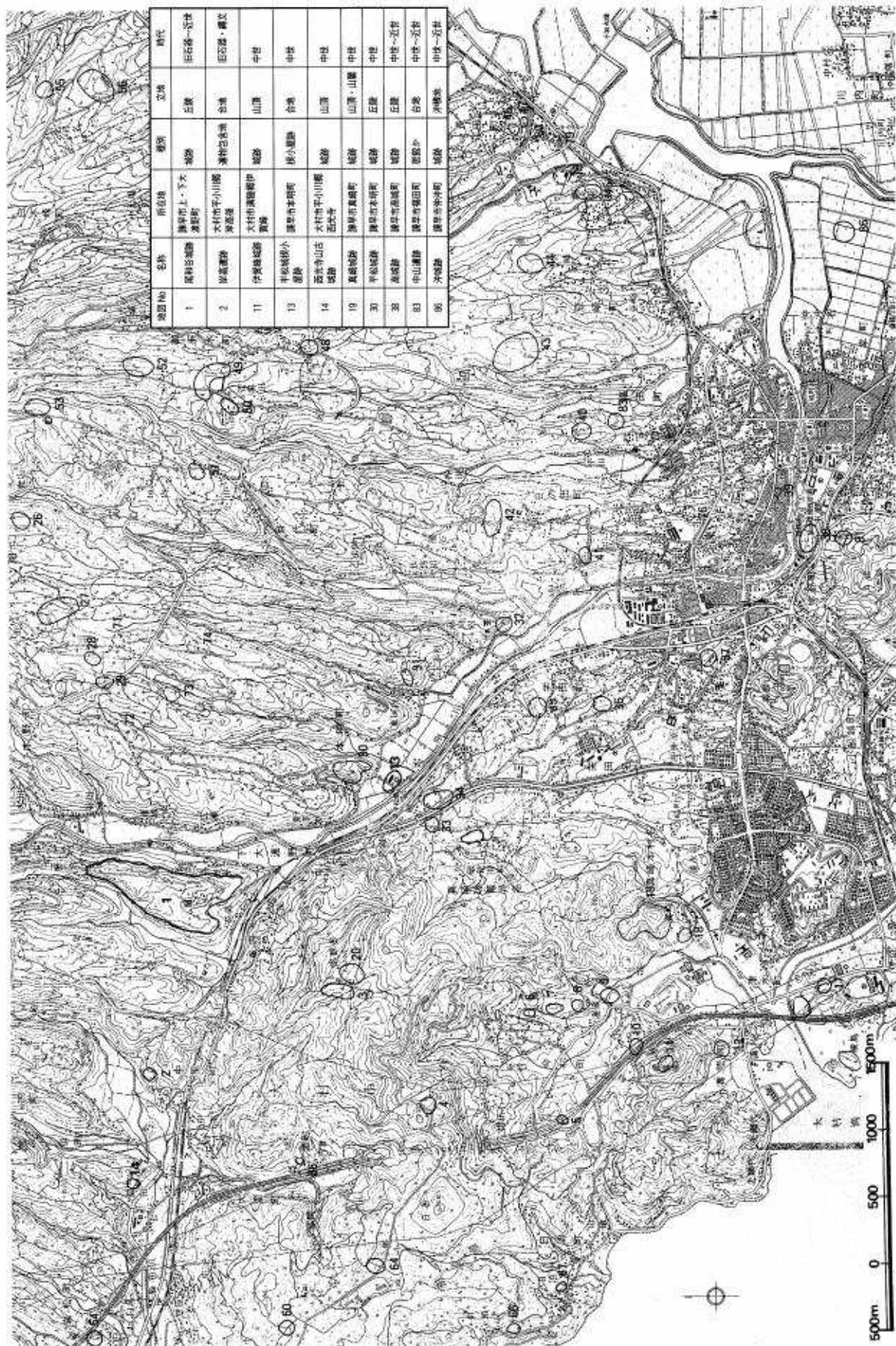


第1図 謞早市位置図



第2図 遺跡周辺地形図

第3図 周辺遺跡分布図



石造物は主として15~16Cの年代を示し、この地域の南北朝時代から戦国時代にかけての歴史的背景の一端を示している。

尾和谷（大渡野）の名称は『大村郷村記』に16代大村純伊の時、文明6（1474）年中岳原合戦の頃に有馬貴純が諫早の西郷尚善を従え、尾和谷を通って大村に攻め入ったと記述されているのが初見である。その後元亀3（1572）年西郷純堯が後藤氏、松浦氏と連合して大村純忠の居城である三城を攻めた時に、西郷勢の大将として尾和谷軍兵衛が出陣し、大渡野の北部から萱瀬村境の尾を経て大村に攻め入り、経塚（乾馬場郷）に布陣したが、この合戦で軍兵衛は討死すると記している。

続いて2年後の天正2（1574）年西郷純堯が尾和谷軍兵衛の子とされる、尾和谷弥三郎を率いて再び萱瀬村境の尾より攻め込んだが敗れ、尾和谷弥三郎は討死すると同書は記している。

さて、この尾和谷城は大村氏との境目の城として西郷純堯の武将である尾和谷（馬場）軍兵衛が築城したと伝えられる。

その時期は文献から推定すると

①「家記ニ曰、文明六年甲午十二月、肥前高来の領主有馬肥前守貴純、多勢を帥て当領へ押寄ると聞へければ、家臣等相集り評議しけるは、萱瀬村鳥甲山は要害堅固の地にして、……此は十二月下旬、貴純は自ら武千余人を帥て尾和谷_{諫早}を通り、境の尾_{大村}に乱入り聚會、……」

（「第十四 萱瀬村 古戦場之事附戦死之輩墓之事」『大村郷村記』藤野保編1982）

②「大村家記ニ曰、元亀三壬申年七月晦日、後藤伯耆守貴明、平戸・諫早等の援兵と密に謀し合三城を囲む、……諫早領主西郷筑前守純堯よりは、家士大渡野軍兵衛に三百余人を指添て援しむ、……」

（「第二 大村（久原・池田） 古城蹟并古館蹟之事」『大村郷村記』藤野保編1982）

③「元亀三（1572）年七月晦日、親類中逆心、諫早方と内通、諫早軍勢を引入る、諫早之大将尾和谷軍兵衛元光、諸勢船より久出津にあかり、其勢大村川崎四辻迄押寄、内通後藤有馬平戸四方より一所鯨波時声村浦ひひき、金たいこほら貝吹立ひひくことくなり、三城にはおもひよらざる事なれば、わすか之近習之者計なりと考て押寄る所、……」

（『大村記』『史籍雜纂』所収1911）

④「家記ニ曰、天正二甲戌廿日、西郷対馬守純堯自から兵を率して萱瀬村に襲い来る、純忠萱瀬村山の城より兵を発して出向ひ、……境の尾に於て防戦す、西郷か先手尾和谷弥三郎を萱瀬村の百姓禿小七と云者射留て首を取……」

（「第十四 萱瀬村 卒都婆の尾古戦場」『大村郷村記』藤野保編1982）

⑤「……有時ハ萱瀬村江尾和谷口ヨリノ取掛合戦ス、此節ハ大村ヨリモ數人被差向、尾和谷弥三郎初及百人討取、純忠勝利無比類、又ハ伊佐早口ヨリ大村へ取懸數度合戦……」

（「福田十郎左衛門長方由緒書写」『福田文書』外山幹夫著『中世九州社会史の研究』所収 1986）。

と記し、①の資料により当地が交通の要衝として重要地であり、文明6（1474）年頃には境目の城として存在していた可能性が考えられる。また②、③の資料により元亀3年即ち1572年、

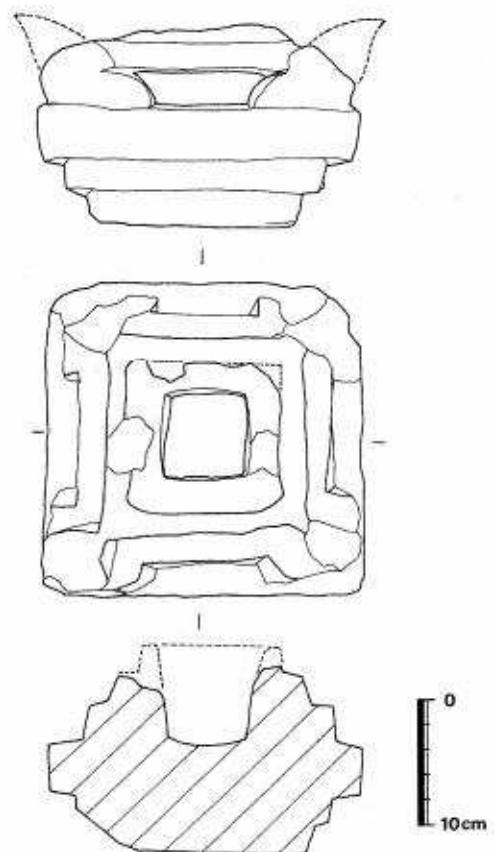
④天正2年1574年にはすでに築城されていたものと推定される。しかし同城がいつ頃廃城になったのかは不明である。

当該時期の示す古記録・古文書が諫早市内には残されてなく、上記資料も大村氏の資料によっている。開地区周辺では「星巖 享禄壬辰（1532）」紀年銘をもつ佐賀型六地蔵、「フッコウジ」や「トンヤシキ」には宝鏡印塔、五輪塔などが多数遺存し、類中五輪塔に長崎半島産の

緑泥片岩製のものがあることは、かなり早い時期に大村氏の勢力が浸透したことを窺わせている。

尾和谷城に拠ったとされる尾和谷氏は、その後は文献記録にみることはできない。尾和谷城に対する大村側の戦略的な施設は現在のところ明確に捉えることができないが、西谷川を西に渡り台地を越えて大村市に入ると距離 2 km 以内に、西流する鈴田川左岸に岸高城、右岸に西小路山城の 2 城が中世山城として記録されている。

西郷氏が関わった大村氏との合戦は大村氏の本拠地である郡川流域を制するためか向背の多良山地から攻め入っており、地理的な条件からみて尾和谷城が戦略的に重要な地点であったことが窺える。



第4図 安山岩製宝篋印塔実測図（明教寺歴代住職墓地）



第5図 地図（部分）

III. 調査の概要

1. 遺跡確認調査（第1年次）の概要

当該地区尾和谷城に関する知見は全くなかったため、周辺地形を考慮し、また現在に伝えられている通称地名などを参考として、11箇所のトレンチを設定し調査を開始した。

トレンチは丘陵中央部を南北に流れる用水路の東側部分を中心に設定し、トレンチ番号は地番を付すこととした。

トレンチは基本を $2 \times 5\text{ m}$ とした。これは柱芯距離が 2 m を超える建物が存在することを考慮したものであり、事実柱芯距離が 2 m 、あるいは 2 m を超える建物の検出がなされた。

確認調査で検出した遺構群は下記のとおりである。

No	トレンチ	所在地	検出遺構など
1	73-1	上大渡野町73番	なし、深耕により消滅
2	73-2	上大渡野町73番	径約30cmの柱穴1個検出
3	74	上大渡野町74番	径約30cmの柱穴で構成される 3×1 間の建物1棟検出、柱穴から土師器坏（本報告第34図8）検出
4	79	上大渡野町79番	なし、深耕により消滅
5	80	上大渡野町80番	なし、深耕により消滅
6	90	上大渡野町90番	土壌4基確認
7	115	上大渡野町115番	建物遺構と思われる柱穴、不鮮明ながら検出
8	2260	下大渡野町2260番	敷地の造成面・柱穴・礫群6基検出
9	2262	下大渡野町2262番	径60~70cmの柱穴2列検出、p-2から土師器小皿（灯明皿）1個検出（本報告第34図4）
10	2267-1	下大渡野町2267番	敷地の造成面、径約30cmの柱穴2列検出
11	2267-2	下大渡野町2267番	敷地の造成面、造成後掘削の溝状遺構1条検出（本報告ミゾ1）

2. 範囲確認調査（第2年次）の概要

第1年次の調査結果、また周辺の表面調査を基にトレンチを設定し、調査を実施した。今回の調査は整備事業実施予定箇所を対象としていたため、広範囲に及ぶこととなった。

トレンチ設定の基本は第1年次と同様に $2 \times 5\text{ m}$ を基本に、最長のもので 15 m としたものもある。これは現地形において田のあり方に不自然の箇所（No2251 トレンチ）が認められ、つまり西側と東側の丘陵とは本来別丘陵であり、浅い谷地形を示すはずが、東西に長い田が存在していた。そこで浅い谷地形が確認されるのか、あるいは堀が存在するのかの調査を実施した。結果、堀は確認されず、西側の丘陵部が往時削平されて浅い谷部を埋めた結果であることが確認された。また西側の丘陵は全体的に削平を受けていることが判断された。

範囲確認調査での確認状況を列記すれば、つぎのとおりである。

No	トレンチ	所在地	検出遺構など
1	2181	下大渡野町2181番	墓坑であろうか 1 m 弱の方形の浅い掘りこみあり
2	2242	下大渡野町2242番	耕地整理に伴う搅乱深度が深いが、僅かに残る柱穴様 pit 5本確認
3	2248	下大渡野町2248番	遺構の確認なし
4	2251	下大渡野町2251番	表土下約 1 m で柱穴様 pit や炭混じり土があり、造成面と思われる
5	2254	下大渡野町2254番	畠閑倒しあり、小礫集積部確認
6	2256	下大渡野町2256番	田に伴う排水用溝確認
7	2268	下大渡野町2268番	鉄滓出土、表土下約 80 cm で有機質を混えるような淡黒色土（旧表土）あり
8	2269	下大渡野町2269番	畠閑倒しあり、遺構確認なし
9	2285	下大渡野町2285番	遺構確認なし
10	2292	下大渡野町2292番	畠閑倒しあり、墓坑であろうか不定形な土壤確認、覆土より明時代青磁出土
11	2320	下大渡野町2320番	耕地整理に伴う搅乱深度が深いが、僅かに残る柱穴1本確認

この調査結果を基に協議を再開し、計画で遺構面より掘削が下位に及び遺構面が消失する部分の確認作業を行った。消失面積は15,000m²に及ぶことが判明し、遺跡保存の方法を協議し、さらに計画の見直しを実施することとなった。その結果、最終的に計画の変更が不可能で、記録保存の調査を実施すべき面積が5,000m²となったのである。

これに基づき平成14年度の受託事業として諫早市教育委員会が実施することとなった。

3. 本調査（第3年次）の概要

第2年次の結果を踏まえ、調査地点は字「下開」の下大渡野町2262、2267番地の調査面積5,000m²とし、調査の全工程を立案し、調査を実施することとした。

本調査は従来のトレンチ調査と違い、面的調査となるため、グリッド様の調査区（第6図）を10mピッチで設定することとした。

調査は表土部分を重機で排土し、現在の床土部分から順次掘り下げる方法で行った。調査が進むにつれて、小さな複数の田を1枚にする関直し（マチナオシ）がなされ、複雑を極めた。

また田の境である畦部分ではマチナオシにともない高い石垣が築かれており、人力での排除が出来なかった部分もある。

その後、計画変更があり、字「土井内」の上大渡野町73~85番地も整備の対象となった。

さらには、保存部分としていた地区が工事にかかり、造成中の作業現場から新たな柱穴群の検出が見られた。字「下開」の下大渡野町2273~2293番地である。

2箇所の追加の調査地点で面積は広大となり、直線で400mを超えるようになった。またトレンチも呼称が重複するおそれが生じたため、北側を1区、南側を2区として2区にも10mピッチのトレンチを設定し実施した。

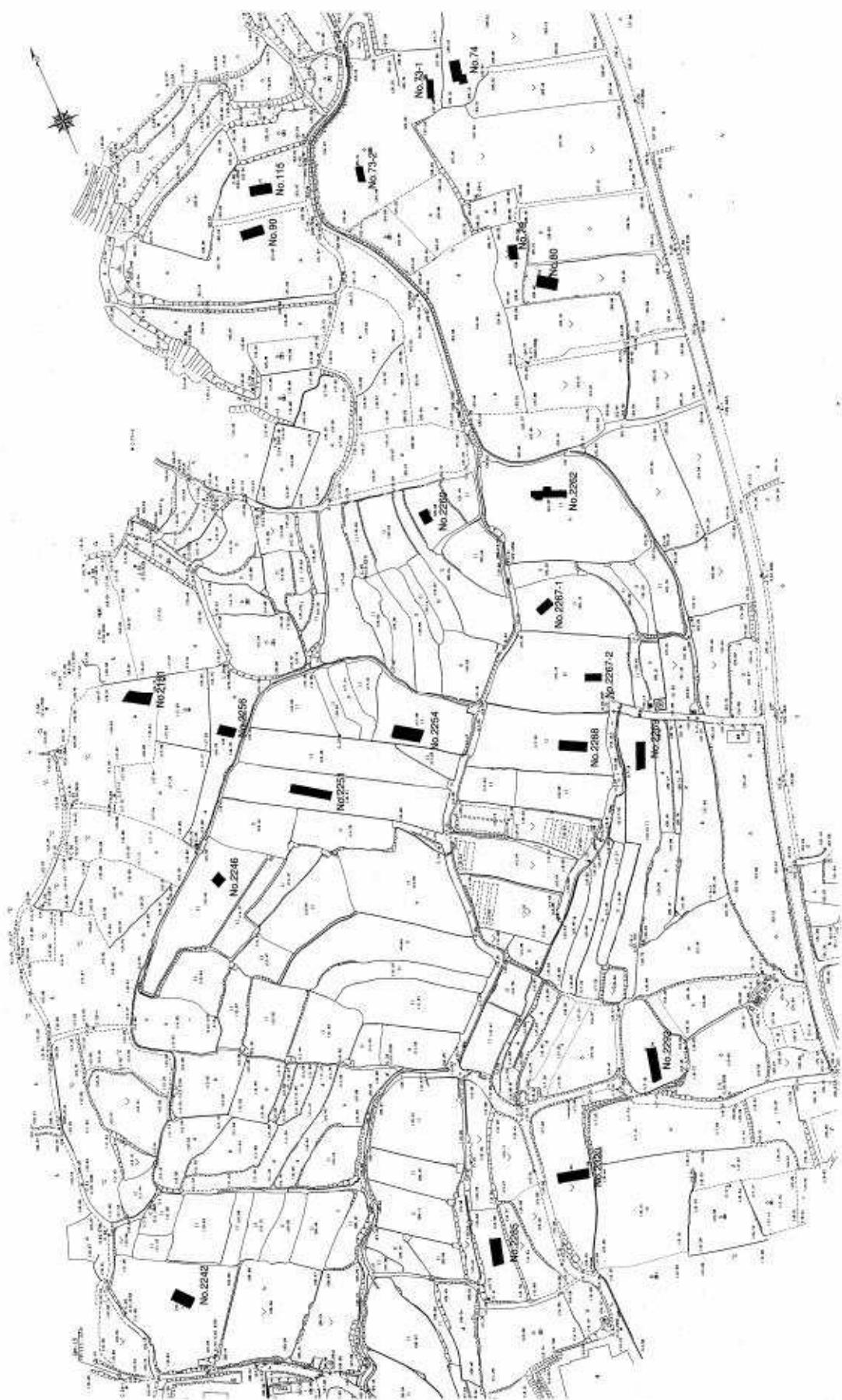
各年次の調査体制は、以下のとおりである。

第1年次（平成11年度）	第2年次（平成12年度）	第3年次（平成14年度）
教育長 立山 司	立山 司	前田 重寛
教育次長 田嶋 将	田嶋 将	田鶴 俊明
文化課長 國井 政武	國井 政武	下川 政子
課長補佐 山口 廣義	山口 廣義	山口 廣義
調査担当 秀島 貞康	秀島 貞康	秀島 貞康
	川瀬 雄一	川瀬 雄一
		古賀 力
		橋本 幸男
調査協力	竹中 哲朗（県文化財調査員） 松崎由紀子（県文化財調査員）	古門 雅高（県文化財保護主事） 樋口健太郎（県文化財調査員）



第6図 本調査トレンチ配置図

0 50m 100m



第7図 1・2年次トレンチ配置図 (S-1/2,000)

IV. 遺構

1. 1区、2区の土層 (第8図、図版)

1区は南北約240m、東西70mの調査範囲で、3枚の田と畑である。本来は緩い丘陵地であったものを、長年にわたって耕地化したもので、田と畑の間を開用水が貫流している。田は面積狭小の複数の田を1枚にしているが、遺構の残存状態は良好であった。一方、畑のほうは昭和30年代頃の耕地の改良によってかなりの程度破壊されていた。

第8図にA～Iトレーニングの南北方向の土層断面図を掲載している。F区では基盤部分は水平位に保たれ、水田面であったことを示している。この面からはコンニャク判の白磁染付皿が出士しており、18世紀頃以降にマチナオシが行われたことを示している。

開田自体は用水との関係からかなり古くに遡ることが想定されるが、耕作の効率化を測るマチナオシは江戸時代に下ってからのことと推測される。

同じく畑のV～Z区の土層図を掲載している。表土下50cm程まで搅乱され、遺構の残り具合は僅かであった。

2区は現耕土下が遺構検出面となっており、土層の発達は貧弱であった。

2. 1区の遺構

①建物遺構

本遺跡では多数のピットが出土した。その多くが建物用の柱穴と思われたので、その平面形の復元を試みた。特に1区のH4トレーニング付近では腐食した柱材やその痕跡を含む柱穴が整然と並んで出土し、大型建物が想定された。また2区ではF3トレーニングを中心に多数の柱穴が錯綜して出土したが、ここではようやく3棟の建物に分解することができた。但し、明らかに柱穴と思われるピットや遺物の出土したピットのうち、建物に含まれずに残っているピットも存在する。

本遺跡で建物として取り上げたのは、上記のほか残存状況が極めて悪いものも含めて、1区で29棟、2区で12棟の計41棟であり、すべて掘立て柱の建物であったと判断される。またこれらの建物に伴うような瓦は出土しておらず、瓦葺の建物はなかったと思われる。

各建物の方位は桁行の方向を示しているが、部分的に出土した建物の桁行の方向は筆者の推定による。

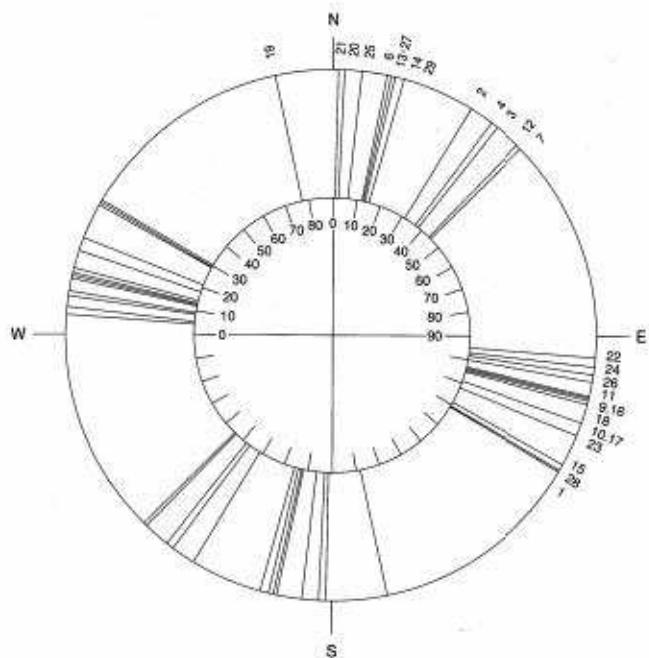
柵列については確定できるものが少ないが、建物に近接している場合はその建物の項で隨時取り上げることとした。

建物の方位について (第1表)

1区の建物全29棟に共通するデータとして各建物の長軸(桁行)の方位を図にしてみた。これによれば、長軸が南北にある建物は14棟で、そのうち北～北東にあるものが13棟、北北西に

あるものが1棟に分かれる。13棟のグループもさらに真北に近い3棟、NE $12^{\circ} 30'$ 付近にある5棟、北東方向に近い5棟に分かれるようである。最も東へ傾いた建物の方位はNE $44^{\circ} 30'$ であり、これ以上東へ向いた建物は出土していない。

長軸が東西方向に来る建物は15棟であり、NE $12^{\circ} 30'$ の 90° 折り返しになるNW $77^{\circ} 30'$ 付近にまとまりがある他は有意のグループに分けにくい。但し、東西方向にある建物の方位にはブレが少なく、 25° 以内に15棟の方位が収まっている。南北方向の場合は 45° の範囲に13棟が収まっている。



第1表 建物主軸分布図・表

建物1～4・28は、1区の南西角で出土した。これらはほぼ同一平面上にあって互いに近接しており、ひとつのグループとして捉えられるようである。また居住用としての建物は建物2のみと思われるが、この付近は単なる居住区というよりは、建物が小さいことや柵を伴う建物があることなどを考慮すれば、家畜の飼養等に関連する施設のおかれた場所として理解すべきかもしれない。

建物1（第9図、図版3-1）

A1、B1トレンチにまたがっている。後出の建物2・建物28と重なるが、先後は不明である。ただ建物28とは方向がほとんど同じで、大きさも似通っていることから、建て直しの関係にあると思われる。

4.4×4.4mの正方形であり、方位は、NW $59^{\circ} 30'$ である。西・北・南の3方向で2.0m、2.4mの柱間が用いられている。

建物28（第9図、図版3-1）

方位はNW $59^{\circ} 30'$ 。建物1をそのまま東へずらした位置にあるが、4×3.8mと建物1に比べ、やや小さい。建物の東・南側では中間の柱穴が検出されなかった。

建物2（第9図、図版3-1）

建物1、建物28に直行する南北に長い建物で、方位はNE $31^{\circ} 00'$ である。桁行4間（9.6m）、梁行（梁間）2間（4.2m）を測る。南側の梁行は4mで2m×2mに分割されている。北側の梁行には中間の柱が検出されていない。桁行の柱間は南から2.4m、3.2m、2m、2mとなっている。

建物3（第9図、図版3-1）

建物2の北東角に近接している。方位はNE $38^{\circ} 00'$ 。桁行2.2m、梁行1.6mのごく小さな建物である。桁行には、はす向いに1mと1.2mの位置に柱が置かれている。またこの建物の東側に、直角を構成するピットがあり、その中のB2-7ピットからは、炭と焼土が出土している。建物3と同規模の建物の一部かとも思えるが、長方形を構成するための柱穴が1個不足しているため、建物番号を付けていない。

建物4（第9図、図版3-1）

C2、C3トレンチにまたがっている。桁行2間（3.4m）、梁行1間（2.0m）の小さな建物と思われるが建物の規模に比べ、柱穴がしっかりしている。方位はNE $36^{\circ} 30'$ 。建物の西側に沿って、長さ1間（2m）の柵状の構築物が付属していると思われる。さらに、その東側には1間（2.0m）+1/2間（1.0m）の柵状の構築物が認められる。

建物5～12は前述の建物群より北側の上段にあるグループであるが、西側にある建物7～12と東側にある建物5・6との2グループに分けられるようである。両者の間には約20mの間隔がある。

建物5（第10図、図版4-1）

C6トレンチにあり、桁行は東西方向と思われる。方位はNW $75^{\circ} 30'$ 。東側は調査区外であり不明。桁行4間以上、梁行3間（柱穴が検出されていないので、2間かもしれないが）の主屋（身舎）の四面に廂を巡らせた形状と思われる。さらに主屋の内部には2間（4.0m）×1間（2.0m）の区画があり、北側には、玄関様の張り出し部が認められる。建物6と共に、本遺跡出土の建物の中では古い様式を残した建物と思われる。主屋の桁行は2.0mの柱間を連續させている。廂の北西角は、所定の位置に柱穴が掘れなかったと思われ、西側へずらしている。また廂の南西部はさらに東へ続くようなピットの出土状況であるが、削平を受けており明確ではない。

建物6（第10図、図版4-1）

D6トレンチにあり、桁行は南北方向と思われる。北側及び東側は、調査区外等の事情で不明。建物5とほぼ直交し、南端が一部重なっている。方位はNE $12^{\circ} 00'$ である。調査では2面しか確認できなかったが、建物5と同様に四面廂の建物になると思われる。梁行は3.2m（2間）であり、桁行は1間分しか確認できないが、3.2m毎に柱があると推定される。西側に玄関様の張り出しがある。

建物7（第11図、図版4-2）

D2トレンチにあるが、北西側の大部分が削平を受けている。推定される桁行の方位はNE $44^{\circ} 30'$ で北東方向を向いていたと思われる。梁行は3間のように見えるが南東側の1間は廂と見るべきかもしれない。その場合は片廂の建物であったことになる。

建物8（第11図、図版4-2）

D 3 トレンチにあり、桁行は北西—南東にある。方位はNW $60^{\circ} 00'$ 。柱間0.8mを多用した柱の密度の高い建物である。桁行5間(4.9m)、梁行4間(3.4m)の建物といえるが、北側桁行の柱芯間は0.8、0.8、1.4、0.8、0.9mであり、東側梁行は0.8、0.8、0.8、1.0mであつて、本遺跡出土の建物跡の中では特異な柱間隔を持つ建物である。なお建物の南側には、建物に平行した柱芯間1.4mの柵状の構築物が付属すると思われる。建物との距離は0.6mである。

建物9（第12図、図版4-2）

E 3 トレンチにあって、東西方向が桁行と思われる。北側は水田の造営によって失われている。方位はNW $77^{\circ} 30'$ 。桁行は3間(7.2m)、梁行は不明。

建物10（第12図、図版4-2）

E 3 トレンチにあって、建物9に近接し、且つ方向がほとんど同じである。方位はNW $76^{\circ} 30'$ 。桁行3間(6.9m)、梁行2間(5.0m)の建物と思われるが、梁行は2間半とすべきかも知れない。建物の南側には廂用と思われる柱穴列がある。

E 3-2ピット、E 3-8ピットから土師器皿が出土している（第34図9・3）。

建物11（第13図、図版4-2）

建物10に重なっているが、柱穴の切りあいがなく、それぞれの建物に伴う遺物もないことから先後の判断ができない。ただ建物11の柱穴には抜き取りによる乱れが見られ、建物11の方が先行する可能性があると思われる。方位はNW $80^{\circ} 30'$ 。桁行は5間(9.8m)まで残っているが、7間まで延びる可能性がある。梁行は3間(6.8m)で、その中央に棟持柱を通している。

東側には、狭い間隔で2重の拡張があり、北側には廂状の柱列があるがE 3-24ピットとE 3-46ピットの間で若干の食い違いがある。南側にも幅の狭い廂状の柱列がある。

直接この建物に伴うとは言えないが、建物11の敷地内にあるE 2-15ピットから青花が出土している（第34図14）。

建物12（第13図、図版4-2）

D 3 トレンチ。建物11の南東側角の外側に、ごく小さな長方形をなすピットがあり、建物12としたが、建物とは言えないかも知れない。1.6m×0.5mの大きさである。方位はNW $14^{\circ} 00'$ 。

建物13~19・29の8棟は、前グループより一段上の、一枚の現行水田の基盤下からの出土であり、出土面の標高はほぼ同じである。やや時代が降ると判断した建物15を除き、互いに何らかの関連性を持つ建物群と思われる。

建物13（第14図、図版5-1）

建物13はG 4、H 3・4、I 3・4 トレンチにまたがって出土した。この建物の柱穴は保存状態が良く、柱材の跡や腐朽した柱材の一部が残る柱穴が複数存在した（図版13-6~8）。それによれば、柱材の先端は必ずしも平坦に加工されたものばかりではなく、やや尖ったものも使用されていたことなどわかる。

建物の平面形は南北が長い鍵形（曲家形式）になっているが、北側の東西に長い5間×2間

の建物と、南側の南北に長い4間×3間の建物を1.8mの間隔を置いて接合した結果、南北7間（15.6m）、北側の梁行5間（10.0m）、南側の梁行3間（6.0m）の鍵形の建物になったもののように見える。長軸の方位はNE $12^{\circ} 30'$ である。

なお建物の北側の東西に長い部分と次に述べる建物14を比較した場合、建物14を長軸で0.2m、短軸で0.4m短縮すると桁行の柱がほとんど重なることとなり、両者に共通性が認められる。柱穴の保存状態などを比較すると、建物14のほうに痛んだ柱穴が多いことから、建物13の北側の部分は建物14を移築した可能性もあると思われる。建坪は建物13が約107m²、建物14が55m²である。

柱穴に伴う遺物としては、G 3-1 ピット・H 4-6 ピットから共に石臼が出土し接合した（第34図19）。H 3-4 ピットの底部からは青花小片（第34図11）、H 3-5 ピット・H 4-2 ピットからは土師器皿（第34図4・2）が出土し、H 4-16 ピットからは弥生土器が出土している（第34図17）。

建物14（第15図、図版5-1）

I 4・5、H 4・5 トレンチにあり、桁行の方位はNE $13^{\circ} 30'$ 。桁行5間（10.2m）、梁行2間（5.4m）の建物である。西側の桁行はさらに北へ3間延びるような柱穴が見られるが、それに対応する梁行の柱穴は認められない。さらに北東角の外側には直角を構成する柱穴があり、この建物に関連があると思われるが明確にはできなかった。

この建物にはH 5-10 ピット等、抜き取りによる破壊を受けたと思われる柱穴が多く、当初土壌として掘り進めた結果、最終的に柱穴と判断したピットもあり、多くの柱材が再利用されたものと思われるが、柱材が腐食した状態を観察できる柱穴（I 5-5）も存在する。

遺物としてはI 4-35 ピットから青花（第34図12）、H 4-18 ピットから滑石製小玉（第40図120）、H 5-1 土壌8から朝鮮系かと思われる甕（第34図18）が出土している。

建物15（第16図、図版5-1）

H 4・5、I 4・5 トレンチの交点付近にあり、方位はNW $68^{\circ} 30'$ である。桁行3間（6.8m）、梁行2間（4.6m）。建物13・14と重なるが、前2者に比べ柱穴が小さくて浅い。直接年代を示す資料は出土していないが、近世まで降る建物かもしれない。なお、この建物に属する柱穴の3割から炭化物・焼土の両方が片方が出土している。

建物16（第16図、図版5-1）

建物14の南東にあり、桁行の方位はNW $77^{\circ} 30'$ で、No13・14建物とはほぼ直行する位置関係にある。桁行3間（6.6m）、梁行は西側が3.6m、東端が3.7mとやや東側が広い。南側の桁行は2.2m毎の等間隔に柱が置かれているが、北側の間隔には少しばらつきがある。南北とも桁行には歪が見られる。

またこの建物の桁行を西へ延長すると建物14の南東角の柱穴に当たることから、二つの建物が連結されていた可能性もあると思われる。両者の間隔は2.4mである。

建物29（第16図、図版5-1）

建物16の中央にみえる矩形を独立させて建物29とした。桁行2間（3.2m）、梁行2間（2.0m）の小規模な建物であり、それぞれ片方の間柱を欠く。4隅とも90°にならず歪んでいる。

建物17（第16図、図版5-1）

建物16の南に位置する。建物14とは2.4m、建物16とは2.0m離れている。東側が後世の搅乱で失われているが、東西に長い建物であったと推定される。残っている桁行は2間で、1.6m置きの柱穴がある。梁行は2間で4mの幅である。方位はNW76°30'で建物16に平行している。

建物18（第17図、図版5-1）

G5トレンチにあり、建物17をすべて覆うように重なっている。方位はNW77°00'でほとんど同じである。主屋の梁行は2間（3.8m）で、桁行は1.5m毎の3間分が残るのみである。北側に2.2m幅の縮が付くように見えるが、あるいは鍵形に建物が追加されている形状かもしれない。東側の削平によって全体の形が想定しにくい残りかたである。

建物19（第17図）

F6トレンチにあるが、全般に削平が進みピットの残りが悪い。北西角は消滅したものと思われる。南東角は現行の水路に近いため、検出されていない。桁行は推定で4間、梁行は2間と思われる。方位はNW12°30'である。南北方向に建てられた建物のうち、桁行の方位が真北より西へ傾くのは、この建物19のみであるが、地形の制約によってこの方位を取らざるを得なかつたのではなかろうか。

建物20・21は前グループとは違い、東側の現行畑作の耕地で出土し、削平がより進行している。

建物20（第17図）

I7トレンチ出土。東から西へ傾く斜面にある。傾斜角は4～5°。方位はNE2°30'で、真北あるいは当時の磁北のどちらとでも言えるような方位である（註1）。桁行3間（6.2m）、梁行2間（4.0m）であるが、東側の桁行は6.6mと西側の桁行に比べ0.4m長い。

遺物としてはI7-3・15ピットから土師器皿が出土している（第34図10-1）。

建物21（第17図）

I6トレンチ出土。建物20の西にあり、柱穴3個が一直線に並ぶのみである。方位はNE1°00'で真北に近い。南端のI6-3ピットは、建物20の南側梁行の延長線上に当たり、何らかの関連性をうかがわせる。

建物22・23は、建物13を中心としたグループの北側の斜面に立地する。標高は北のほうが高い。敷地の造成の程度は低いと思われる。

建物22（第18図）

L2～L3トレンチの南下がりの斜面に立地する。桁行の方位はNW80°30'で略東西に向いている。桁行3間（6.2m）、梁行は2間であるが西側は4.8m、東側は5.0mである。全体的に柱が直線上に並ばず、歪んでいる。L3-3ピットから陶胎染付（第34図13）が出土している。

建物23（第18図）

M4トレンチにあるが、建物の主要な部分は東側の調査範囲外にあると思われる。出土した柱穴が少ないため全体の形状を想定できないが、暫定的に東西に桁行のある建物として方位等の計測を実施した。建物13に見られるような、柱材の痕跡や柱の周囲を固めた状況が観察できる保存状態の良い柱穴が含まれている。桁行と推定したラインの方位はNW71° 30'である。

M4-7ピットから土師器坏（第34図5）が出土している。

建物24～27は調査対象区の最北端で出土したグループである。調査トレンチの幅が狭く、建物の方位や全形を知るにはややデータ不足であることは否めない。

建物24（第18図、図版5-2）

Vトレンチ出土。桁行1.8m、梁行1.2mの極めて小さな建物である。方位はNW84° 00'であり、次に触れる建物25の桁行と直行するので何らかの関連があるものと思われる。以下建物25～27は南下がりの斜面に立地する。

建物25（第18図、図版5-2）

Wトレンチにあり、南北に長い建物と思われるが、幅の狭い調査区であることや、耕作による削平の進行によって不明な部分が多い。西側の桁行は1間（2.0m）置きに柱があるよう見え、東側の桁行想定ラインとあわせると桁行は4間ほど、梁行は2間半程度と想定される。方位はNE6° 00'となる。

建物26（第18図、図版5-2）

Zトレンチ出土。Zトレンチは今次の調査で設置した調査区の最北端にあたり、標高約128mの地点である。また2000年度に実施された試掘のうちの一つ（No74）と一部重なる。

建物は極めて部分的な出土であるが、南東角が現れているものと判断した。方位はNW81° 30'で、桁行の柱は2.2mと2.0mの間隔で置かれている。梁行は不明。

試掘時にZ-2ピットから土師器坏（第34図8）が出土している。

建物27（第18図、図版5-2）

試掘の段階で見えていた建物であり、建物26と重複すると思われる。これも部分的な出土であるが、南北方向に桁行のある建物と判断した。方位はNE12° 30'。柱穴は一直線に並ばず、多少の歪みがあるが、間隔はそれぞれ2.0mと一定である。梁行方向の柱穴は1間分のみの出土であるが、間隔は2.0mである。出土した柱穴列が建物全体のどの部分に当たるかは判断できない。

②池状遺構（第19図、図版3-2、8、9-1）

A3-4トレンチに展開する。地形的には浅い谷状地形の底に当たる。南半は田の造成により削られ半円状になっている。現存長8m、幅5.5m、深さ50～60cmを測る。池はまず大きな土壠を掘って周縁に石積みを行い、この石積みによって周囲との区画を行っている。石積みは

2～3段で野面石を積んでいる。石積みは基礎石に大きな石材を横位に諸所に使い、大きな石の間は一抱え大の石を小口積みしている。東から円弧状に西に伸びる石積みは中程を過ぎたところで、1mを越す大きな塊石で収束している。他方の石積みは南から北に9mほど伸びて収束している。この間は石積みが切れて、浅く弧状に段をなしている。池への進入路と推測される。また、東側の池の中には2mを超える大きな石を据え、まわりに5個の石を配置して景色を作っている。事実、調査中降雨により石積み上面まで冠水（図版9-1）しても、この大きな石は水面に顔を出していた。このことから、まわりの石の存在を勘案するとより低位に水位を設定・計画されたのであろう。

池への導水については今一つ判然としないが、小谷の底に立地する関係から雨水などは自然と池の周囲及び石積みの切れた部分から流入したと考えられる。また、後述ミゾ3は排水を兼ねて池へ導水したものと思われる。

池内には4層以下8層までの4層が堆積している。8層は平たく9層を凹ませたような状態で、池の東側に偏している。9層上面には大小の円弧状の落ち込みが無数に存在し、馬や家畜などの蹄の痕跡とも思われる。土層の堆積状況は水平位である。この池は馬や家畜の飲み水や清拭などのために貯水する機能を併せ持つ遺構と考えられる。

遺物はA4～7層から鉄滓、糸切り底の土師器の皿、こね鉢と思われる瓦質土器、招来品の可能性ある内外面鉛釉を掛けた盤と思われる破片などがあり、またA3トレンチの石積み周辺から内面青海波の当具痕を残す赤く酸化した陶器片が出土しており、後述Ⅰ期の所産と推定される。さらに池覆土5層を切り込んだミゾ1からは、小片ながら青花が1点出土しており、時期に関してさらに整合性を認めることができる。

③ミゾ状遺構（第20、21図、図版3-1、9-2）

3本検出された。いずれも遺存状態が悪い。

ミゾ1はC4トレンチからA4トレンチへと南北走するもので、幅は1m前後、深さ10cm程度である。小谷の底に位置することから、排水を促進させるものであろう。ミゾ内には拳大の安山岩礫が入っている。遺物は少なく、図化不能の青花が1点出土している。

ミゾ2はB5トレンチからA5トレンチへ流れるもので用水用の溝である。検出時はミゾ底に拳大の石が約1～2mおきに互い違いに配されていた。これは導水のコンクリート管を安定させるための支え石であり、B5トレンチでは2個1対で確認された。よってこのミゾは現代の所産であると理解された。

ミゾ3はB5トレンチからA4トレンチの池に排水を促進させる目的で掘られたものである。出土遺物がないため時期不詳であるが、上記のことから池掘削の時期に近い所産と見られる。

M列を西走するミゾは断面V字形を呈し、覆土は現代の耕作土で充填されており近時の所産である。しかし、周辺が昭和30年代の深耕・天地返しにより畑作りをしたもの、畑耕作時には溝が存在せず機能していなかったこと、この溝以北には建物24までの間遺構が立地せず、空

地であったこと、また連接する部分が調査区外にあることから、空地利用の防衛上の堀切か、何がしかの遺構の存在を想定しておきたい。

④ミゾ様遺構（第20図、図版3-2）

B3・4トレンチにコ字形に作られた遺構で、池状遺構の北10mほどに位置し、ミゾ1により切られている。遺構は溝状をなすものの、溝の途中に塊石があり流水させることは不可能であることから溝の機能を有するものではない。南北走する西側では石の抜き跡痕のような凹地が7箇所あり、本来石が配置されたことを想定すると、小さな方形区画の空地があったようである。ただこの部分には柱穴は存せず、東西に偏在する建物群を結ぶ機能を備えたものであったことを髣髴させる。

⑤土壤（第21、22図）

土壤1、2はB3トレンチにあり、現耕作土と床土を除去すると確認できる。ともに平面形は方形である。長軸1.1~1.2mほどで、断面は逆梯形である。底面形状が一段と二段と異なっている。遺物の出土は見られないが、土層の堆積状況から現代の所産である。

土壤3はB2トレンチにあり、略長方形の平面形状を示す。石の抜き痕であろう。

土壤4はC3トレンチに存在する不定形で浅い竪穴状の遺構である。周囲との区画は明確でない。底面には3本の柱穴があり、小規模の小屋架けが想定される。遺構内からの遺物は砂岩製の砥石がある。

土壤5はH4トレンチにある。ピット35を切る。楕円形の平面形状を示し、壁の立ち上がりもしっかりしている。覆土1の中に藁の炭化物を含むほかは、出土遺物なし。

土壤6は地山風化土の変色部であって遺構でないことが判明。土壤7は遺構ではなかった。

土壤8は建物14を構成する柱穴の1本で、機能廃止後多くの石でもって埋め込まれたものである。石材中には砂岩も混じり、また須恵器質の朝鮮系と思われる土器（第34図18）も含んでいた。

土壤9はH5トレンチにあり、耕作に支障のある大きな地山の石を掘り上げた現代の土壤である。

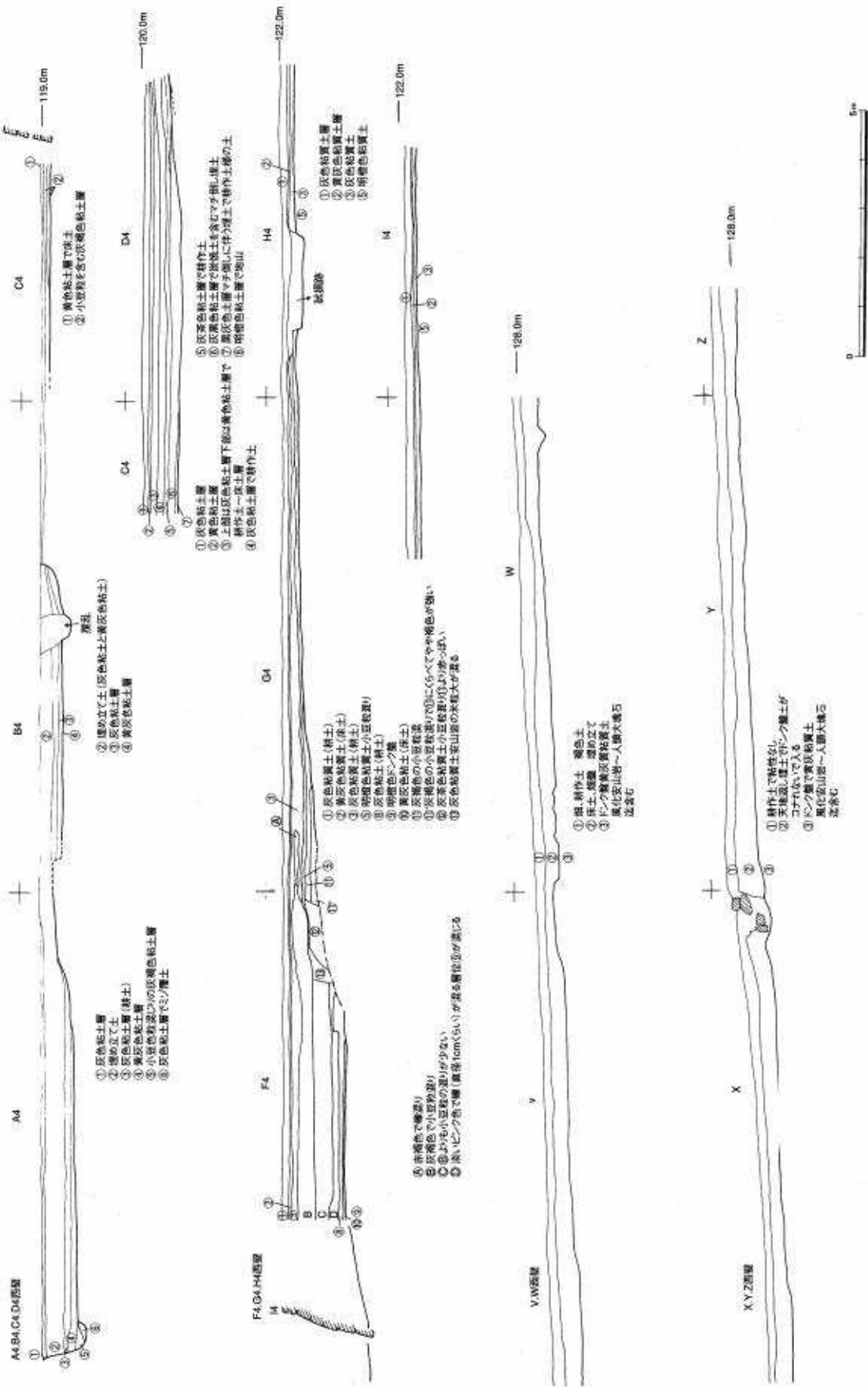
土壤10はI5トレンチにあり、尾和谷用水直南にある。1.1mほどの略円形で、地山の石、植物遺存体とともに陶器のすり鉢（第34図16）が包含されており、近世の所産である。

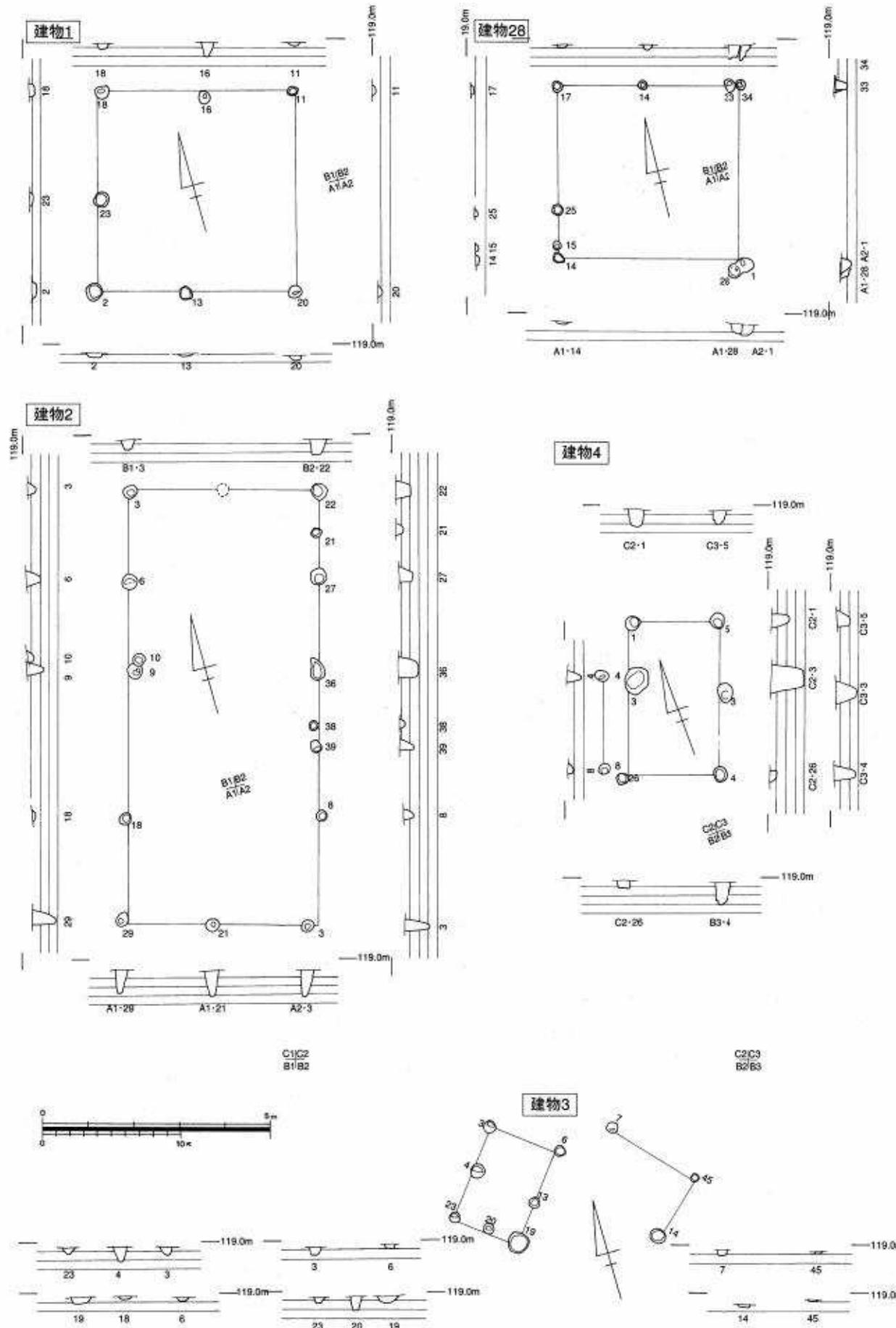
土壤11、12はG6トレンチにあり、ともに近世以降の石の抜き痕であった。

土壤13はM3トレンチにあり、1mの楕円形状で深度はほとんどない。本来はより深いものである。壙底から口縁部を上に向けて埋置された土師器の壺2個（第34図6、7）と、ガラス製小玉25個（第40図93~117）が検出された。地神に対する祭祀の存在と想起される。

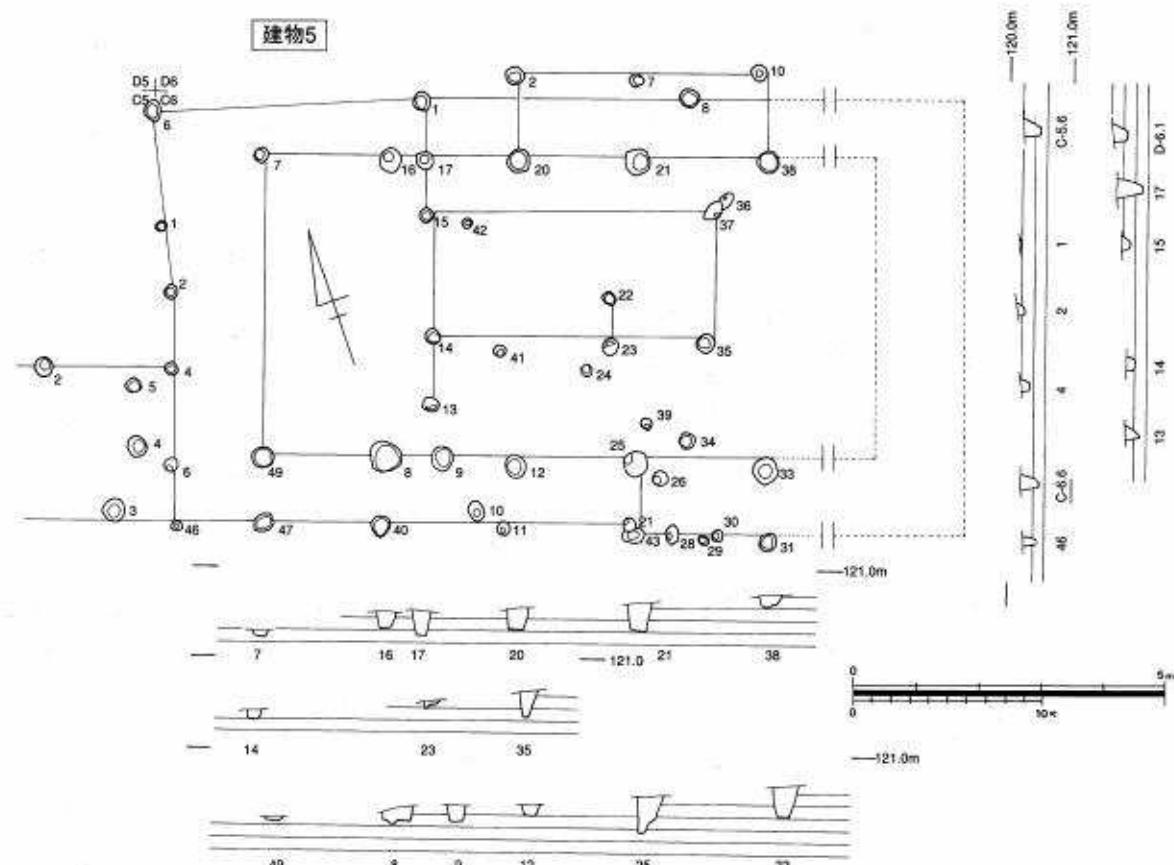
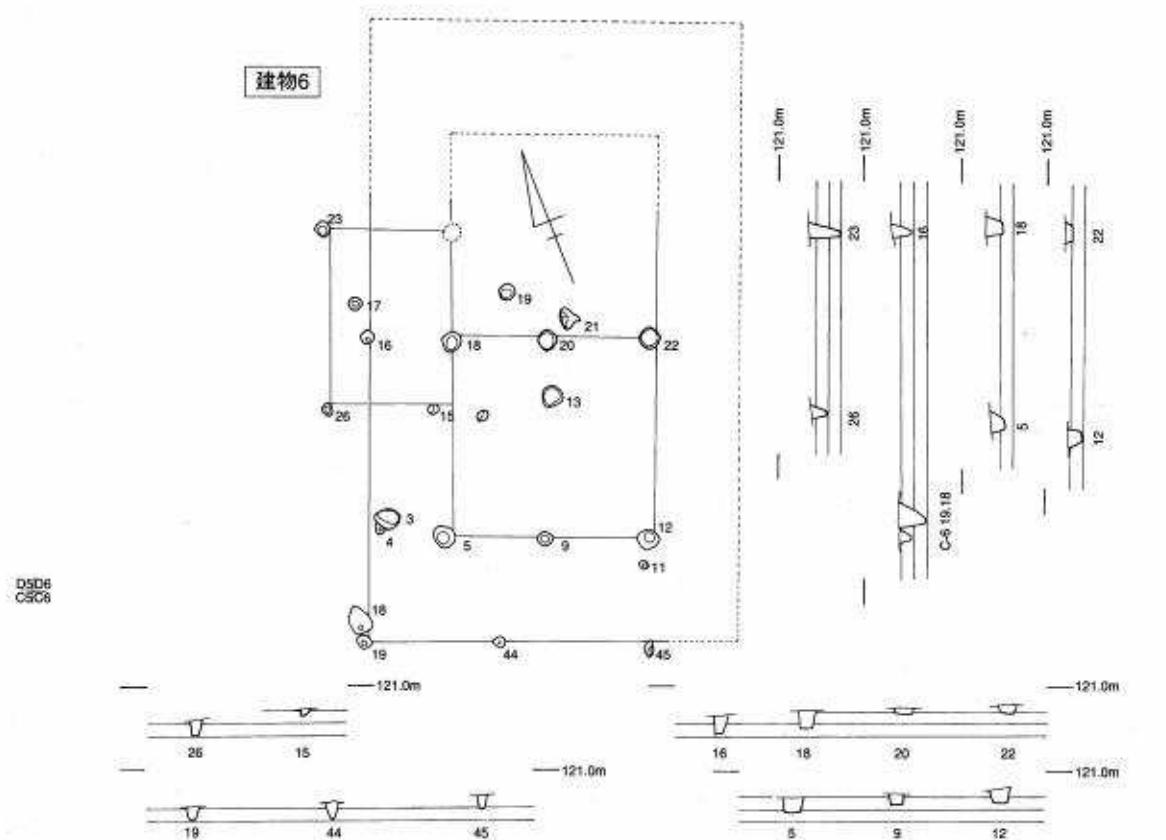
（註1）当時の磁北については、土師野尾古窯跡の調査時に検討されている。『土師野尾古窯跡群』諫早市教育委員会 講早市埋蔵文化財調査報告書第6集 1985

第8図 土層図



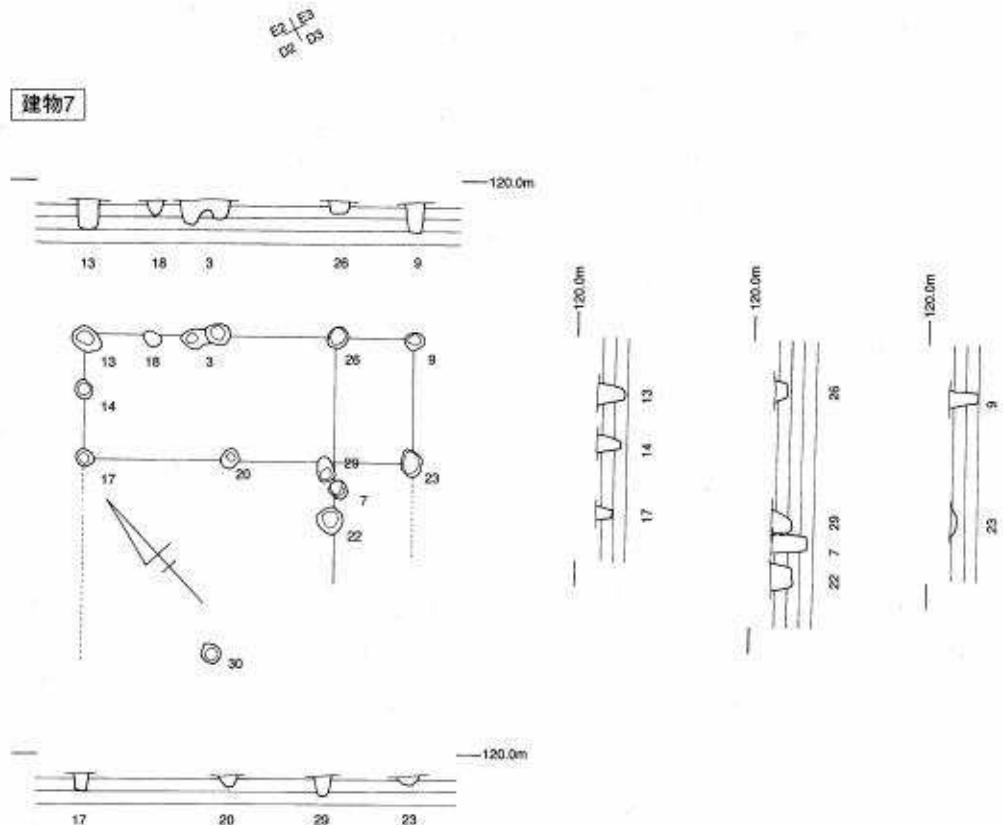


第9図 建物1、2、3、4、28

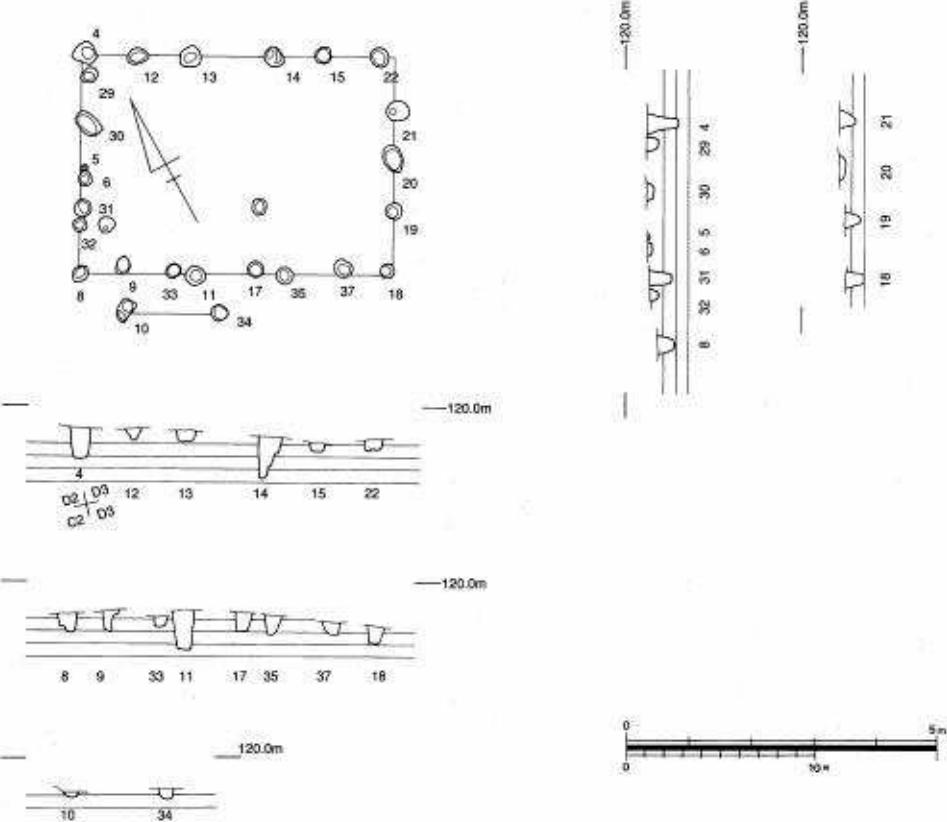


第10図 建物5、6

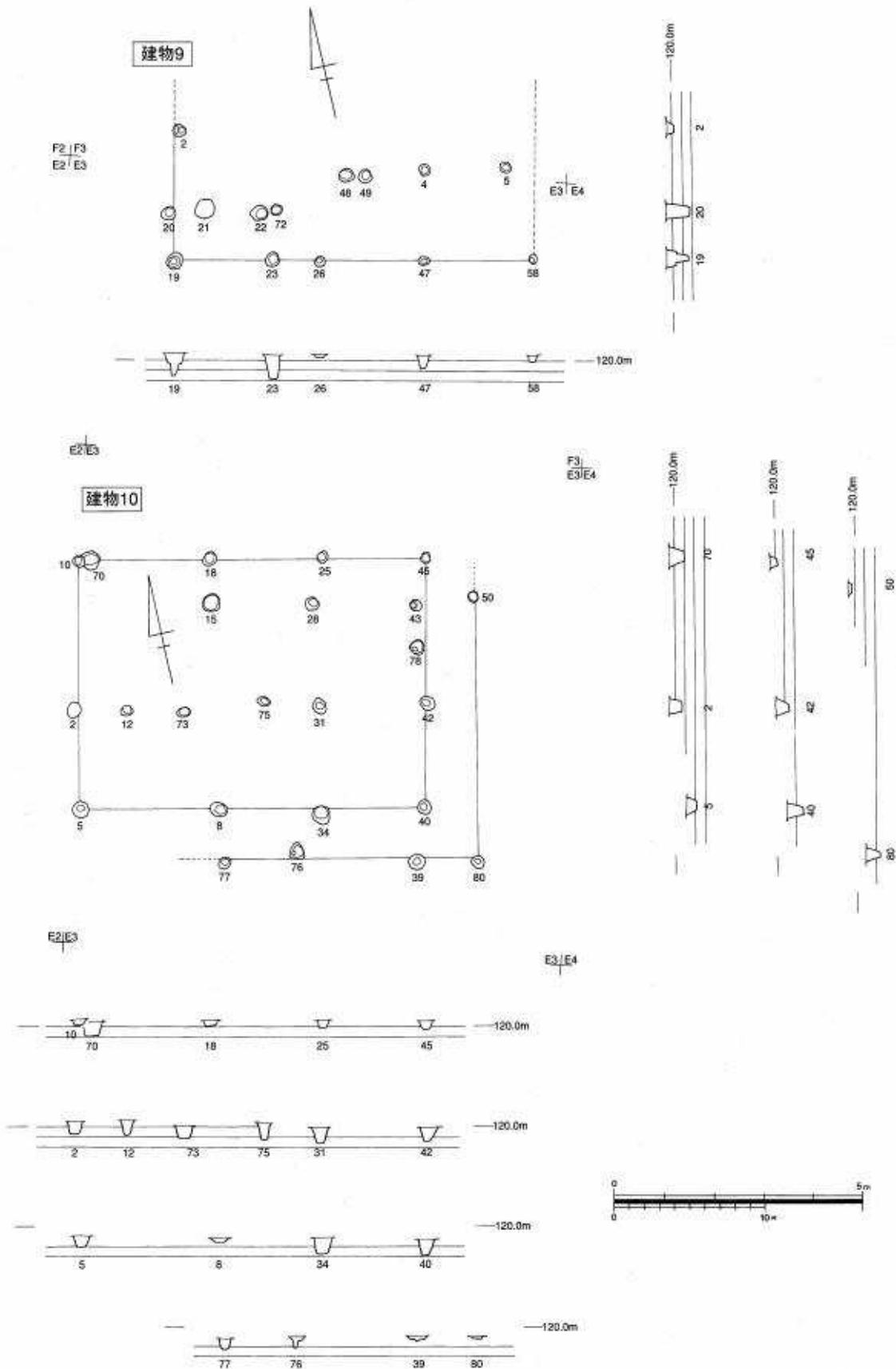
建物7



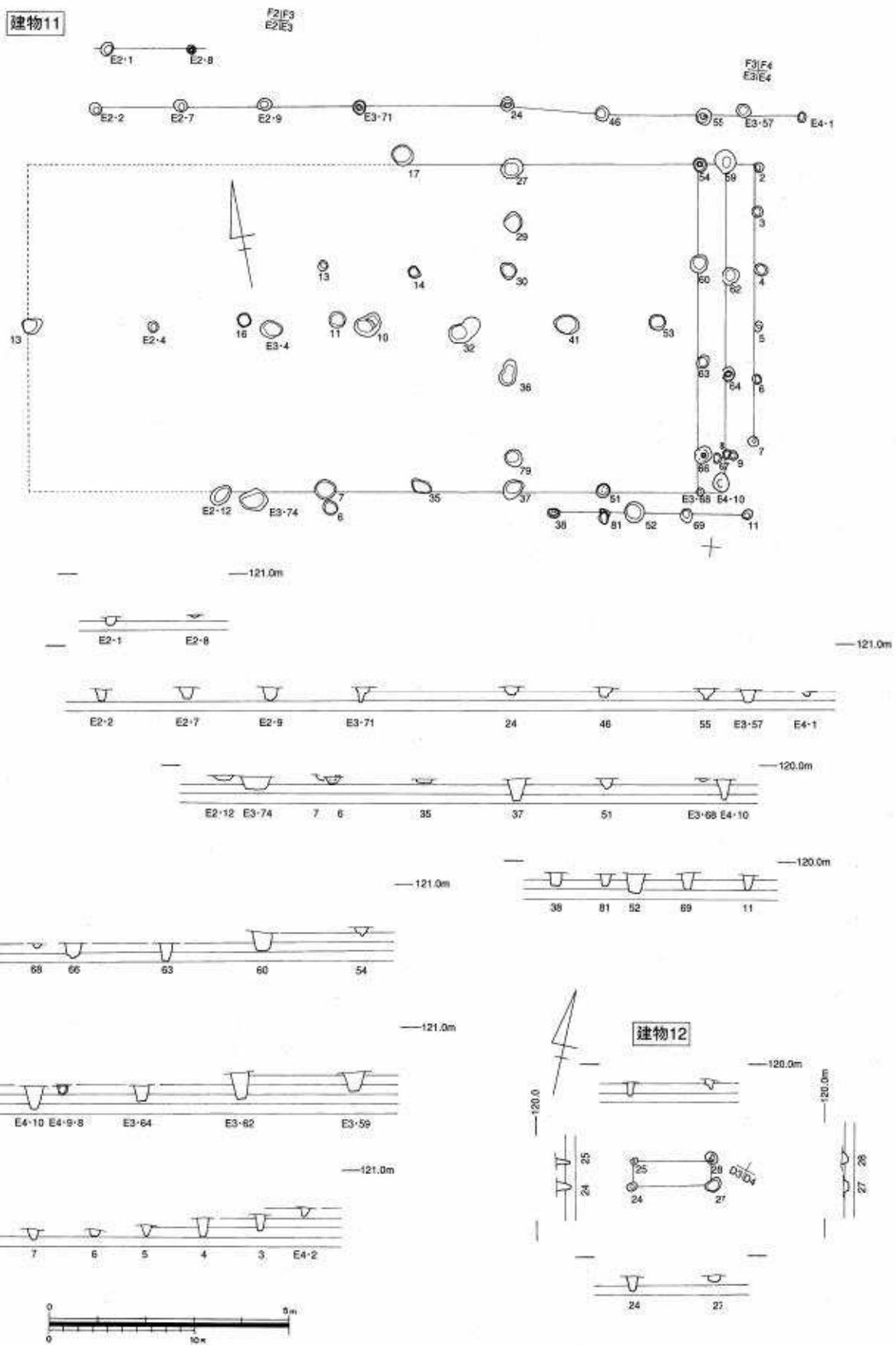
建物8



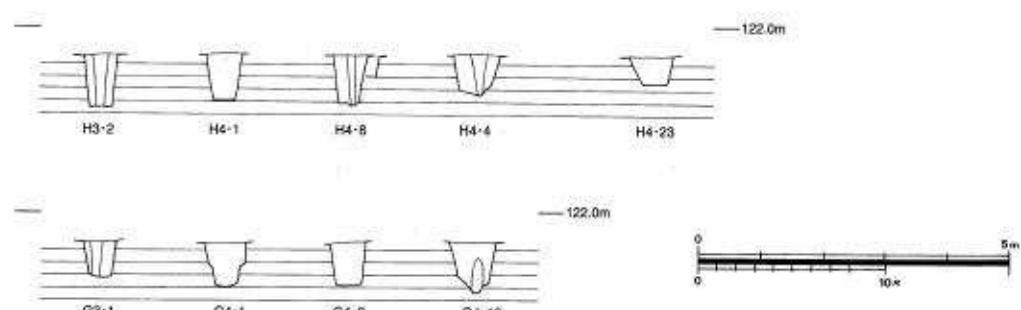
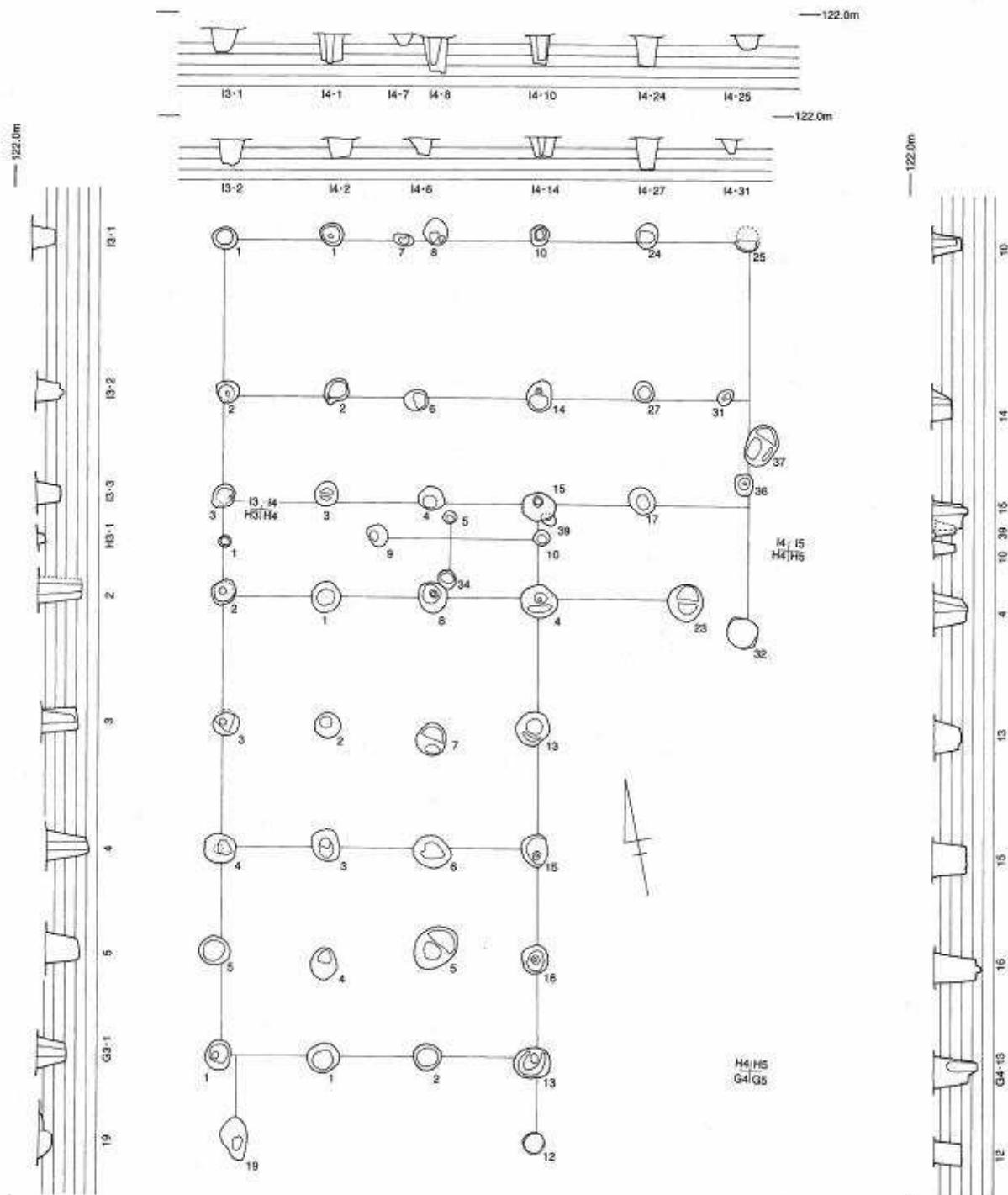
第11図 建物7、8



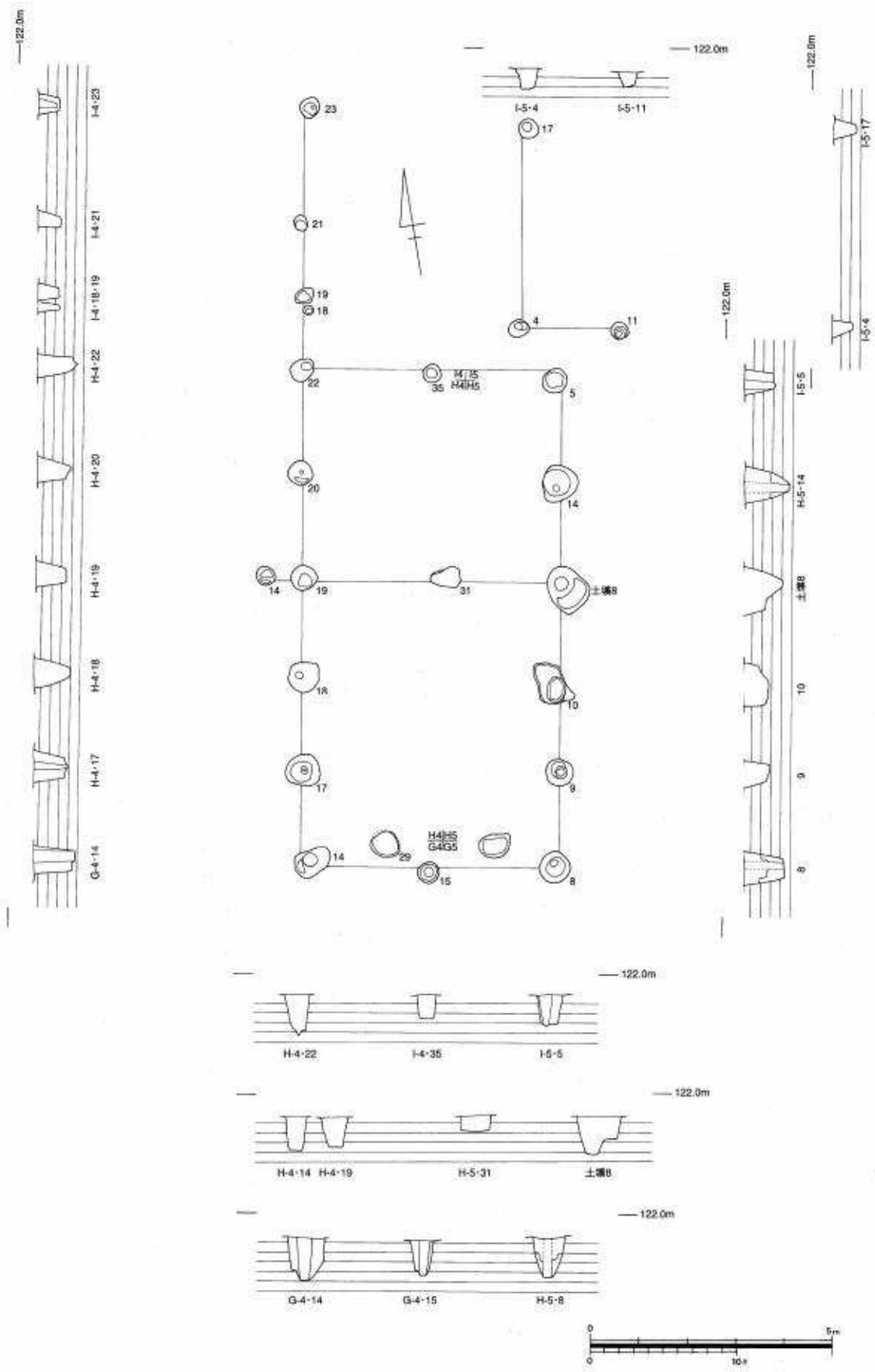
第12図 建物9、10



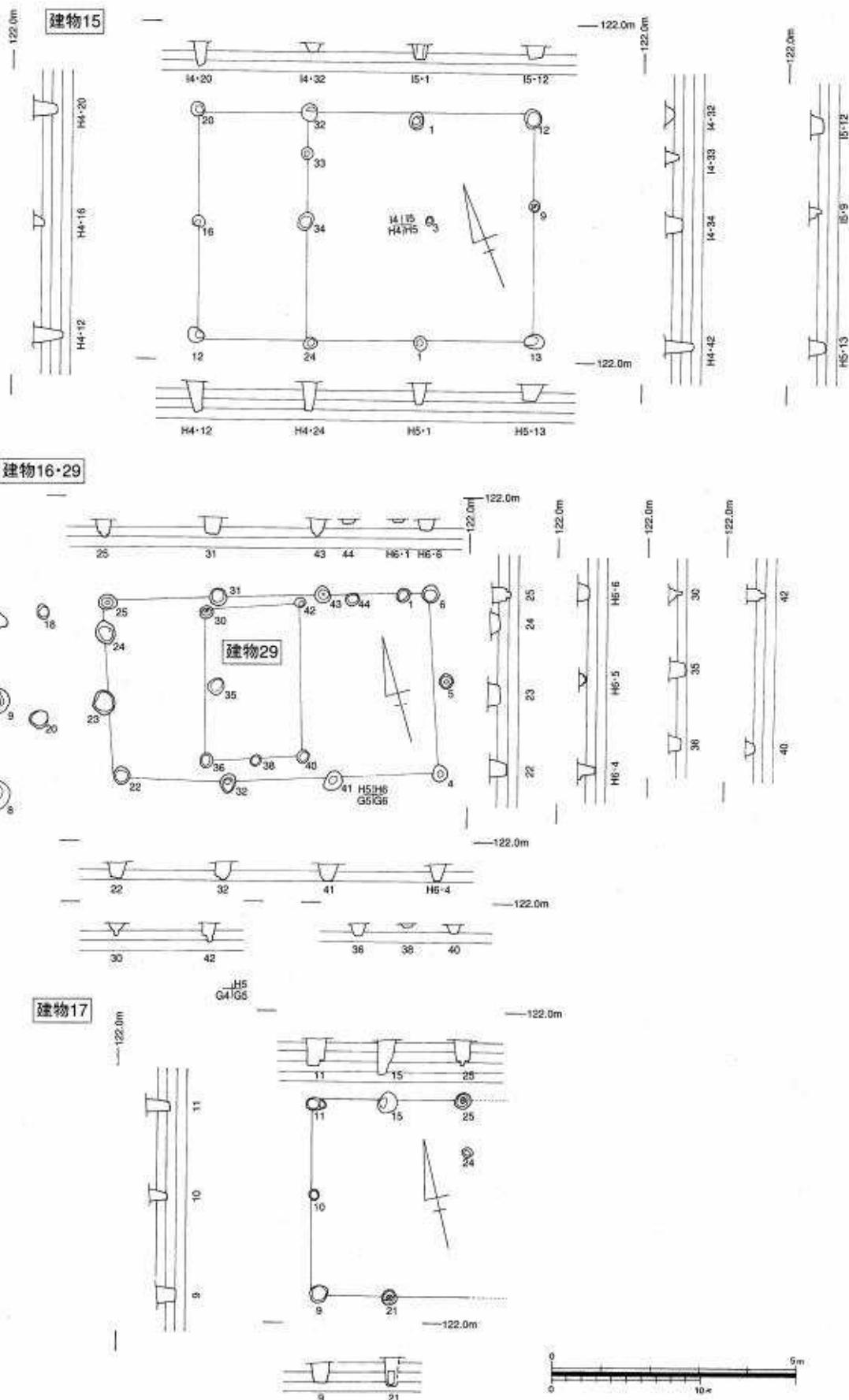
第13図 建物11、12



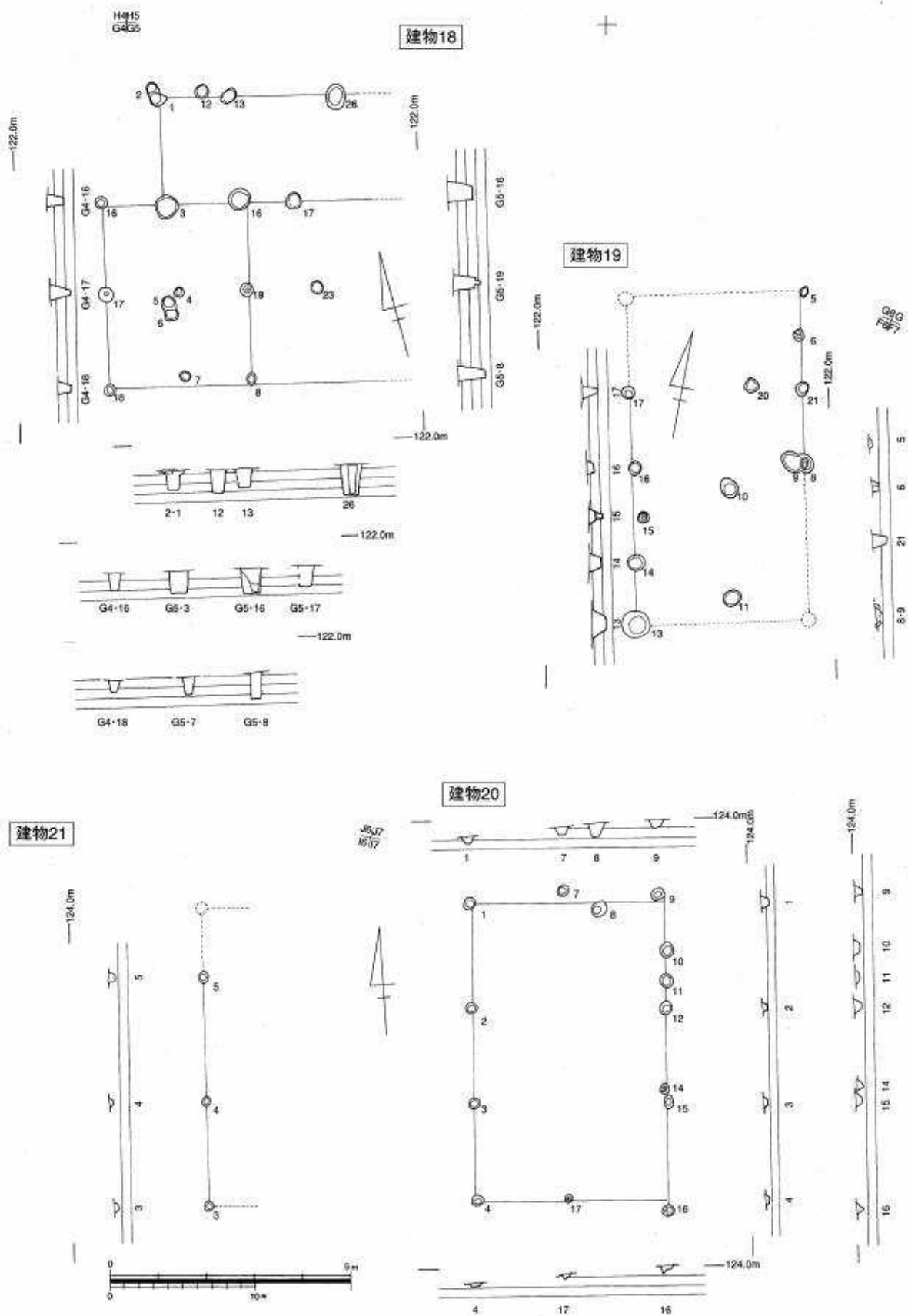
第14図 建物13



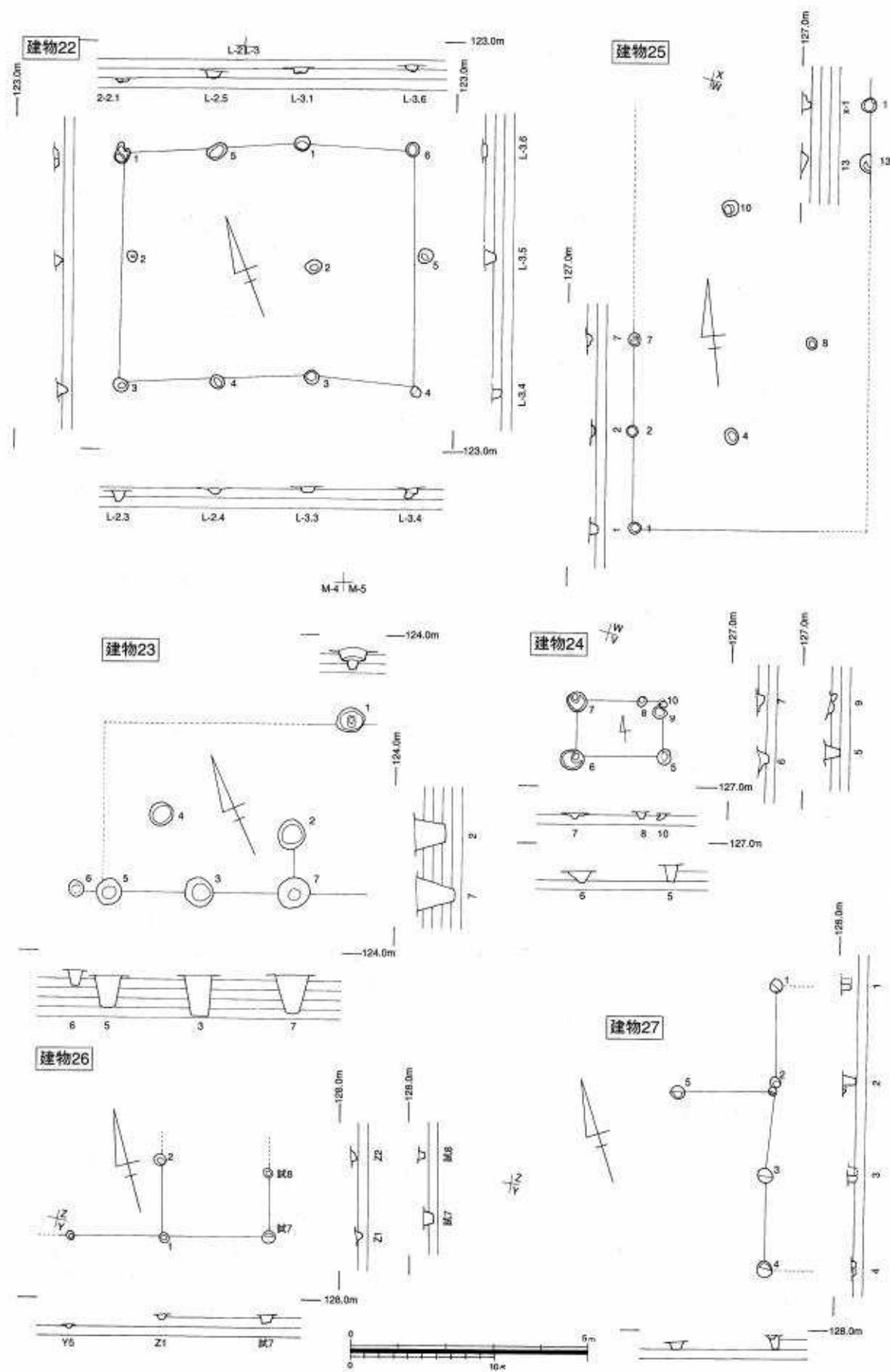
第15図 建物14



第16図 建物15、16、17、29

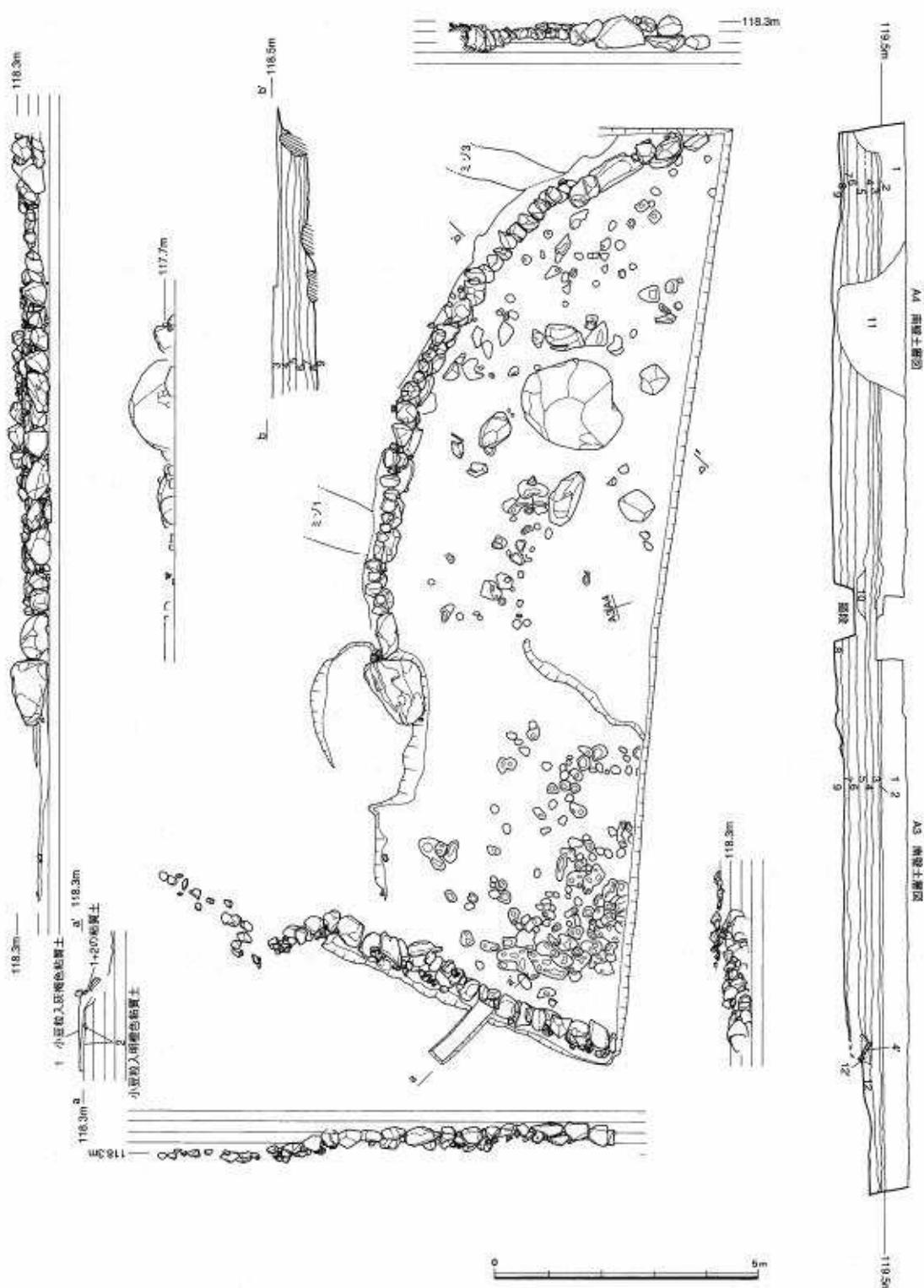


第17図 建物18~21

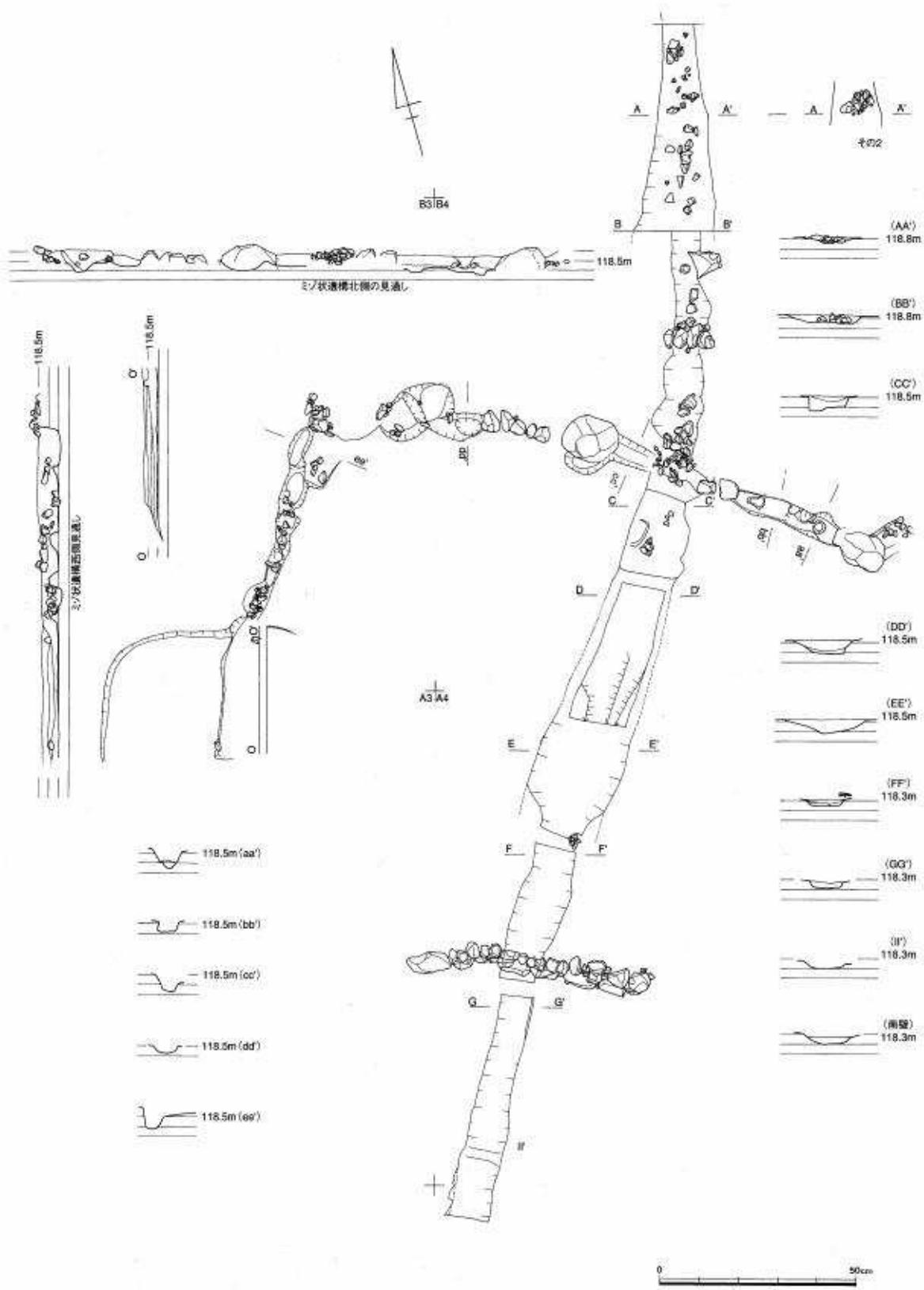


第18図 建物22~27

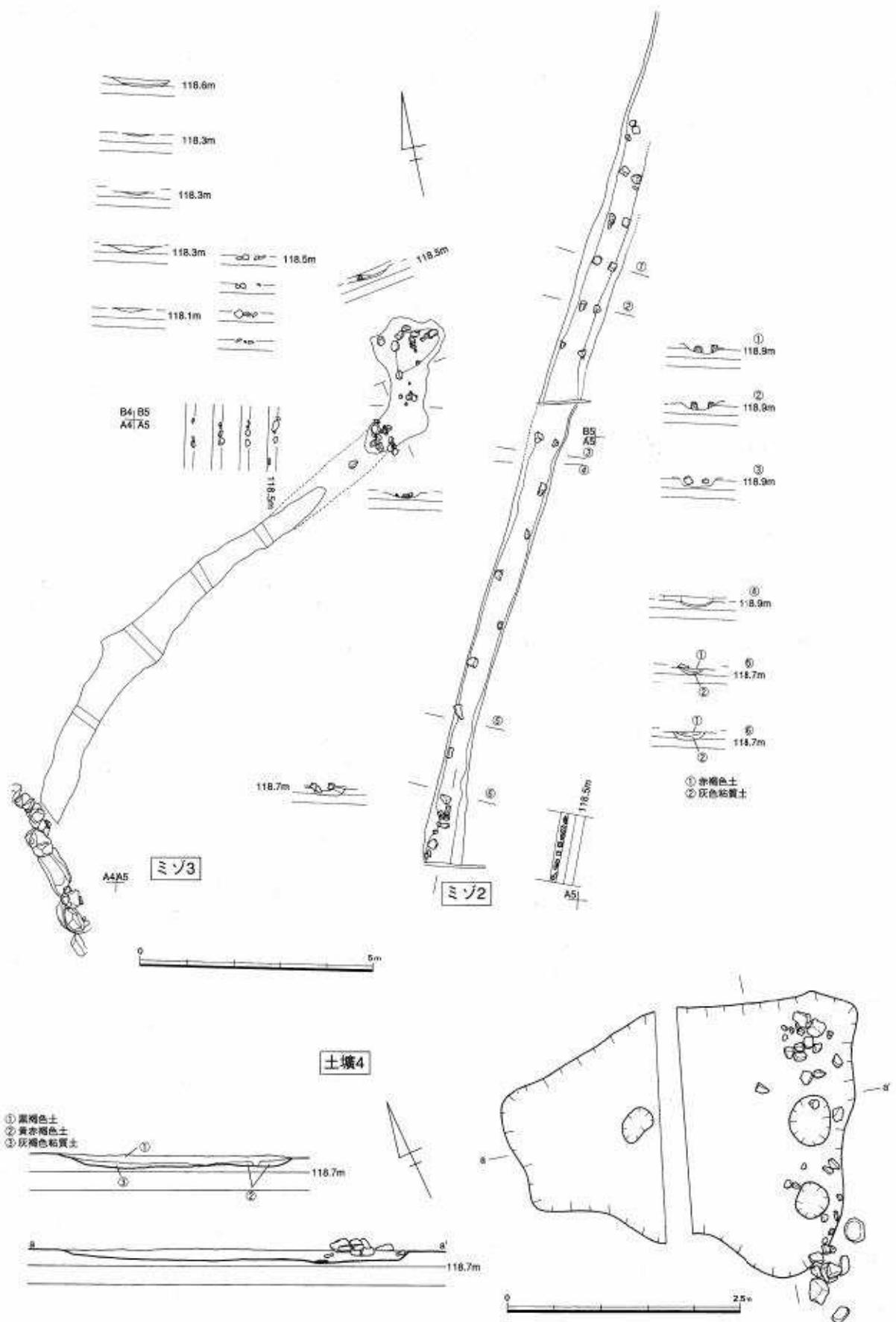
- 1 球土
- 2 灰色の粘土層(耕作土)
- 3 黄灰色の粘土層(Mg, Feを含む)
- 4 灰色の粘土層(耕作土)
- 4' 4よりも質地が強い
- 5 灰褐色粘土層黄色・白・茶の顆粒な(φが3~5mm)安山岩の粒子を含む。
- 6 淡い灰褐色粘土層 5より粘性が強い(マトリックスは均一で細かい)。
- 7 茶褐色粘土層
- 8 淡い灰黑色の粘土層 5~8には炭化物を含む
- 9 明褐色粘土層で火山灰か?
- 10 3'/(SD1)の層土で黄灰色粘土層
- 11 砂利層で災害復旧の裏込め
- 12 小豆粒入りの灰褐色粘土層
- 12' 12よりも灰褐色が強い



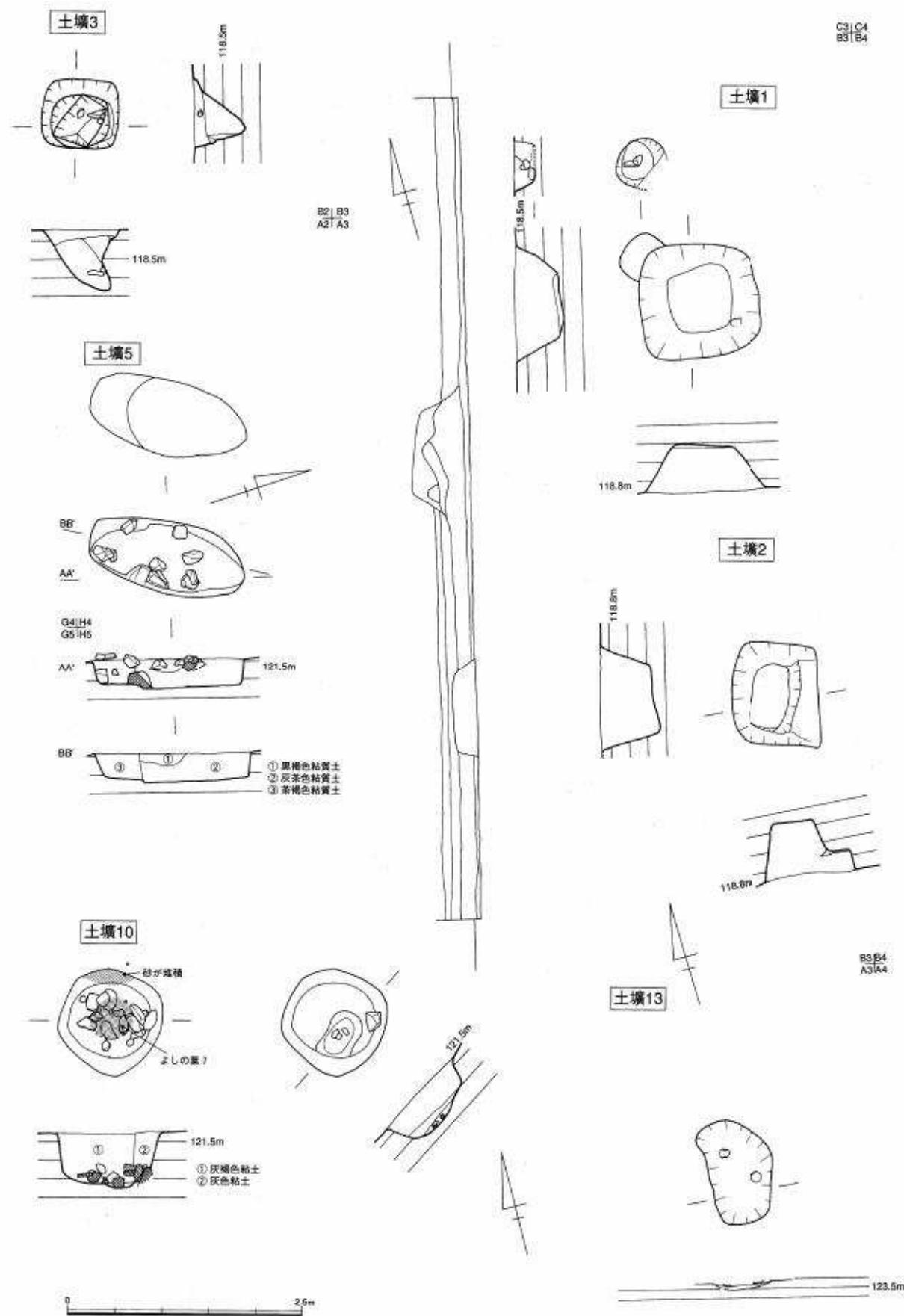
第19図 池状遺構



第20図 ミゾ1、ミゾ様遺構



第21図 ミズ 2、3、土壤 4



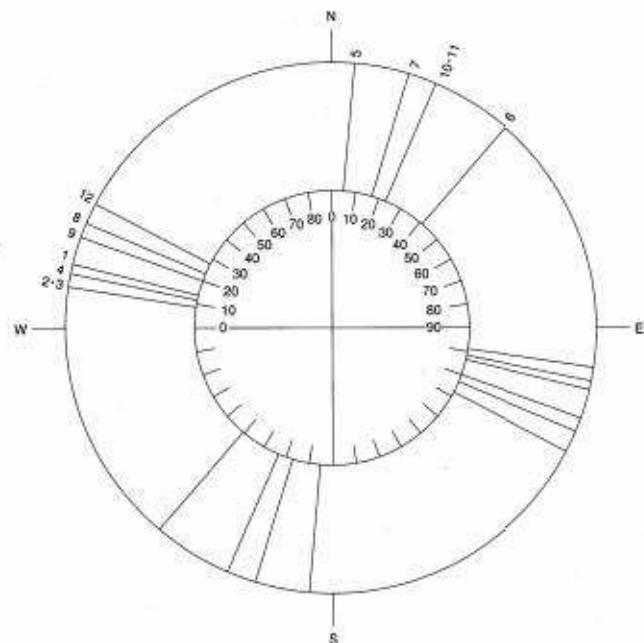
第22図 土壌1、2、3、5、10、13

3. 2区の遺構

①建物遺構

建物の方位について

2区出土の建物の方位を第2表に示したが、その傾向は1区と同様であり、1区の建物と2区の建物との間に方位の採用に関しては差異が無いと思われる。ただし2区の建物においては1区よりもさらに方位の振れ幅が小さくなり、南北方向に長軸のある建物5棟の方位は35°の範囲に収まり、東西方向に長軸のある建物7棟の場合は15°の範囲に収まっている。



第2表 建物主軸分布図・表

E 3・4、F 2・3・4トレンチにおいて、柱穴と思われるピットが多数出土した。このピット群は切りあいも多く複雑な出土状況であり、さらに一部が近代の溝によって失われているため、建物の復元は困難であったが各柱穴間の距離の測定を主体に検討した結果、建増し・建替え等を伴う建物が重複してこのようなピットの出土状況になったものと判断し、3棟の建物を抽出した。各建物間の先後については、F 4-73ピット、F 3-90ピット、F 3-185ピットのピットの切りあいや各建物に伴う遺物を基準として検討し、古いほうから建物3～建物1とした。また各建物の建替えの際には、以前の柱を抜き、その跡に石を詰めて整地したと思われ、その様子をうかがわせるピットが多く出土している。詰められた石の中には、石臼の破片や砂岩の砥石なども含まれていた。さらに焼土や炭を含むピットもあり、数次の火災も想定されるが、層状に堆積した整地跡は残っていなかった。

建物1（第23図、図版6-2）

方位はNW76° 00'。東西に長い建物である。基本形は桁行5.5間（11.0m）、梁行は、やや変則だが3間（5.4m）であり、西・南・東側それぞれに拡張部が付いた形状となる。この状態での建物の規模は桁行方向が17.8m、梁行方向が7.8mである。

建物の北側の桁行には基本形と少しずれた柱穴列があり、それを元にした増・改築が想定されたので、別図として提示した（第23図建物1-2）。これによれば西側の拡張部は4.0m×4.2mから2.8m×5.1mに変更され、北側には、3間（6.0m）×2間（4.0m）の建物が追加されている。なお、南側桁行の内側にある柱穴列は、桁行の柱列と組み合わせると三角形を連ねたようになる位置にあり、この建物の構造の特徴と言える。

また建物の一部に1.4mの柱芯間が用いられているが、この寸法は一間を2.0mとした場合の

対角線の長さ ($\sqrt{\text{一間の長さ} (2\text{m})}$) に相当するのではないかと思われる。同寸法は1・2区を問わず、他の建物にも所々で使用されている。

この建物に属するピットのうちF 2-29ピットからはまとまった遺物が出土している。またこの柱穴を利用して宝塔の相輪（第37図65）を埋納したような様相が見られる（第30図）。その他同ピットからは白磁の碗（第35図44）、天目（同図49）、瓦質の土鍋（第36図58）等が出土した。

上記以外の遺物としては、土師器皿がE 3-1ピット（第35図37）、F 3-82ピット（第35図25）、F 3-133ピット（第35図30）、F 4-37ピット（第35図24）、F 4-46ピット（第35図22）、F 4-52ピット（第35図34）から出土している。F 4-30ピットからは土師器壊（第35図-29）が出土した。

またF 3-39ピットからは青磁の碗が（第35図45）、F 4-17からは象嵌青磁（第35図50）が出土し、F 4-62ピットからは土製のフィゴ羽口（第36図62）が出土している。

建物2（第24図、図版6-2）

方位はNW81° 00'。東西に長い建物である。基本形は桁行6間（12.4m）、梁行3間と思われるが、南北の桁行が平行でなく、東側が広がっている。そのため、西側の梁行は5.4m、東側の梁行は5.8mとなっている。建物の西北角に1.6×2.6mの拡張があり、東側には鍵形の拡張があるが、この部分は少なくとも2次に渡る増・改築が行われたような柱穴の並び方と思われる（第24図建物2-1）。南側には、3×2.2mの玄関様の張り出しがある。

北側の桁行の歪みは、南側と平行になるように修正が加えられており、東端の梁行では1間（2m）×3の均等割りに改築されている様子がうかがわれる（第24図建物2-2）。改築後の桁行は18.4m、梁行は6.0mとなり、南側の張り出しを含めた梁行の長さは8.2mである。

建物東部の外側には、梁行に平行して4m（2間）の直線をなす柱穴列があり、同じく北西には桁行に平行した4m（2間）の直線をなす柱穴列が認められる。

この建物に伴う遺物としては、F 3-115ピットから土師器皿（第35図20）、同じくF 3-145ピットから土師器皿（第35図26）、F 2-3ピット（第35図28）とF 4-36ピット（第35図32）から土師器壊が、またF 3-15-1ピットとF 3-22ピットからは土師質の火舎（第36図59）、F 4-28ピットからは青磁の碗（第36図48）が、E 2-3ピットからは茶臼の下臼（第37図63）が出土している。

建物3（第25、26図、図版6-2）

方位は建物2と同じで、NW81° 00'である。基本形は桁行5間（10.0m）、梁行3間（6.0m）と思われるが、北側の桁行は、所定の位置に柱穴をあけられなかったようで、歪が生じている。南側に2.6×2.4mの玄関様の張り出しを設けている。東側には軸線のぶれ等、数次の増・改築を繰り返した様相があり、最終的には桁行を7間（13.8m）まで延長し、北側と東側に廂を設ける形状となったものと推測される（第25図建物3-2）。

なお東端の梁行方向には、中間の柱が設定できず、建物としての壁があったか確定できない。

遺物としてはF 3-143ピットから、青磁の碗が出土している（第35図43）。

図化可能な遺物の出土は建物1に集中し、以下建物2、建物3の順に減少しているが、3棟とも東西に長軸を持ち南側に玄関様の張り出しを持つという基本構造が一致しており、3棟には共通性・連続性が認められる。また3棟とも増・改築が東側と北側に多いことも共通していると思われる。

建物4・5は、建物1～3より10mほど北側の丘陵部で出土した一群で、両者の間には浅い溝や、多数の小規模なピットが出土している。

建物4（第27図、図版7-1）

C 3・4トレンチにまたがって出土した。東西方向に長い建物と思われるが、造成による削平を受け全形は不明である。方位はNW $78^{\circ} 00'$ 。桁行4～5間、梁行2間（3.6m）の建物で、東南隅に廂の一部が残っているように見えることから、周囲に廂を巡らす形状であったと思われる。

建物5（第27図、図版7-1）

北半が建物4と重なり、一部強い削平を受けている。桁行の方位はNE $5^{\circ} 00'$ であり、南北方向にある。大きさは桁行3間（6.2m）、梁行2間（4.2m）で、北東角に0.8×2.0mの仕切りがあるような柱穴の配置である。

柵列（第27図）

この建物5を囲むように、南を向いた凸形の柵列が配置されている。東側は、桁行にはほぼ平行する直線であり、90°の角度で南へ折れ、建物の南側を凸形に囲んでいる。西側は削平されており不明。凸形の頂点部分の角度は左右とも97°である。

建物6～12は調査区南西端の、建物1～3から西へ約20m離れた位置で出土したグループである。各棟ともほぼ同一平面からの出土であるが、年代の離れた建物が含まれていると思われる建物群である。

建物6（第28図、図版7-2）

G 7・8トレンチにあり、方位はNE $40^{\circ} 30'$ 。北東～南西に桁行のある建物である。耕作による削平を受けており残りが悪い。南西側は道路によって失われている。桁行は、5間（8.6m）まで確認できる。梁行は2間（4.4m）として作図しているが、3間であった可能性がある。北西側に幅1.1mの廂が付くと思われる。

桁行の柱芯間は、1.7、1.8、1.8、1.6、1.7mとばらつきがあるが、梁行は、2.2mずつの均等割りである。廂の幅の1.1mは梁行1間分の2分の1になっている。

建物7（第29図、図版7-2）

G 7トレンチにあり、建物6と重なっている。3間（6.7m）×2間（4.2m）の建物と思われるが、残存状況が悪い。方位はNE $17^{\circ} 00'$ である。

建物8（第29図、図版7-2）

G7・F7トレーナーにまたがって出土。建物7よりやや小さいが、縦横の比率はほとんど同じである。桁行3間（6.2m）、梁行2間（3.8m）。方位はNW $66^{\circ} 30'$ である。この建物の柱穴のうち、F7-33ピットからは青花（第35図42）が出土しているが、建物6・9でも同じ位置に柱穴が来るので、この遺物がどちらの建物の柱穴に伴うのかは不明。

建物9（第28図、図版7-2）

建物8と重なっている。主屋（身舎）は桁行3間（6.0m）、梁行2間（4.0m）であり、周囲に8×5.8mの回廊あるいは廂を巡らす建物と思われる。方位はNW $70^{\circ} 00'$ である。

主屋中央の北側には、他の建物には見られない仏壇の間を想定できるような区画があり、寺院等の施設を推測させる。さらに傍証として、この建物の東隣には「地蔵田」という字名が残ること、近世の古絵図（第5図）（註1）にはこの付近に「クワンラン・咸應寺跡」という注記がされていることが挙げられ、この建物が寺院であった可能性はかなり高いと思われる。

年代を推定する手がかりとなる遺物としては、F7-3ピットから瓦質羽釜（第35図56）、F7-89ピットからは「現川焼」の破片（第35図51）が、G7-11ピットから染付け碗（第35図52）が出土している。とくに「現川焼」についてはその存続期間がほぼ確定しており（1691～1749年頃）（註2）、これからこの建物は、その頃までに廃棄されたと考えてよいのではないだろうか。

建物10（第29図、図版7-2）

F7トレーナーにあり、建物9の北に隣接している。桁行は2間（2m×2）まで出土しているが、それ以上は削平のため不明。梁行は2間（3m）である。方位はNE $28^{\circ} 00'$ 。

建物11（第29図、図版7-2）

建物10と0.2m離れて並行する建物であって、方位は同じくNE $28^{\circ} 00'$ である。残存する部分が少なく、全体の形は不明であるが、廂を持つ建物であった可能性もある。

建物10・11の敷地には、もう一棟建物が存在するようなピットの出方であるが、復元し得なかった。

建物12（第32図、図版7-2、10-2）

建物9の西に隣接している。建物12は土壙として調査を進めたため、遺構としての番号は2区の「土壙-3」となっている。従って建物図面も「土壙3」の実測図に掲載されている。

この建物は斜面を（コ）の字形に切り取り、柱間の狭い建物を作っている。方位はNW $62^{\circ} 00'$ 。桁行4間（1.8m）、梁行3間（1.3m）の小さな神殿（祠）を思わせる建物である。柱間は0.4mと0.5mの組み合わせを多く用いている。

この建物は一見、隣接する建物9と関連有るように見えるが、両者にはわずかではあるが重なった部分があり、同時に存在したとは考えにくい。従って建物12は建物9以外の時期に造営されたものと思われる。

②ミゾ状遺構（第30、33図、図版6-2、7-1）

ミゾ1は、D3トレンチからE3トレンチに南走し、さらにE4トレンチ方に西走するが端末は確認していない。浅い皿状の断面を有し、覆土は炭や焼土を含む茶色砂質土で青花・染付白磁（第38図71、74）を含んでいる。近世の所産である。

ミゾ2はC3トレンチからD3トレンチを通り、E3トレンチでミゾ1に切られている。覆土は炭や焼土を含む茶色砂質土で、青花や鉄砲の玉（第38図70、第40図121）を含むものの、D3トレンチでピット64、66、67、E3トレンチでピット10を切っておりミゾ1同様近世の所産であろう。

ミゾ3はF3・4トレンチを南走し、調査区外に伸びている。上面幅60~70cm、底幅30cm、深さ50cmほどで断面U字形を呈している。ミゾ内には掘削した基盤層である安山岩火碎流堆積物や拳大の安山岩礫を充填して暗渠としている。充填土の中には軒棧瓦（第39図87~91）なども一緒に埋め込まれている。このミゾは建物に付随する排水用の暗渠であるが、総柱用のピットの中には建物を想定できるピットが存在しないことにより、礎石式の東立ての建物が想定される。

ミゾ4はF3・4トレンチを中心に交差して掘られており、形状、掘り方はミゾ3と同じである。ミゾ3と4はF4トレンチにおいて切りあうことなく併存しており、同時期の所産であろう。

ミゾ5からミゾ8は畑作に伴う排水用の施設であり、説明は割愛する。

ミゾ9はF7トレンチに所在し、西走する。掘り方は長方形で、西側に幅を狭めて収束している。幅は120~50cm、深さ30cmで、比高は30cmほどである。土壤内には拳大の安山岩自然礫を隙間なく充填する。その中には棧瓦、磁器、鉄滓、砂岩（第38図72、83）などが混じりあう様相を見せる。この包含状況はミゾ3と同じであり、機能・時期も同一と考えてよさそうである。

③土壤（第31、32図、図版7-2、10-2）

土壤1はE5トレンチに所在し、略円形の平面を示し、削平されて浅い皿状の底部断面を見る。覆土は炭、焼土をやや多く含む茶褐色粘質土で、土師器の皿（第38図68）の他、図化不能の青花、土師器など出土した。

土壤2は土壤1に隣接して検出した。平面形状は長楕円形で、削平により皿状の底部のみ確認した。覆土は炭、焼土を含む茶褐色~黄茶色粘質土で土師器が検出されたが、小片で図化できない。

土壤3はF7トレンチに所在し、当初土壤として扱ったが精査するに従い建物12を建てるために土壤状に造成した部分であることが判明した。短軸1.84m、長軸2.14m、深さ30cmを測り、西側に開口している。底部には平坦に造成され、北側から5、4、4、5個のピットが穿たれ、2、3列目は中心の1個が存在しない。柱穴は上面20cm、底面10cm、深さ20cmほどで、建物を

建てて埋め戻すと50cm程度が土中に埋め込まれることとなる。覆土は黄茶色粘質土で、炭、焼土を含むものが多い。柱間は東西桁行が東から40、50、40、50cm、南北梁行が20cm間隔で穿たれている。このことから本柱穴群は1棟の建物を構成する4×3間の東西に棟をもつ小さな社風の構造物であったと思われる。そして2、3列目に柱穴1個を欠いている部分に内陣を位置させたものと推定される。この土壙が存在するトレンチの西側は標高を急激に通減する地形を示しており、このことからすると本土壙は造成された当初の形状を残しているものと推測される。

土壙4はG 7トレンチに所在し平面形は不整形である。底面はやや平坦である。ピット53～56、64に切られている。ピット53、54は建物7を構成し、ピット55は建物6を構成している。ピット54から土師器の出土は見られるが、時期を特定できる資料ではない。またピット55を含んで建物6を構成するピット58からも土師器が出土しているが、同様時期の特定が困難である。

土壙5はD・E 4トレンチに所在し、平面略円形を、断面逆梯形を示す。覆土は3層ほど堆積し、青磁や瓦質の火舎（第38図73、82）など9点ほど出土した。

土壙6はH 9トレンチにあり、ミゾ8の途中に当たる。平面は円形で、断面扁平状のU字形である。底面はやや平坦で、壙底からやや浮いた状態で安山岩自然礫が集積している。礫下の土層は灰黒色粘土層で、自然流下によって表層土が堆積したものである。上位の土層は安山岩火碎流堆積物の二次堆積物である。この土壙はミゾ8から流下する雨水を甕に貯めるための施設であり、昭和30年代の畠の構造改善事業によって甕は抜き取られ、基盤土を埋め込まれて機能廃止したものである。白磁染付（第38図69）が出土した。

④炭窯遺構（第32図、図版11-2）

F 7トレンチにあり、土壙3の直東に位置する。長軸3.4m、短軸1.5m、深さ10cmを測る隅丸長方形の形状を示す。焚口方向は不明である。底面には木炭の取り残しが存在している。炭窯は本例で3例目で（註3）、伏焼製炭法に基づくものである。

⑤公道遺構（第33図、図版12-2）

F～H 6トレンチに位置し、現在の公道として機能している。A、B列の石列によって隣接する私有地と区画している。石積み外面幅1.8m、長さ19mほどを調査した。石列は小振りの自然石を2～3段積んでいる。ともに石列の面は西側を向いている。A列西側には東に傾斜する掘り込み面があり、また西側にも浅く掘り込んで馬の背状に、帯状に掘り残している。これはA列にB列石積みの上面を揃えるために行われたものである。B列南方の石には見地石が使われておりB列が新しいものであることが判明する。A列東側には幅1.2mほどの南北方の掘り込みがあり、東側の壁は2段に立ち上がる。底面には10～20cmの安山岩塊石や割石を敷き詰め路盤としている。礫間には陶磁器片や石製品（第38図75、81、85、86）が混じっている。A列はこの上に載っている。このことからB列は東側の段上に載り、B列と対になって公道と機

能していたことが窺われる。後世に公道が付け替えられて、B列を現位置に移動させたため、石列面がともに西を向く結果となったものである。

⑥祭祀遺構（第30図、図版13-3～5）

F2トレーンチに存在する建物1の東北隅のピット29を祭祀土壇とした。柱穴としての機能が廃止した後、底面に石を立ててその上に石を4個埋置し、宝篋印塔相輪（第37図65）を横位に埋納している。さらにその上には小石を載せ丁寧に埋め込んでいた。図には上面で確認した石は実測の主軸の関係から割愛している。宝篋印塔相輪の下からは白磁碗（第35図44）、瓦質土鍋（第36図58）、検出面から天目茶碗（第35図49）、青花小片など12点出土した。

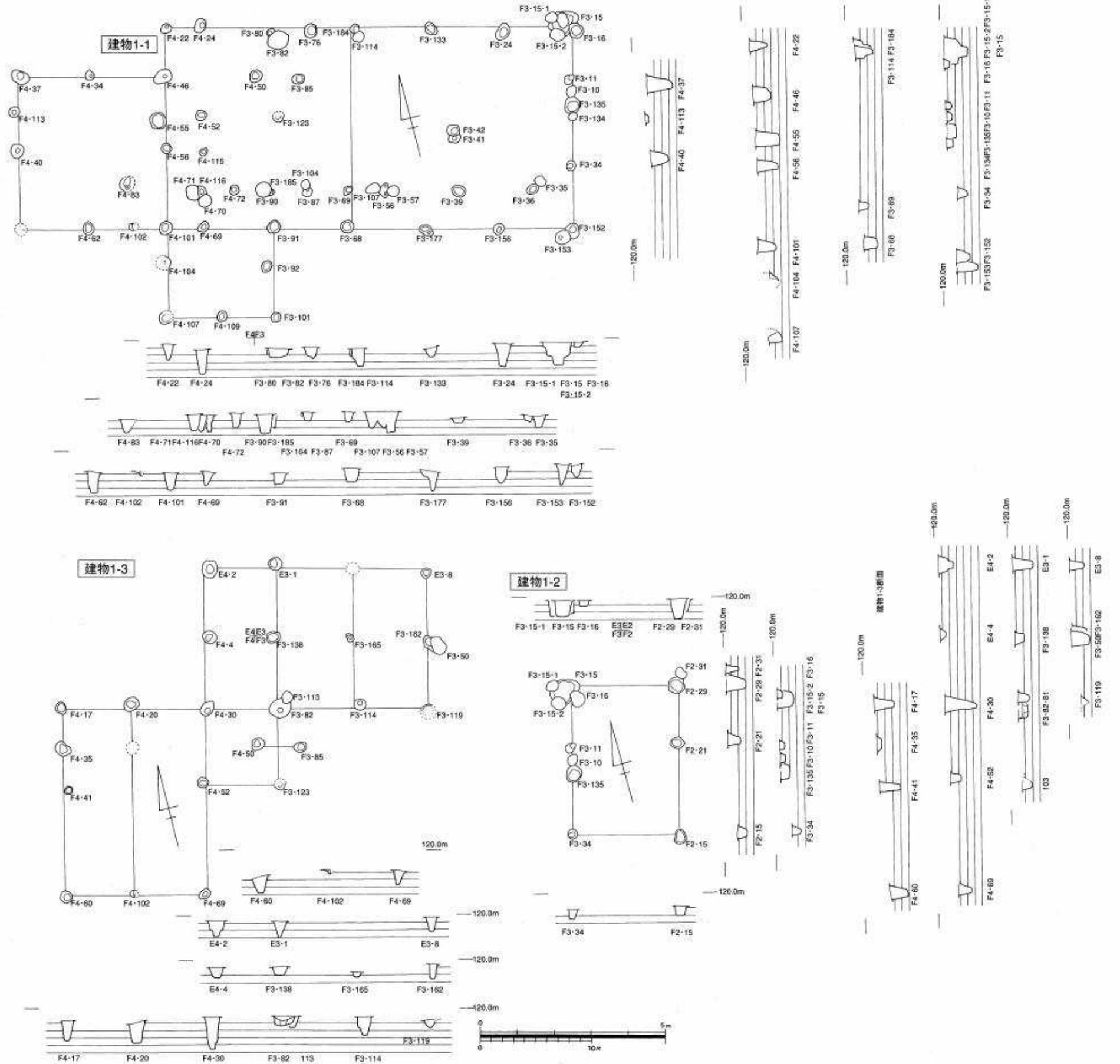
他に、建物3を構成するF3ピット143からも高台を上にした青磁（第35図43）が出土し、埋納した様子を示している。

註

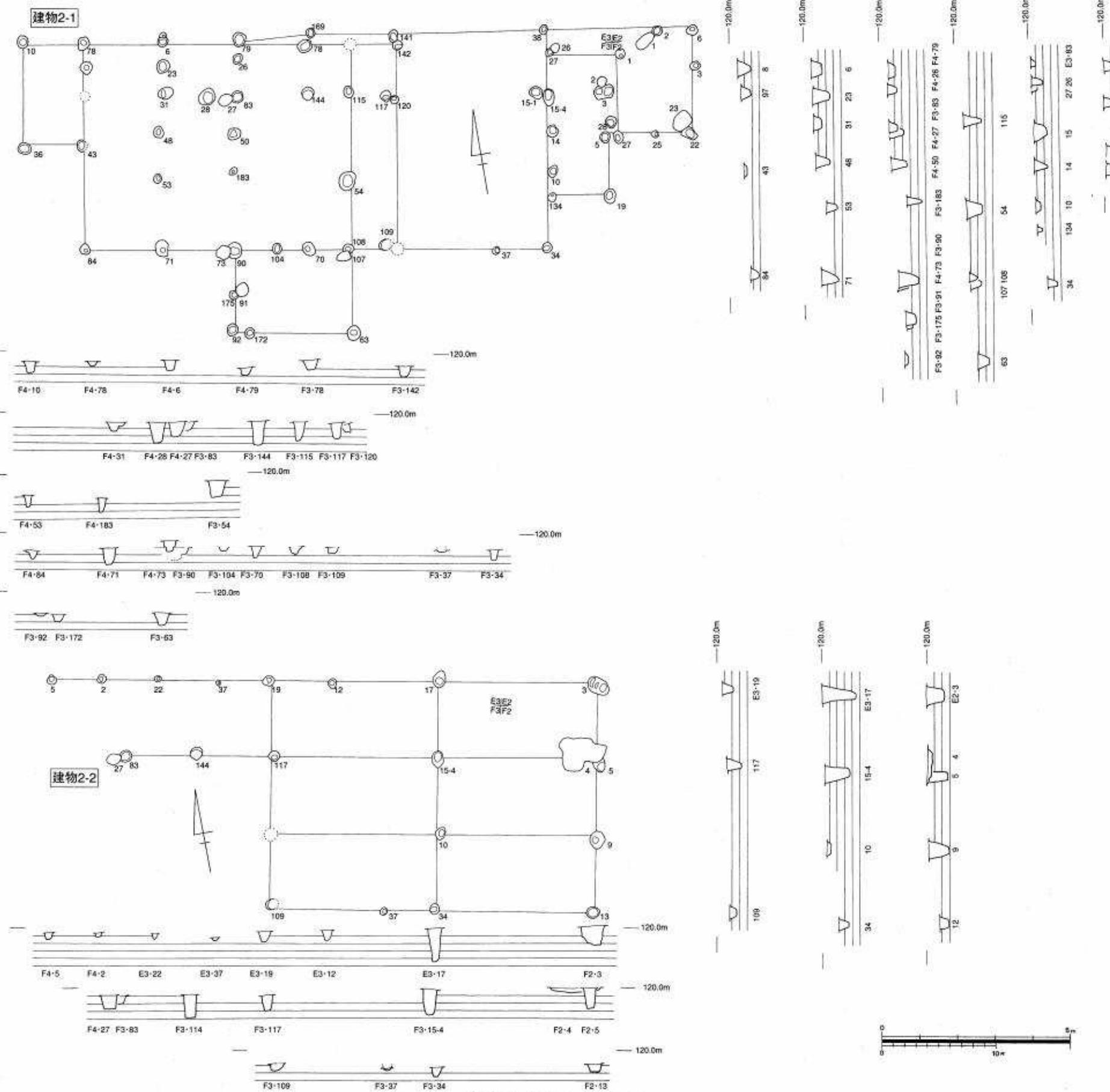
1. 『郷図』市立諫早図書館蔵
2. 下川達彌『長崎のやきもの』（株）昭和堂 2001
3. 次の2例がある。
諫早市埋蔵文化財調査協議会『下峰原遺跡』1998
諫早市埋蔵文化財調査協議会『下峰原高場遺跡』2002

（参考文献）

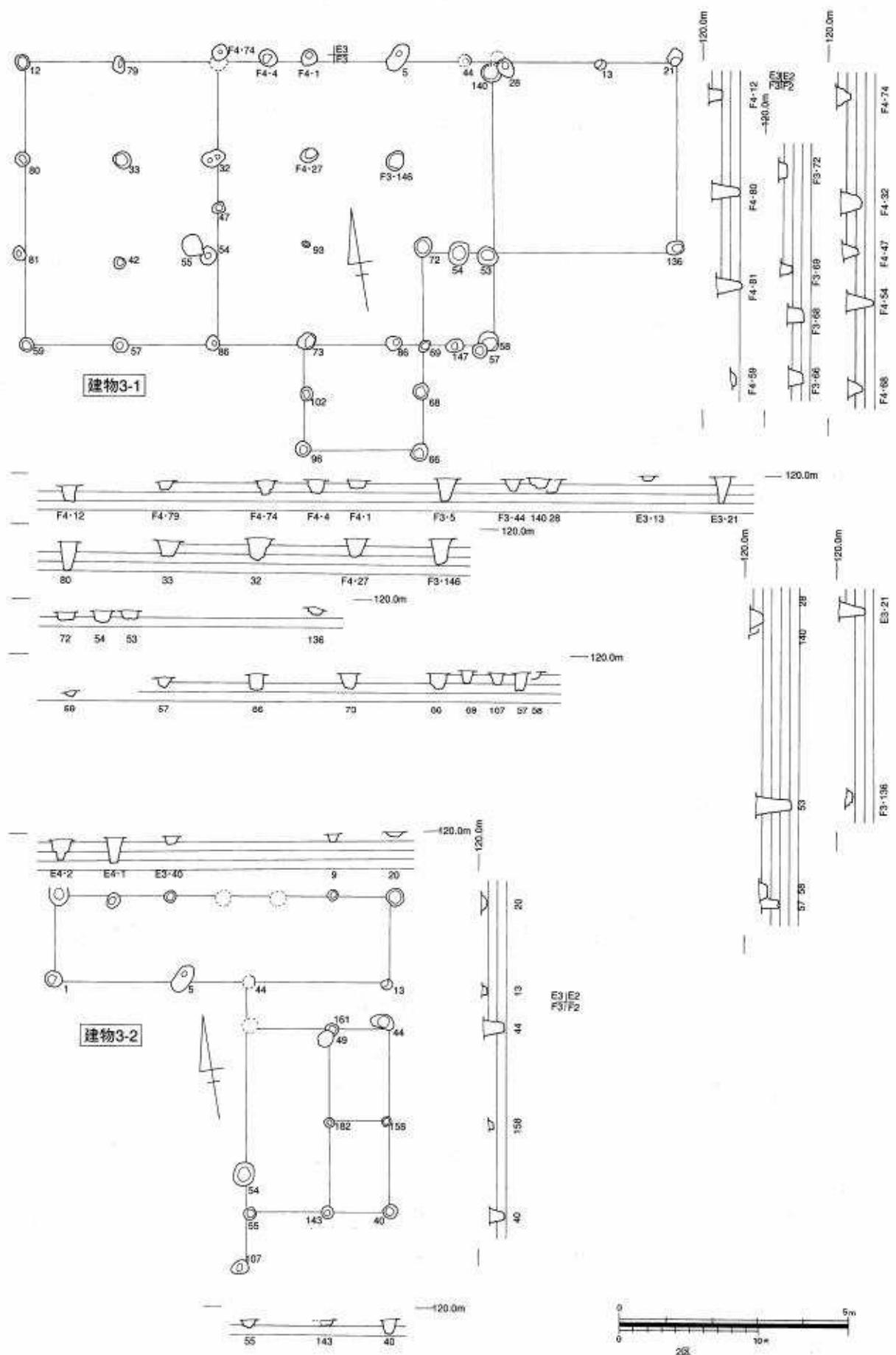
- ①長崎県教育委員会「長崎県の民家（後編）」長崎県文化財調査報告書 第12集 1974
- ②長崎県教育委員会「長崎県の近世社寺建築」長崎県文化財調査報告書 第79集 1986
- ③「古代の官衙遺跡 I 遺構編」奈良文化財研究所 2003
- ④「後藤館跡」久保田町文化財調査報告書 第3集 佐賀県久保田町教育委員会 1998
- ⑤「No.27氏家行広陣跡」鎮西町文化財調査報告書第14集 鎮西町教育委員会 1996
- ⑥「草戸千軒町遺跡」－第32次発掘調査概要－ 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1983
- ⑦「草戸千軒町遺跡発掘調査報告V」 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996
- ⑧「薬師城跡」 広島県埋蔵文化財調査センター 1996



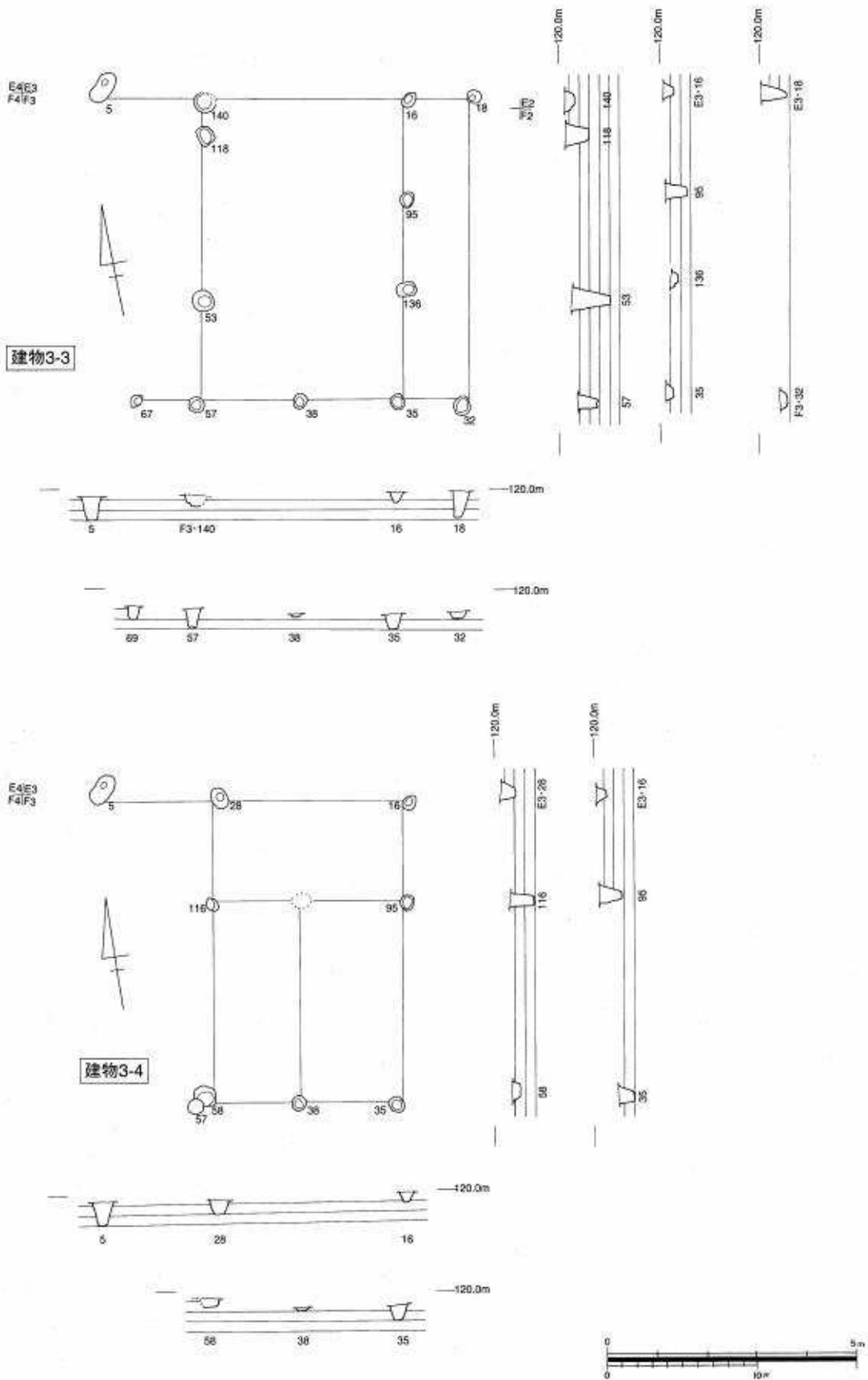
第23図 建物 1-1 ~ 1-3



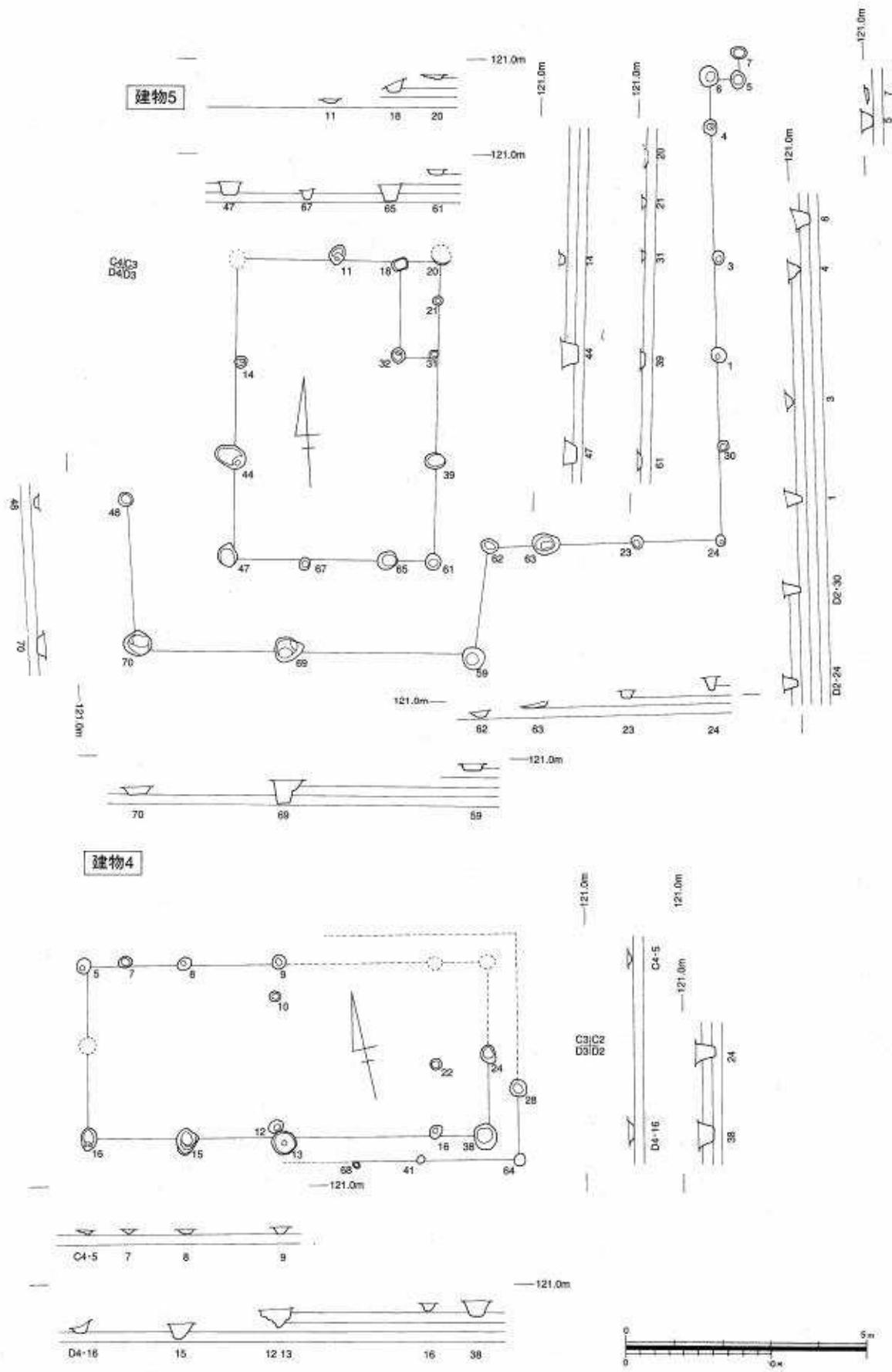
第24図 建物 2-1、2-2



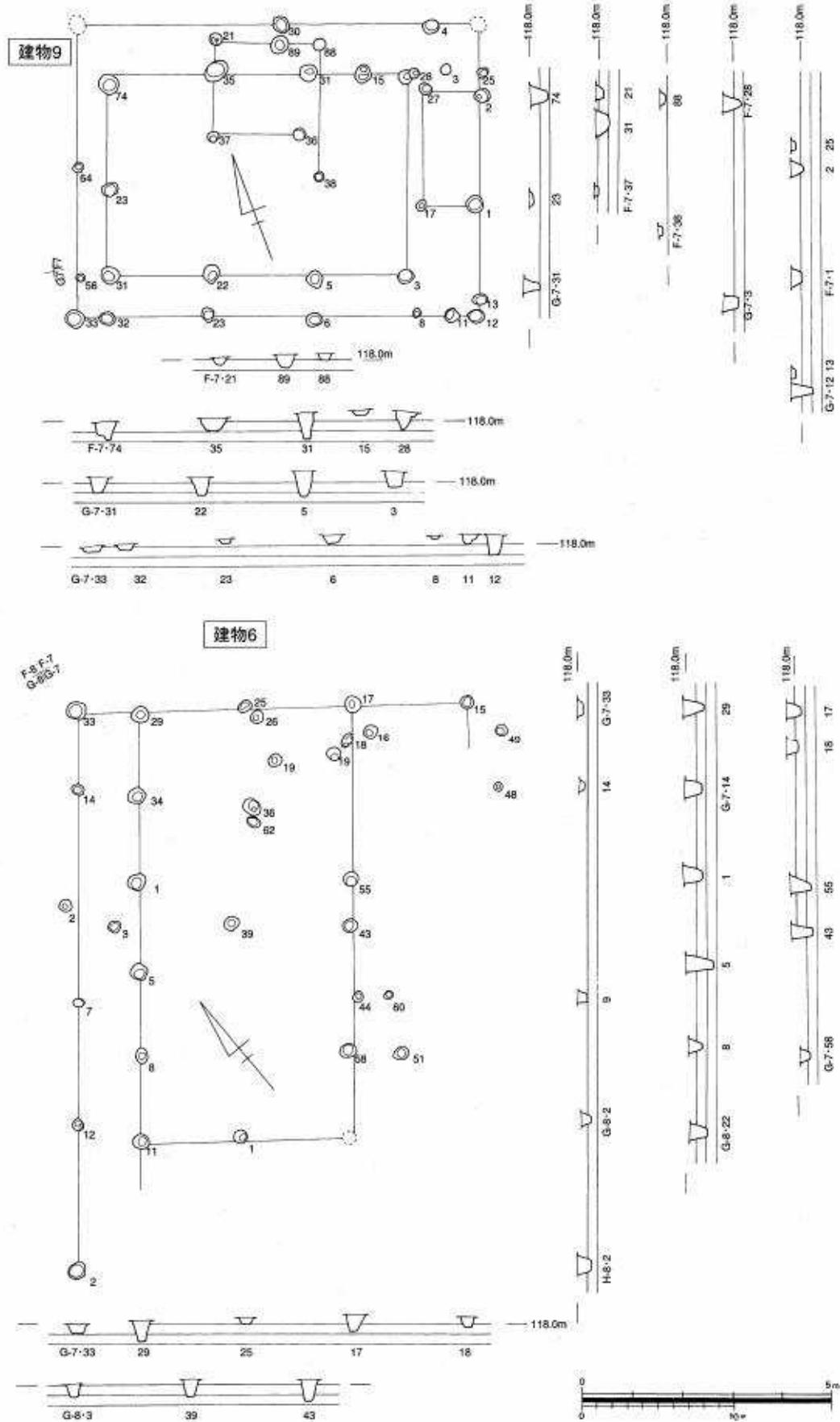
第25図 建物3-1、3-2



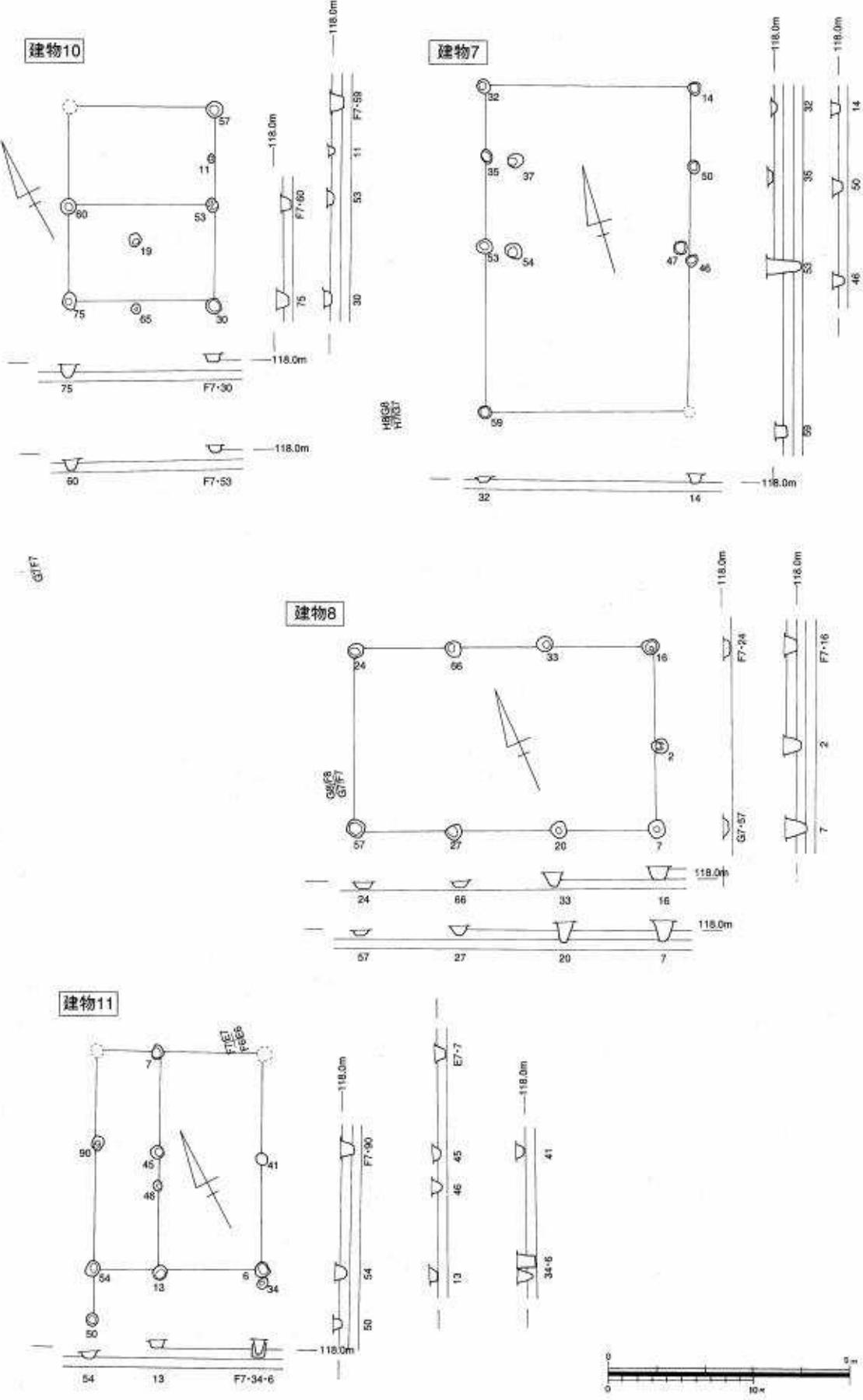
第26図 建物 3-3、3-4



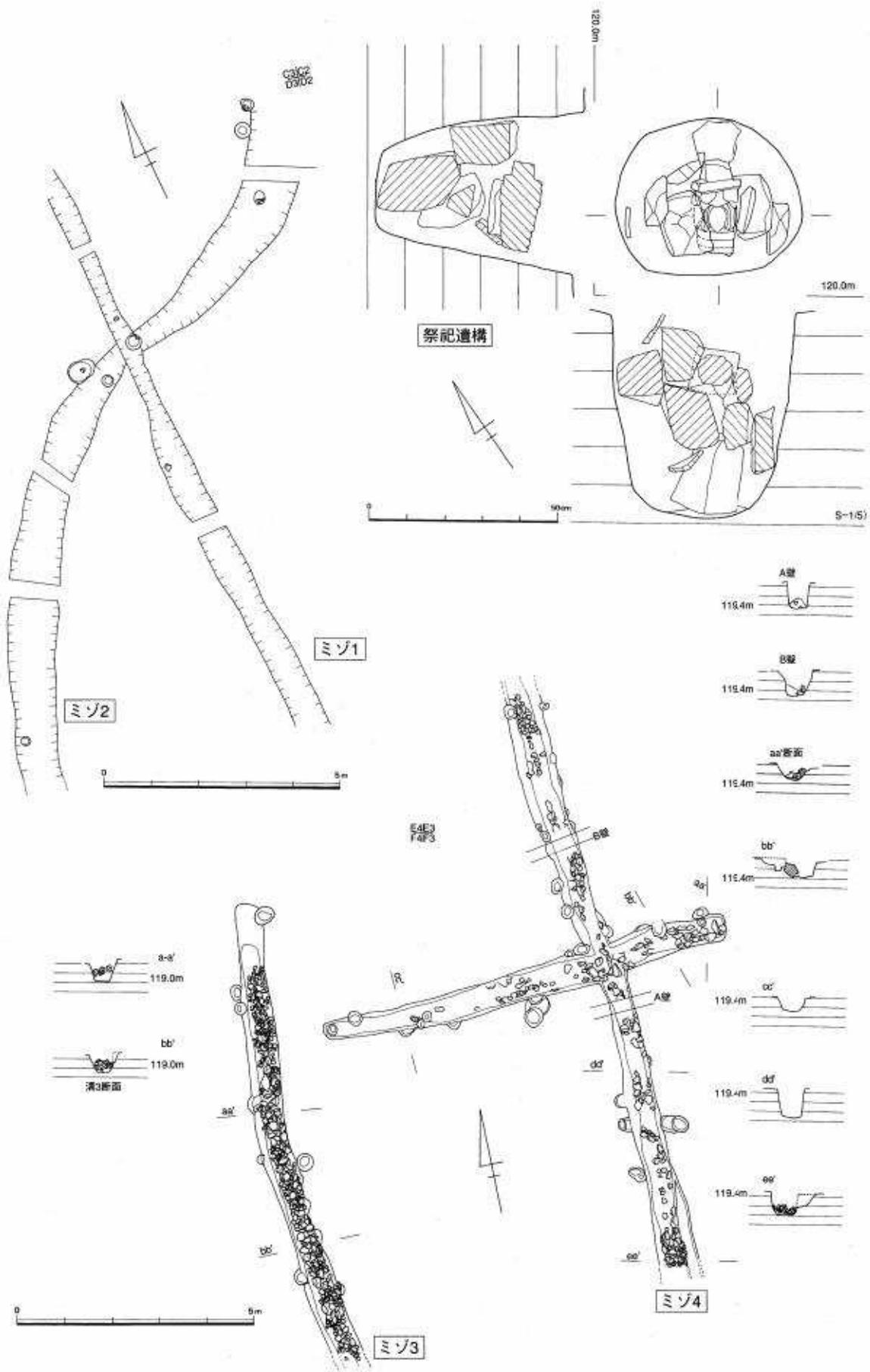
第27図 建物4、5



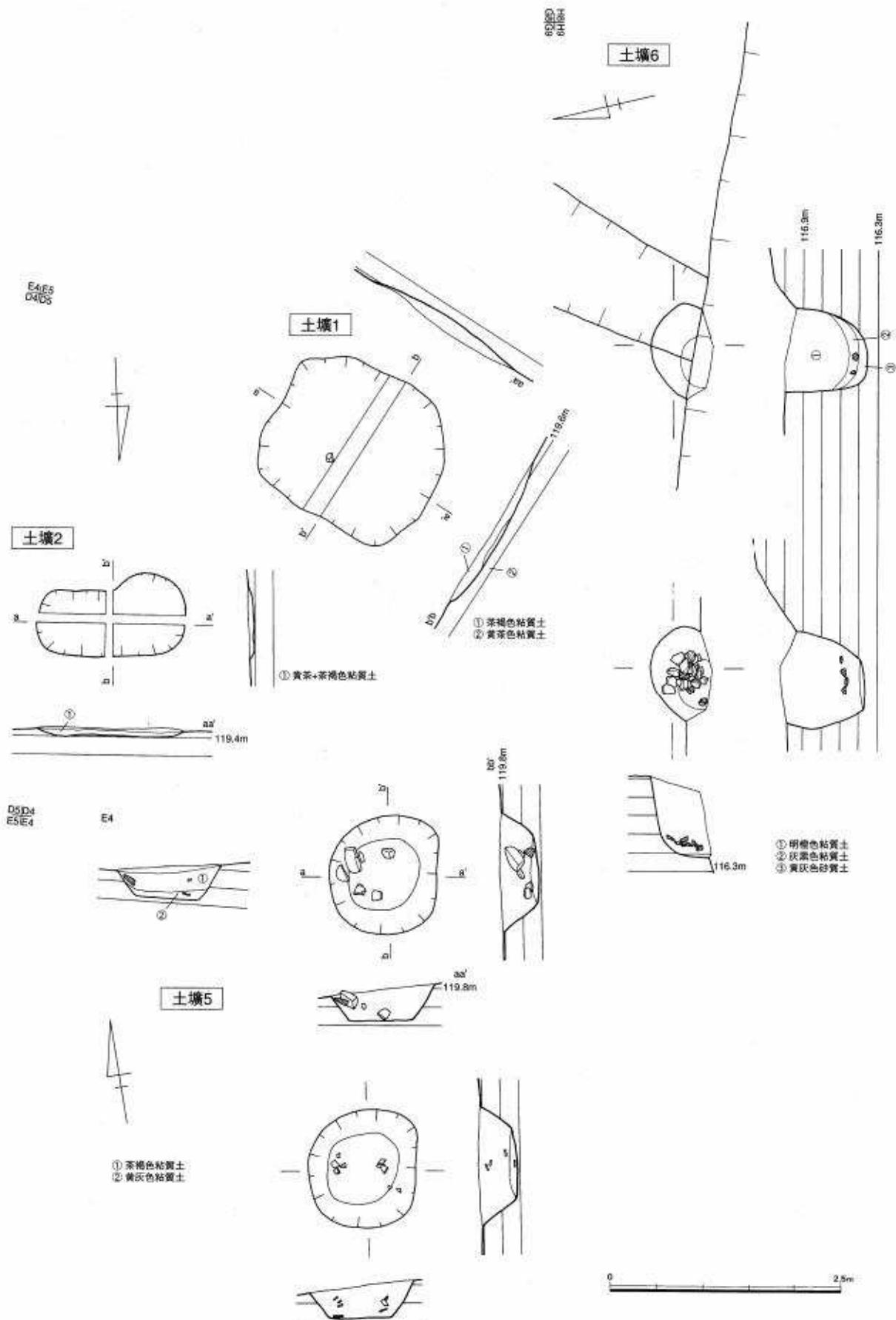
第28図 建物 6、9



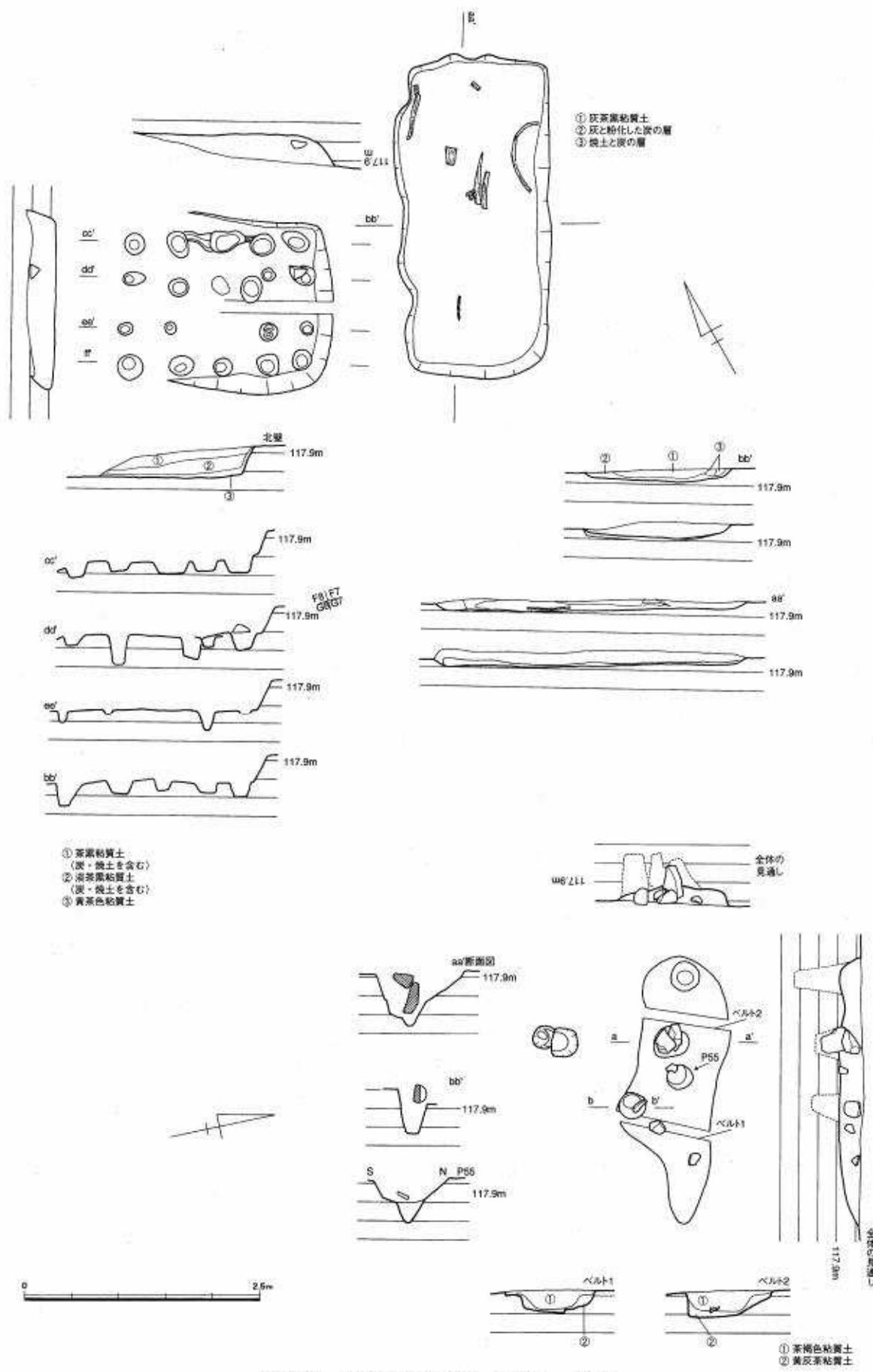
第29図 建物7、8、10、11



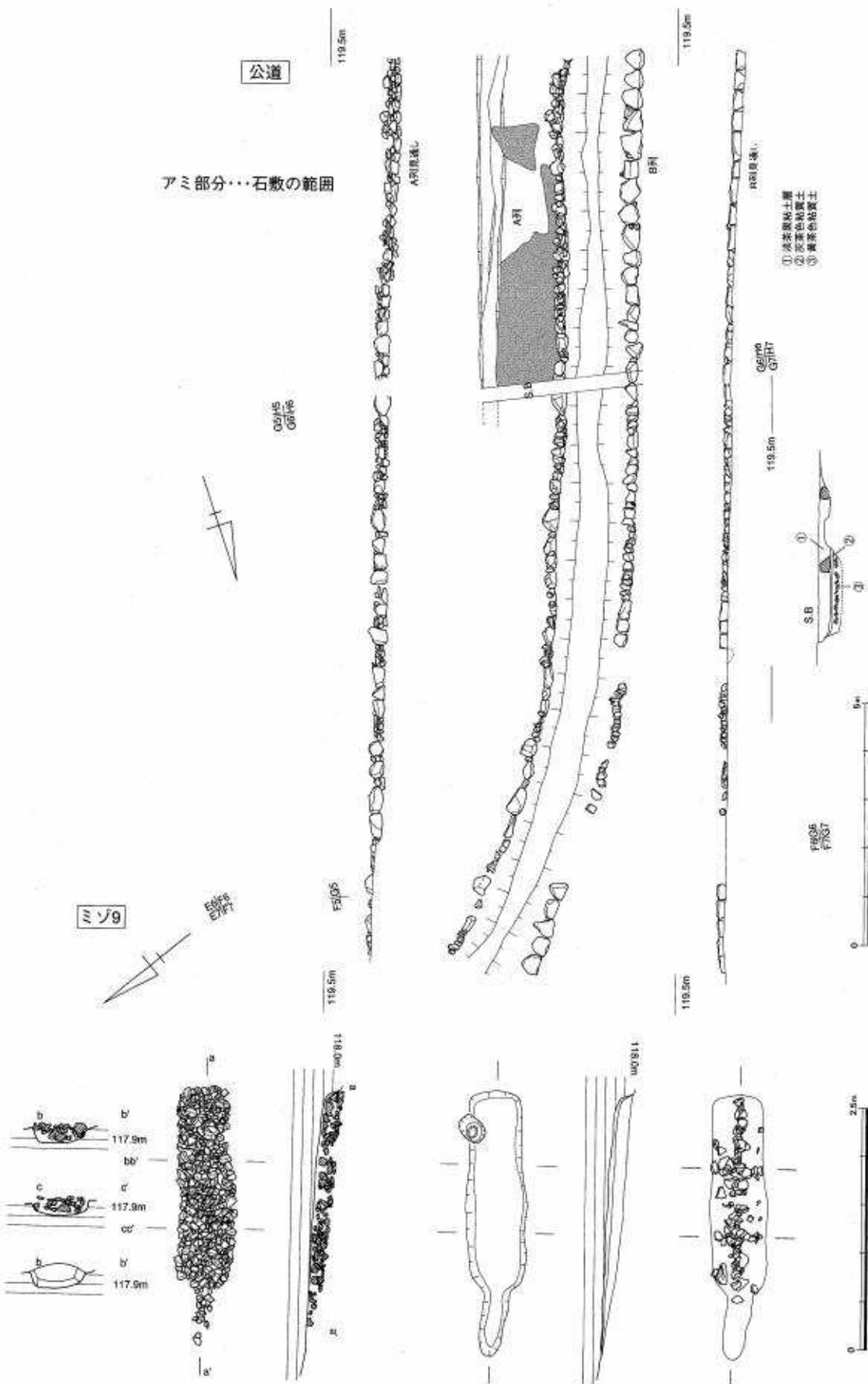
第30図 ミゾ 1、2、3、4、祭祀遺構



第31図 土壌1、2、5、6



第32図 土壌3(建物12)、土壌4、炭窯



第33図 公道、ミヅ9

V 出土遺物

出土遺物については、遺構出土の遺物は区毎に掲載し、遺構から遊離した遺物は一括して掲載・説明する。検出遺構、法量等については第3表に掲載している。

1. 1区出土遺物（第34図、第3表、図版15～19）

遺構出土遺物数がわずかなため、ピット、土壤一括して掲載している。

①土師器（1～10）

口径6～8cm前後の皿状の器形を呈する資料と、10cm強の壺状の形状を呈するものの2種がある。沖城分類（註1）に準拠するとI-a類が1～4、II-a類が6～10、II-b類が5に分類できる。

1は口径6cm、底径1.6cm、器高2.8cmを測り、糸切り離しの底部から内湾気味に立ちあがる。高台風の底部を有する特徴を持つ。

2も底部だけの資料であるが、1と相似る。

3、4は法量、形状、作行きとも相似る資料で、共に外面に二次的炭化物が付着している。

5は薄く水挽きされて大きく外反するもので、焼きが堅く陶器風の資料である。

6、7は土壤13からガラス小玉（第40図93～117）と共に検出されたもので、共に口縁部を上にした状態で埋置されていた。法量、形状、作行きとも相似る。

8は第1次調査時の資料で、2破片を図上で復元したものである。6、7を一回り大きくした特徴を持つ。

9は薄く水挽きされた資料で、作行きは5に相似る。

10は体部が大きく外反しており、水挽き痕が明瞭に残る。口唇部内外面に油芯の跡が残っており、灯火具として機能したことを示している。

②青花（11～12、14）

11はやや大振りの皿で高台部が内傾するように削り込まれている。外面体部に唐草文、腰部に二重圈線、高台部に一重圈線を、内部見込みに二重圈線、不明模様を染付ける。釉薬は面取りした疊付けを露胎にし、それ以外は施釉している。

12は見込み部分が高台内に凹み、体部は外方に大きく開くレンツー碗である。口縁部下位内外面に一重圈線、外面体部と内面見込みに簡略龍文と丸文、内面見込み中央に渦文、内面見込みと高台外面に二重圈線を染付ける。面取りした疊付け部は露胎で、それ以外は施釉している。小野分類碗C群V類（註2）。

14は碗形口縁部の小片で外面に一重圈線と唐草文風文を染付ける。

③陶胎染付（13）

1点のみ確認できた資料で、釉下彩である。内面と思われる面に円弧状に浅い段を有している。黄色味の強い砂質の胎土の上に外面に薄墨灰黒色の絵付けを、また内面にも圈線風文の施

文を行い、のち表裏に透明釉をやや厚く掛けている。内外面に細かな嵌入が入る。

④陶器播鉢（16）

内面にすり鉢目をやや疎に入れる体部破片で、内外面に褐色釉を掛ける。

⑤弥生土器（17）

甕の脚台部で大きく裾広がりする形状を示している。後期の所産である。

⑥鉄釘（15）

鋸化でやや膨張しているが、断面方形で頭部と先端部を欠損している。現存長4cm、中程の断面で5~6mmを測る。

⑦須恵質土器（18）

復元口径30.8cmを測る大形の甕形を呈し、しっかりととした底部から体部が大きく伸び上がり、短く強く外反する口縁部がつく。口縁部の作行きは内外面ともにヨコナデ調整で、条線状の痕跡を残す。頸部以下はタテに連続する「く」字状の叩き板で叩き締めており、痕跡が明瞭に残る。内面体部は底部から左上がりに連続するヘラケズリを施しているため、当板痕は認められない。ヘラケズリにより器壁を均一化している。ヘラの刃幅は9mm程を測る。内外面ともに灰色を呈し、胎土は粘土の練りこみを明瞭に残している。表面の叩き痕は李朝の瓦の痕跡に類似しており、朝鮮産かと思われる。

⑧石臼（19）

H4ピット6とG3ピット1から出土した資料で接合するが、完形とはならない。上臼で直径32.3cmを測る。上面周縁は蒲鉾状に作り、もの入れのある皿状の受け部に続く。底面は周縁より-6mm程凹むふくみを設けてあり、軸を受けるホゾ穴がわずかに残る。もの入れ穴の底面は鳥の嘴状にV字状に浅く掘り込まれている。目立ては施されていない。底面は滑らかで同心円状に擦痕が認められ、また一部滑沢を呈しよく使い込まれている。このことはこの上石底面には擦目を施さなかったことを示している。材質は発泡孔の顯著な阿蘇溶結凝灰岩である。

2. 2区出土遺物（第35図～第39図、第3、4表、図版15～19）

第35～37図はピット出土遺物、第38・39図は土壙、ミゾ等の出土遺物を掲載している。検出遺構、法量等については第3、4表に掲載している。

—1. ピット出土遺物（20～67）

①土師器（20～39）

口径6～8cm前後の皿状の器形を呈する資料と、10cm強の壺状の形状を呈するものの2種が1区同様見られる。沖城分類のI-a類は20～25、II-a類が28、II-b類が27、29～31に分類できる。

20はやや厚手の皿で口唇部は丸く取める。

21、24は口唇部つまむように薄く仕上げ、

25は口唇部内面に面を持つように薄く仕上る作行きである。

27は口縁部外面下に稜を持つように仕上られ、招来磁器の端反皿に似通う作行きである。

28は21を一回り大きくした作りを示す。

29~31は似通う作りを示すが、

31のほうが身の浅い点異なる。

32はII-a類の可能性が大きいが、薄く仕上る作行きや復元口径に疑問があるため、あえて分類していない。

②陶器 (40)

無施釉陶器皿とも称すべき資料で、非常に薄手で持ち手に軽い。胎土は精良で、焼成は堅緻に仕上がっている。

③青花 (41、42)

41は碗片で外面に草花文を染付ける。

42は内外面口縁部下に一重圈線を入れた皿で小野分類皿C群Ⅲ類の碁笥底皿と思われる。

④青磁 (43、45~48)

43は口縁部を欠く無文の碗資料で、色調は内外ともに緑灰色に発色し、細かい嵌入を認める。口径18cm前後、底径6.6cmの資料である。体部は内湾しながら大きく伸びあがる。内面見込みは5cmほど重ね焼きのため円形に施釉せず、円形状の無施釉部には焼き台の痕跡を残す。外面は高台外面まで施釉し、疊付けから高台内は施釉しない。高台は大きく深く鋭く削り込み、中央に兜巾状に膨らむ。

45は砧色に発色した口縁部資料で、内外面無文。体部は緩やかに大きく外反する。

46は高台部の資料で疊付け部分は三角形状に尖るように削っている。内外面、高台裏まで施釉し、疊付け部は釉薬を削り取っている。

47も高台部の資料で高台内は無施釉。

48は口縁部の小片で口縁外面下に細線で印刻している。

⑤白磁 (44)

レンツー碗形で底部から体部が大きく伸びあがる。内面見込みは高台内に凹み、さらに中央部は茶溜り部のように凹んでいる。高台裏は手持ちのケズリで仕上る。胎土は粘りのある良好な粘土を使用し、また釉薬は純白・精良で内外面から高台外面まで掛けている。疊付けから高台内は無施釉。内面見込み脇には目跡が3箇所残存し、角張る折れ口は擦過によって丸みを帯びている。また見込みから体部中程まで円弧状の擦痕が残り、釉薬が削れ全く輝度を無くしている(図版17、44-4)。茶筅ずれと思われる。長佐古真也が分析した碗内底面擦痕の類型A(註3)に相当し、抹茶或は振り茶の存在を示すものであろう。疊付けには目跡の剥離痕が3箇所残り、高台内には墨書きと思われる薄墨の痕跡を残すが、判読できない。この白磁碗は器壁の厚さ、高台の作行きを除けば青花碗第34図12に相似しており、産地や時期など近接するものであろう。

⑥天目 (49)

底部を欠損しているが、大きく外上方に伸び、肩部分で屈曲してさらに外湾している。釉薬は二次的被熱で飛びかけている。

⑦象嵌青磁（50）

極めて小さな破片である。胎土は青灰色の精良な粘土で、外面に断面V字形の工具で短直線文を印刻し、その中に白化粧土を充填している。内面には施釉していないため、壺あるいは瓶と思われる。

⑧陶器（51）

現川焼碗の小片で薄く整形されている。内面細かな打ち刷毛目、外面無文である。

⑨白磁染付（52）

白磁染付碗で、底部の資料である。内面見込みには蛇の目剥ぎを施し、外面高台際に二重圈線、高台内に一重圈線を巡らす。国産近世。

⑩土師質・瓦質土器（53～61）

53は瓦質土鍋で小片のため口径は不明である。薄い体部から平坦に納めた口縁部の上面には凹線状の浅い圈線が巡っている。

54も瓦質土鍋片で内外面に荒いハケ目を残す。

55は瓦質火舎片で外面に小さな三角突帯を巡らせる。

56は23cmほどの瓦質湯釜で体部から頸部の資料である。扁平な体部を呈し、中位にはしっかりとした鍔を巡らしている。頸部で内方へ伸び、印籠蓋式の口縁部を作る。体部外面はハケのちナデ仕上げ、内面はクシハケののち鍔接合のための指押さえの跡が明瞭に残る。外面諸所に炭化物が付着している。

57は土師質擂鉢で復元口径37.6cm、底径21cm、器高11.5cmを測る。大き目の底部から外上方に体部が大きく伸び、口縁部に至る。口縁部の1箇所に四角張った片口を設けている。内面に7～8条の荒い擂鉢目を疎に引いている。

58は瓦質の土鍋で、内湾気味の底部にやや外反する体部が付く。口唇部は浅い段をつける。外面ユビオサエ後タテハケ、内面横位のハケで仕上げる。

59～61は土師質の火舎である。

59は体部上位から口縁部の資料で、口唇外面を肥厚させ、下位に2条の三角突帯を巡らせる。口縁下には四方櫛状のスタンプを押捺している。

60は器壁が厚く胴径34.8cmほどの大形品で3条の沈線を残す。沈線間には「逆S」字状の文様を押捺している。

61は底部資料で、3～4個の角張った足を有している。底径は21cmほどで器壁は厚く重厚である。内面は細かいナデ、外面もナデによって仕上げる。

⑪土製フイゴ羽口（62）

原形を留めないくらい破損しているが、内径2cmの送風孔は1／4程度残っている。炉側は赤変し、他方は茶黒色を呈す。

⑫茶臼 (63、64)

ともに安山岩製下臼である。

63は外径41cm、臼面径21cm程を測る。臼面は平坦でなく、中央部が周縁より+1cm程高い凸面をなす。中央には四角の芯木を納めるホゾ穴が縦に4cmほど穿たれ、以下は逆漏斗状に整形している。ホゾ穴から半径6cmの範囲には、臼面に同心円状に擦過痕が認められ、さらに周縁部にかけては磨滅で滑沢化している。目立ては施されない。

64は臼面径18cmを測り、平坦に仕上られ、目立ての跡が短直線状に7本程看取される。この目立ての跡からすると、12分画3~4溝の特異な目立てが施されたものと思われる。擦目はわずかに残るのみであり、かなり使いこまれている。

⑬相輪 (65)

安山岩製宝篋印塔相輪部で、相輪部上位を欠損する。笠石・火輪との接合は四角いホゾで行う。相輪部台座は扁平な四角に彫出し、その上に隅飾りとして四隅に牛角形突起を配し、中央に剣菱形に彫出する。この剣菱形の直上に宝珠を載せ、宝珠を抱えるようにその両脇に間弁を四隅に配する。上位には一溝を隔てて宝輪を三重に彫出す。残存高25.5cmを測る。

⑭砥石 (66、67)

ともに砂岩製である。66は撥形、67は不正形直方体で、66は3面を、67は2面を砥石面として使用している。

66のa面は長軸方向に凹み、b面は短軸方向に凹み、c面は平坦である。b面の研磨対象は砥石面の状態から外湾刃の鍔のような物であったと想定される。

67のa面は平坦で、b面は長軸方に2箇所の凹みが看取され、刃幅の短いものを研磨した可能性がある。

—2. 土壌、ミゾ等出土遺物

①土師器 (68)

沖城分類I b類で、口縁部は外反している。

②白磁染付 (69、72、74、75)

69は碗形で器壁は薄く挽き上げ、外面に蔓文風の染付けを行う。呉須はやや鈍った藍色に発色。

72は皿で内面体部に蛸唐草文、見込みに菊花文を染付ける。底部は碁笥底で二段に削り込んでいる。

74は69より一回り大きい碗で、外面に圈線と不明模様を染付けている。

75は皿で内面に二重線を交差させ、その下に一重圈線を巡らす。見込み部は蛇の目剥ぎである。

76は猪口で碁笥底である。外面には笹文と二重圈線を書く。いずれも肥前磁器で18世紀の所産。

③青花（70、71）

70は皿で口縁部は端反りしている。内・外面口縁下と見込み際に一重圈線、外面体部に牡丹唐草文を染付けている。

71も70同様の手法によるが、外面模様が花卉文風である点異なる。

④青磁（73）

緩やかに伸びあがる体部に、わずかに外反する口縁部がつく。内外面ともに無文で青磁釉はやや厚く掛り、鈍い緑色に発色している。45と同形・同巧である。

⑤陶器（77～79）

77はクシ描波状文をもつ武雄北部系二彩唐津の徳利で、肩～頸部の資料。

78、79は唐津陶の同一資料と思われる、建水形を示す。口縁部は外方に三角形に肥厚させ、底部はやや上げ底氣味である。

80は嬉野内野山北窯製の銅緑釉皿で、内面見込みに砂目跡を残す。

81は唐津陶系と思われる厚手の灯火具と思われる。口縁部は大きく外反し、小さな脚台が付くものであろう。体部には山形文をクシ描沈線で施文している。口唇部には重ね焼きの貝目の痕跡を残す。胎土はアズキ色を呈し、内外面に施釉している。

⑥瓦質土器（82）

火舎で復元胴径39.4cmと大形の部類に入る。外面には三角突帯を2条巡らしている。器壁は約1cmで均一で薄い。

⑦石製品（85、86）

ともに公道であるアカ道から出土した。

85は滑石製の五輪塔風空輪で方形のホゾ部の上に円形・扁平の風輪を彫出し、その上に断面円形の擬宝珠を彫出している。尖塔部は欠損する。

86は安山岩製五輪塔火輪でホゾ穴は円形で、断面乳頭状に作る。四隅軒下は底面より+1.5cmほど高く作り出し、四周の軒先も緩い円弧を描くように作出して立体感を持たせている。

⑧瓦（83、84、87～92）

83、84、89は棟瓦。

87、88は軒棟瓦で同一個体と思われる。瓦当文様は三ツ巴文に唐草文を組合せるものと思われる。

90、91も軒棟瓦で石榴様の中心飾りから2本の唐草と小葉が左右に1単位ずつ展開している。

92は90の軒棟瓦の裏面に印刻されたスタンプで「三田金屋 平井」と瓢箪の区画内に押印している。

—3. 1・2区遺構内外出土遺物（第40図93～131、）

ここでは、ガラス小玉、鉄砲の玉などを一括して掲載した。

①ガラス小玉 (93~119)

失透の緑色を呈するもので、平面円形、断面橢円形状を示す。直径3.5~4.5mm、孔径0.6~1mmを測る。他に1点透明感のあるうす紫色の同形・同巧のガラス小玉がある。93~117は1区土壌13(第22図)から土師器坏(第34図6、7)とともに出土。

②滑石製小玉 (120)

直径3.4mm、孔径1.4mmの丸玉で、表面は輝度が高い。

③鉄砲の玉 (121~127)

7個出土している。121~126は鉛製の玉で、121のように錫化で小さくなつたものや、122のように使用によりやや潰れかかったものがある。また、124~126のように製作時に気泡が入り込みわずかに中空になるものもある。直径10~13mm、重さ4.5~7.9g、匁換算で1.2~2匁が現在の直径、重さである。

127は鉄製の玉で、直径12mm、重さ3.8g・1匁を測る。中央部に鋳型合せ目のバリ痕が残る。

④銅製金具 (128)

全長6cm強の金具で、上端は扁平にして1孔を穿ち、体部中程は長方形に、先端部は方形になるよう敲打・整形している。小鐸の舌ともとれるが、鉄砲関係の金具の可能性もある。

⑤小柄 (129~131)

柄頭を右に、棟方を下にして作図している。全て銅製の小柄で、蟻縫ぎは棟方で行っている。

129は素紋で柄頭は丸く納める。袋部に穗茎が入っており、茎の錫化で膨らんでいる。

130は完形で9.5cmを測る。地紋に魚子地を打ち、その上に釣魚図を打ち出している。

131は素紋で錫化激しく、緑青がふいている。

—4. 1・2区その他の遺物 (第41図132~163、図版)

遺構外遺物を一括して掲載している。

①青磁 (132~138、147)

132、133、135は碗口縁部で、外面に硬化した雷文を線刻する。亀井分類Aタイプ(註4)。

134は口縁部下に横走する圈線を1本引き、下位に複線で蓮弁を描いている。内面体部にも不明な文様を線刻している。図示していないが他により丸みのある蓮弁を複線で描いたものも存在する。

136、137は見込み部に印花文を押捺し、137は外面に劍先蓮弁の退化した文様を直線文と山形文で線刻している。釉薬は厚く掛かり、黄色に近く発色している。亀井分類B-2タイプ。

138は稜花皿で口縁部内面に3条のクシ描沈線を陰刻し、外面に1条の沈線を入れる。

147は陶胎より土師器に近い黄灰色の軟らかい粘土を使用し、稜花形に成形する。口縁部内面は稜花に沿って線刻し、外面は体部との境であろうか段を設けている。施釉は表裏ともに光沢のある黄緑色の釉薬を掛けしており、部分的に剥落している。器種は判然としないが唾壺類か。

②白磁 (139~141、143~145)

139、140は端反皿で高台部疊付けを露胎にする他は施釉している。

141は薄く挽き上げられた碗で、体部外面にヘラ切りで芭蕉葉文を陰刻する。胎土は精良で、釉薬は透明の灰黄色（2.5Y7/2）をやや厚く掛けている。

143～145は端反りの小坏で合い似た形状を示す。143は高台逆梯形で、腰部から薄く挽きあげ、口縁は緩く端反する。

144は三角形状の高台から腰部を作らずに立ちあがり、口縁は緩く端反する。器壁は厚く、見込み中央、高台内面が突起状に尖っている。ともに釉薬は明青灰色の透明なもので、青白磁とも呼べそうである。

145も小坏で緩く外反している。胎土は陶胎質で透明な釉薬を掛け灰白色に発色している。

②象嵌青磁（146）

碗口縁部で、線刻で外面に雷文を、内面に1条の圈線を巡らし、白化粧土を充填している。灰緑色に発色している。

③青花（142、148～157、152）

142は棱花皿で内外面に圈線を引き、渦文風の文様を染付けている。

148は端反碗で、体部から緩やかに外反している。内面に四方櫛文を、外面に一重圈線と牡丹唐草文を染付ける。小野分類B群XI類である。

149、150は碗で、体部から薄く伸びあがる。149は内面に二重圈線、外面に牡丹唐草を染付け、上薬を掛けている。外面口縁部直下にはやや厚く釉薬を掛け、玉縁状に見せている。また二次的被熱により表面が失透している。150は体部外面、内面見込みに蛟龍文を描いている。小野分類F群X類。

151は碗底部資料で、見込み部分が饅頭心を示している。内面見込みに花十字文を描く。小野分類E群。

152は皿形とも取れるが、口縁部外面を幅広く平らに肥厚させている。直下に簡略化した雷文と蓮弁文を染付ける。

153、154は同文様意匠の別個体で、外面火焰宝珠文、内面見込みに二重圈線と玉取獅子文を染付け、疊付け部を露胎にする他は施釉している。小野分類B群VII類。

155は皿で大形品である。内面見込みには牡丹唐草を、外面体部、高台外面には飛雲文を染付けている。高台際の釉薬の納め具合や描法、気泡の入らない釉薬の使用など他の青花に比べ上質の出来映えである。

156、157は陶胎の碁笥底皿で156は内面見込みに二重圈線と捻花文、外面体部に芭蕉葉文、二重圈線を巡らし、157は内面見込みに寿字文を染付ける。小野分類C群。

158は小坏で高台部から緩く立ち上がる体部がつく。高台は三角形状に削り出す。内面見込みに圈線を引き、高台内には「正徳年造」の年款銘を入れる。見込み部には細かい使用による擦痕が残る。

④彩色磁器（159、160）

159は小壺か瓶の小片で、外面に赤、緑の2色で上絵付けしている。彩色部分には予め描線を入れており、薄墨色に残っている。内面は水挽き痕を留め、無施釉である。

160はメンコに転用された資料で、呉須絵に上絵付している。絵柄は不分明であるが葉文を縁取りした後、緑色を載せ、赤色は縁取りなしに書き込んでいる。内面は水挽き痕を留め、無施釉である。

⑤天目（161、162）

161は緩く大きく開く体部に単純に外反する口縁部が付く。内面ではこの屈曲部に明瞭な稜線が認められる。

162は高台片で高台内は薄く削っている。釉薬は飴色を呈し、161は全面、162は内面全面、外面高台際直上まで施釉する。高台際から高台内は無施釉。

⑥陶器（163～165）

すべて唐津陶で、163は溝縁皿で体部以下を欠損する。

164は丸縁皿で高台の作行きは155に似る。

165は立縁皿。内面に2箇所胎土目跡が残る。高台は竹節状に作出し、高台内は三日月に削り、中央に兜巾を残す。

166は徳利口縁部で頸部以下を欠損する。口縁部内面下まで鉄釉を施釉する。釉薬は二次的被熱でわずかに飛んでいる。この資料は他の唐津陶と比較し、胎土に白色粒子を含み、頸部内面に自然釉が溶け出している点異なり、朝鮮からの招来品の可能性を残す。

⑦土師質湯釜（167）

3個の破片で作図したもので、口縁部、底部は不明である。体部は扁平な形状を示し、口縁部は直に立ち上がるものと思われる。頸部外面には印花文を押捺し、鍔上には釣手を2箇所に貼付する。内外面ともにハケ調整を施し、外面口縁部、鍔部はナデ仕上げている。鍔部分の内面には、鍔接合時のユビオサエの痕跡が明瞭に残る。

⑧石鍋

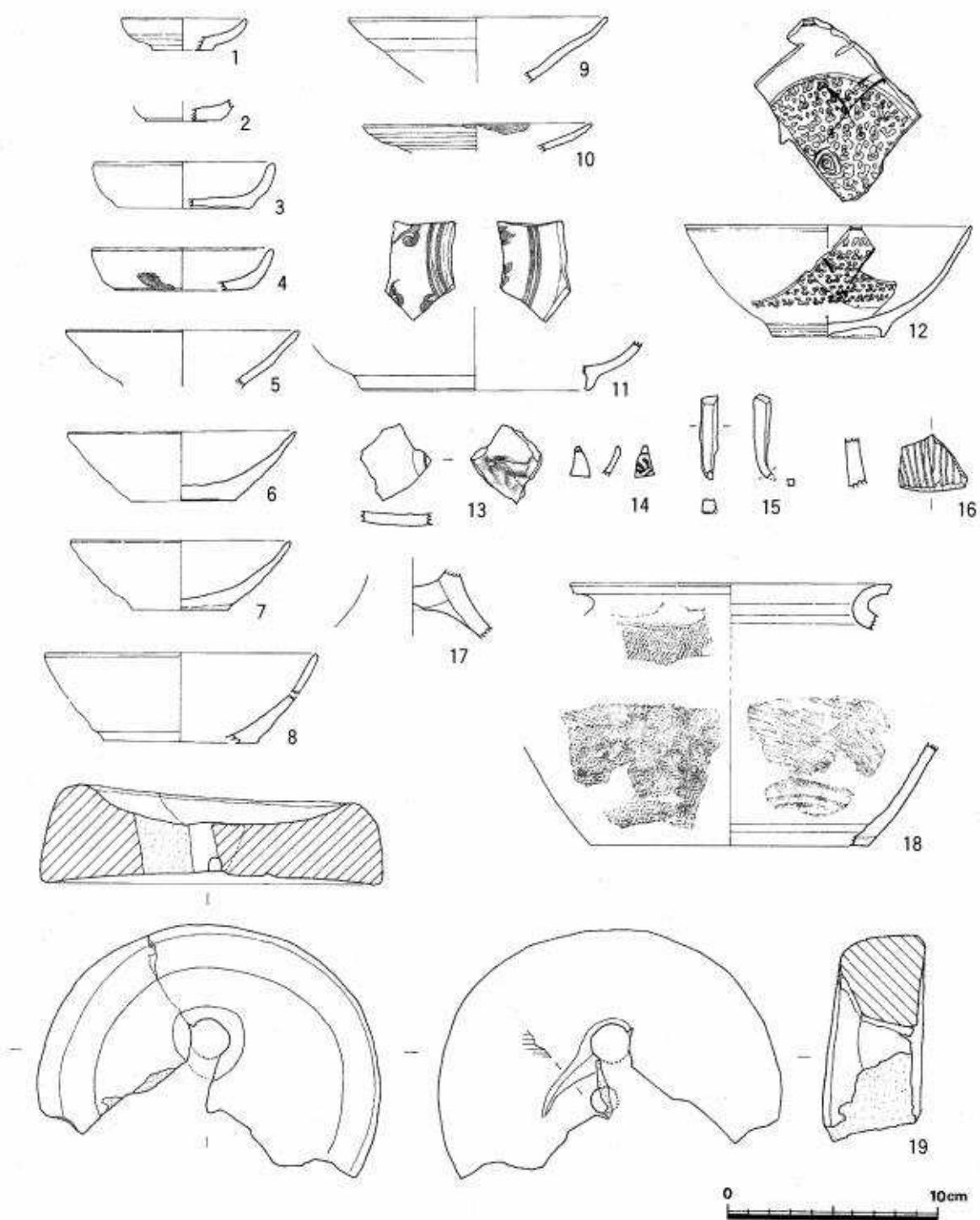
滑石製石鍋で口縁部資料である。角張った口縁部下外面には、やや厚い鍔が巡り、以下急に内湾して体部をなす。

註1 諫早市教育委員会 「沖城跡」『諫早市文化財調査報告書』第14集 2000

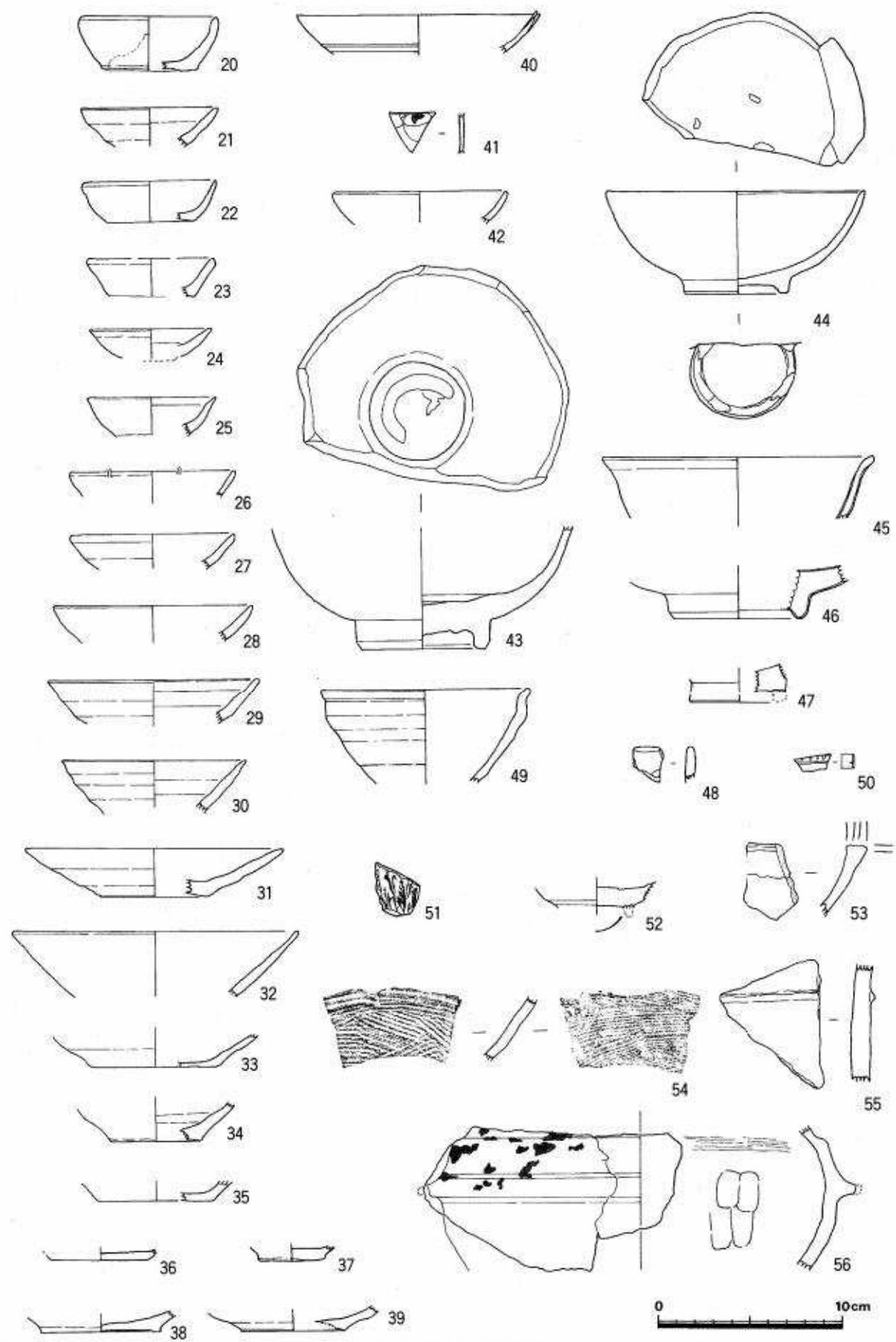
註2 小野正敏 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982

註3 長佐古真也 「「お茶碗」考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集 2002

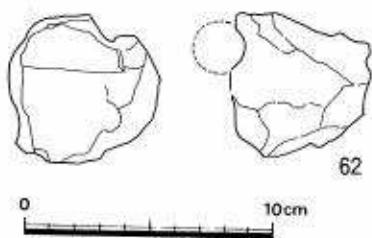
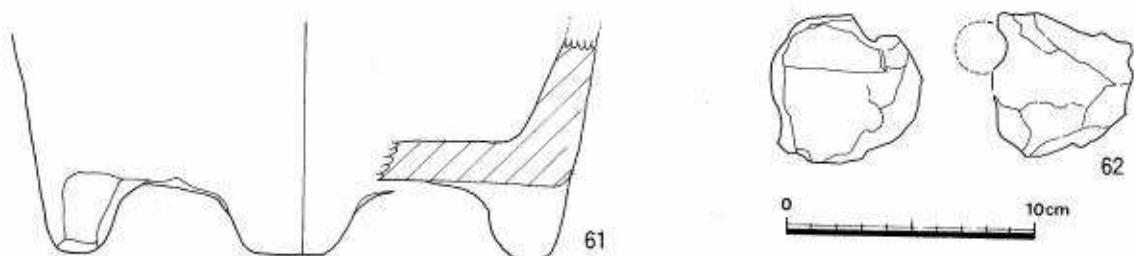
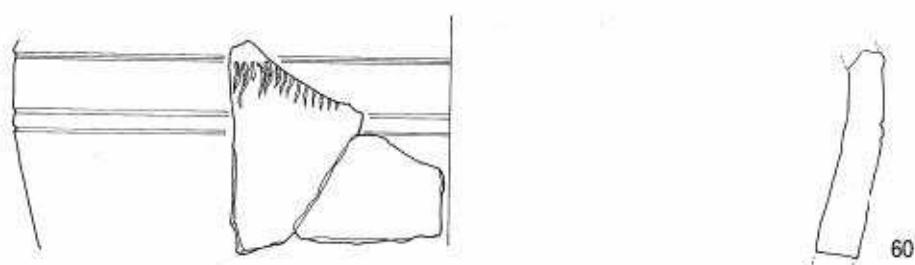
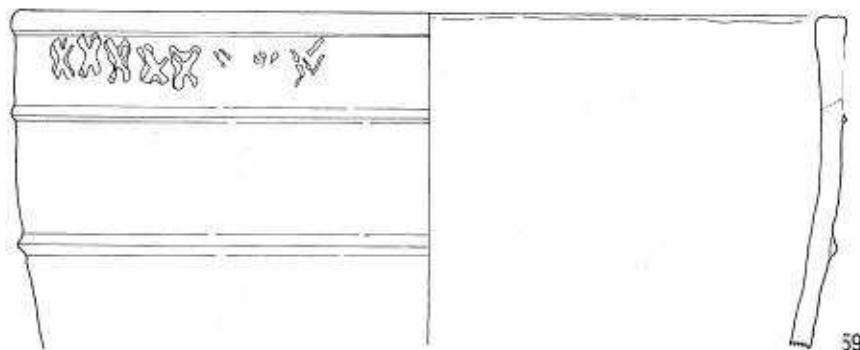
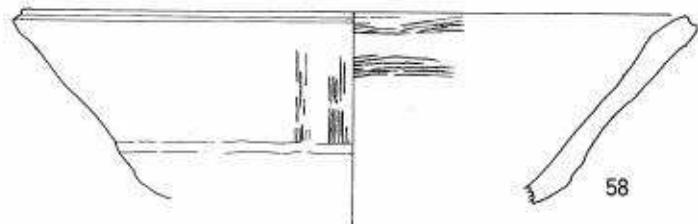
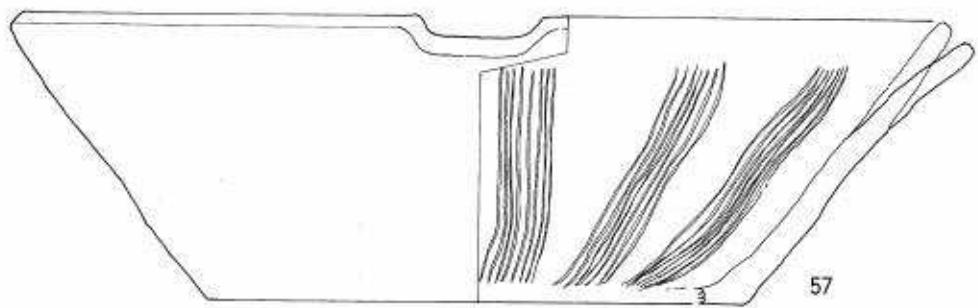
註4 亀井明藤 「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』1980



第34図 遺物実測図1 (18、19はS-1/6)

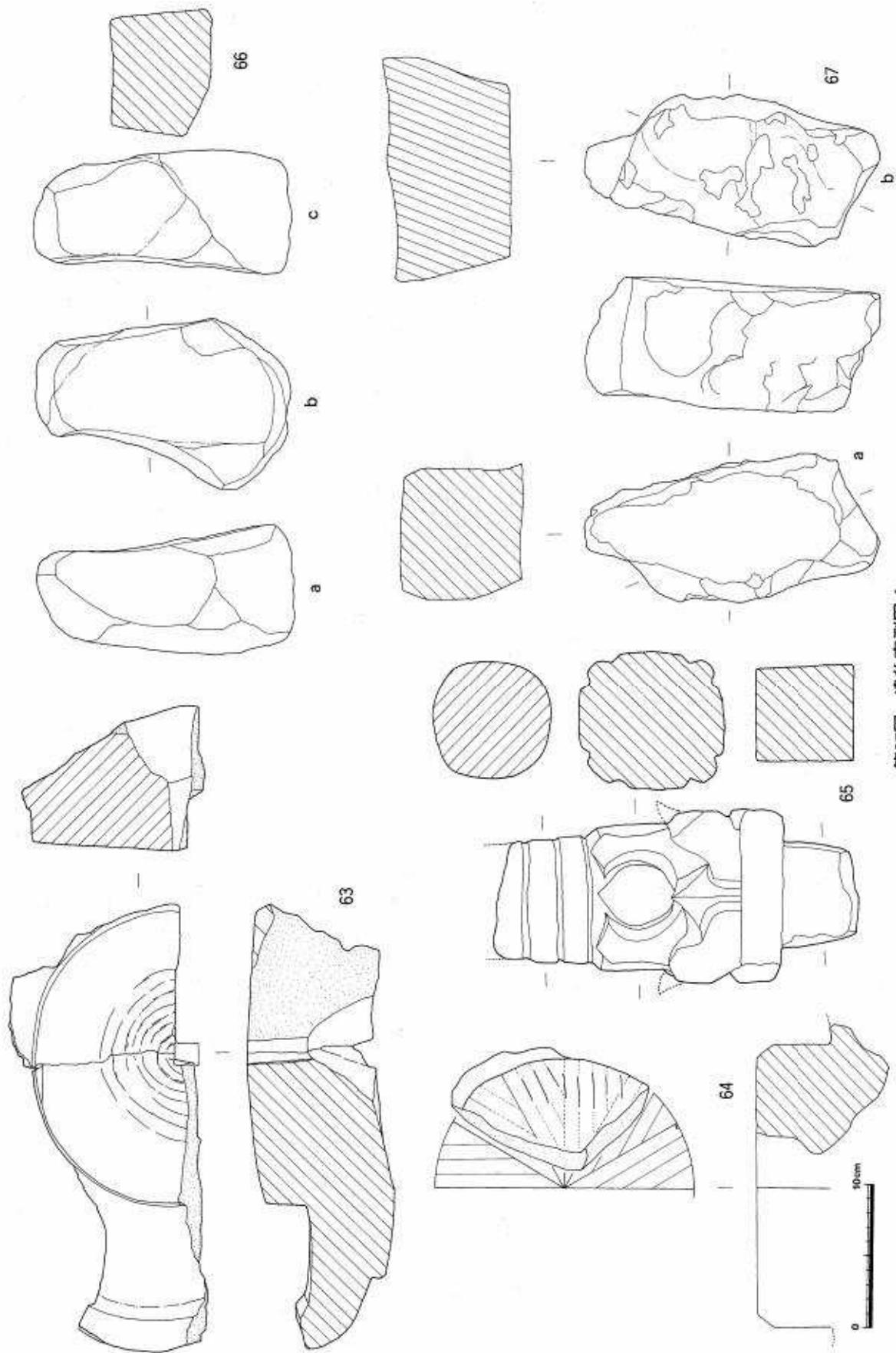


第35図 遺物実測図2

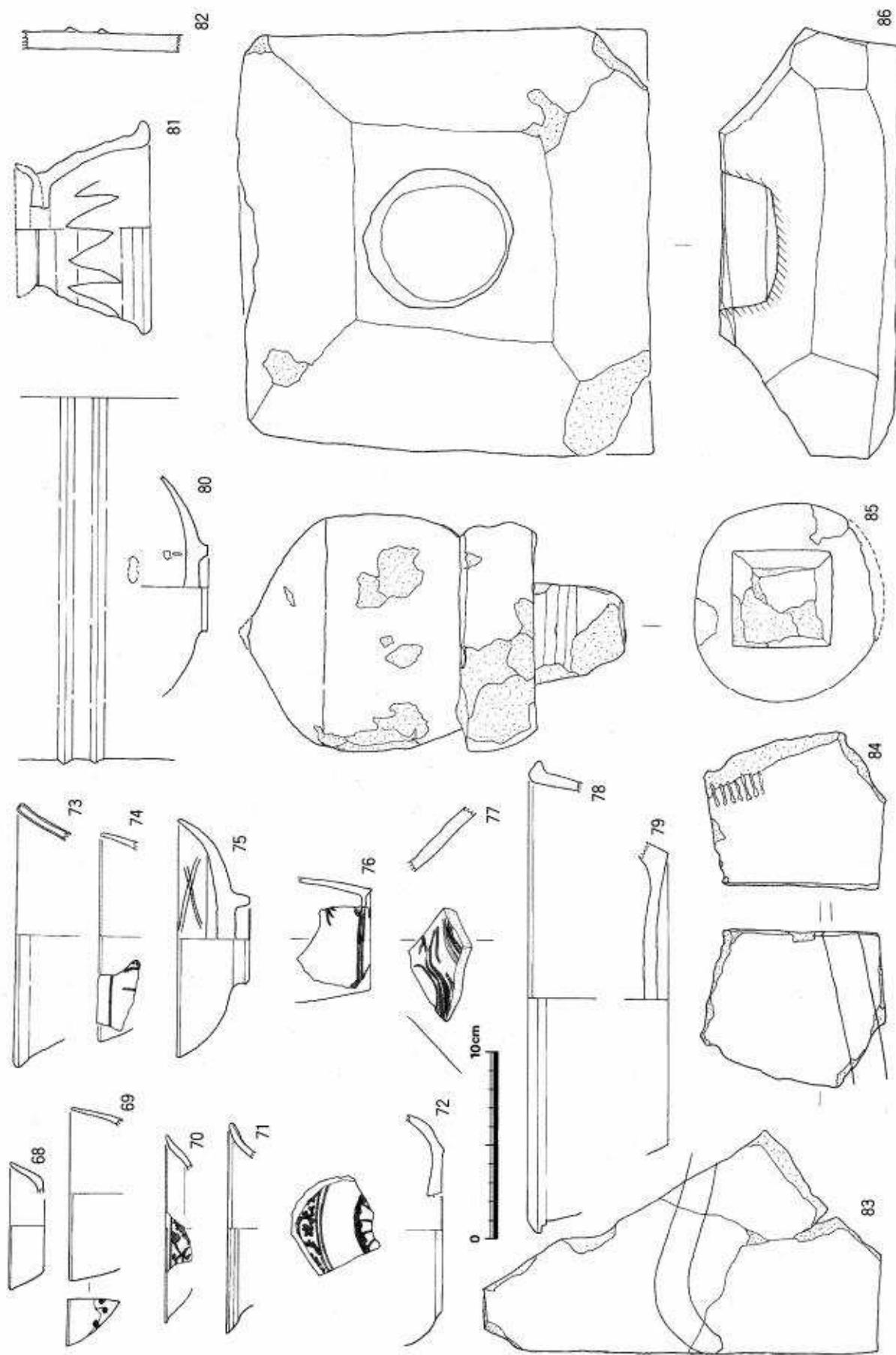


第36図 遺物実測図 3

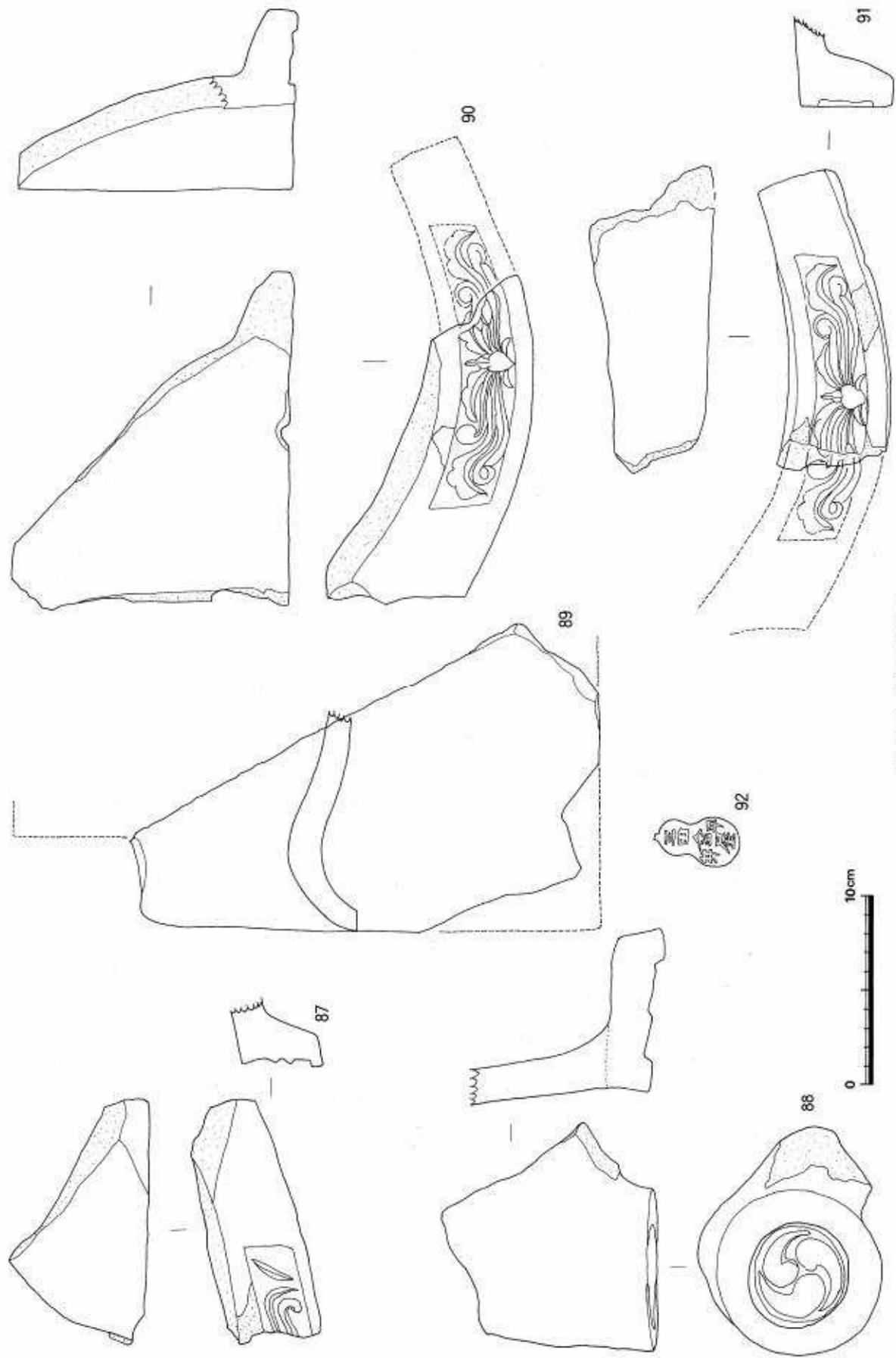
第37図 遺物実測図4

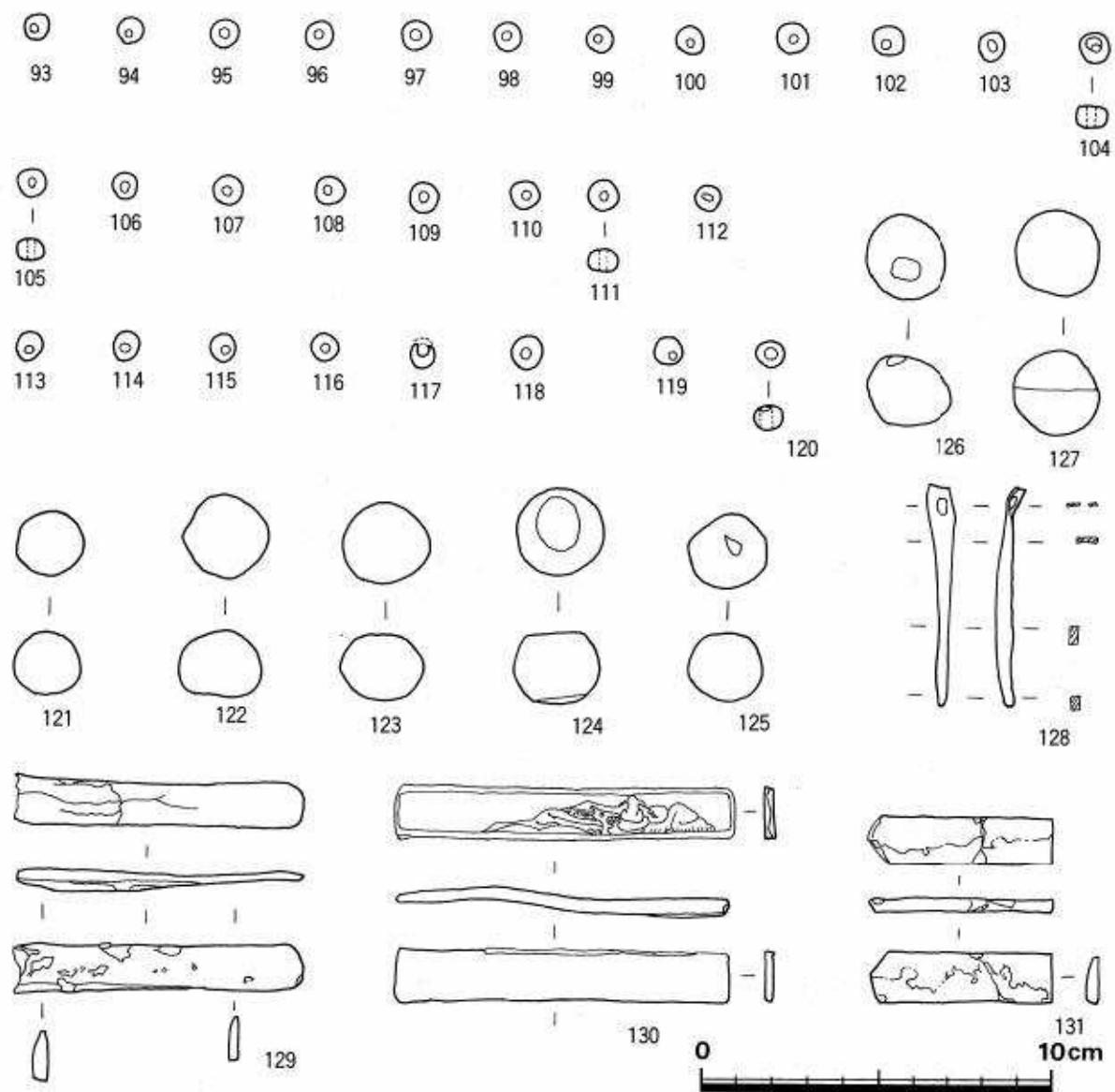


第38図 遺物実測図 5

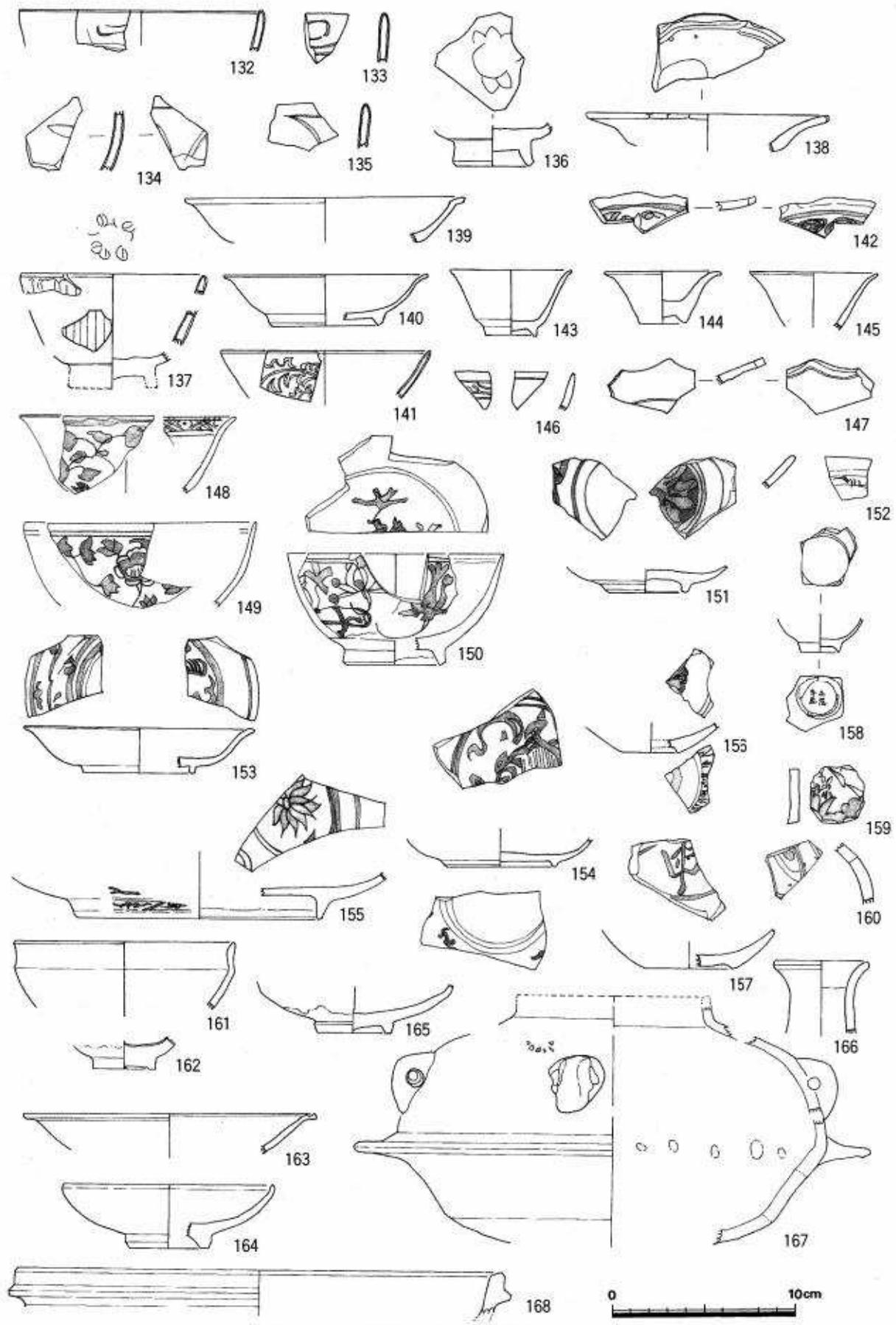


第39図 遺物実測図 6





第40図 遺物実測図 7



第41図 遺物実測図 8

VI 年神社石塔群・平松社石塔群

1. 年神社石塔群（明教寺石塔群を含む）

(1) 所在地 諫早市下大渡野町年神社

(2) 石材・種目・点数

当石塔群は、本殿背後に石囲いの中に集積されており、その下にまだ多くの石塔類が埋められている。ここでは、中世石塔を調査対象とする。

なお、年神社に隣接して明教寺があるが、ここでも中世石塔が確認される。そこで、明教寺石塔群を参考資料としてあげる。明教寺の石塔群は、当寺院の関係者によれば、現本殿の裏から出たものといい、本来は年神社の石塔類も同じ環境下に建塔されていたと思われる。

年神社石塔群

石材	種 目	点数	備 考
安山岩	五輪塔 地輪 水輪 火輪 風空輪	5 1 6	・火輪点は、その形態・大きさから主に14c後半頃のもので、15c前半前の範疇に入る。 ・風空輪1点も14c後半から主に15c前半ころの製作と思われる。 ・上記以外の水輪・火輪は、主に16c半ばから17c前半頃のものと思われる。
安山岩	宝篋印塔 基礎 塔身 笠 相輪	4 1 4	・相輪4点のうち1点は、14c後半から15c前半頃のもの。 宝珠部分が円筒状に伸び、長足の連弁装飾を施した相輪は、16c末から主に17c前半頃と思われる。 ・上端2段の基礎は、16c半ばころの製作。
緑泥片岩	五輪塔 地輪 水輪 火輪 風空輪	1 4	・緑泥片岩製の火輪・風空輪ともに16c前半から主に半ばころと思われる。

明教寺石塔群（参考）

石材	種 目	点数	備 考
安山岩	五輪塔 地輪 水輪 火輪 風空輪	1	・火輪は、その形態・大きさから主に15c後半から16c前半ころのもと思われる。
安山岩	有耳五輪 地輪 水輪 火輪 風空輪	2 2 2	・すべて16c末から主に17c前半頃の製作と思われる。
玄武岩	五輪塔 地輪 水輪 火輪 風空輪	1	・上端部に露盤を造り出したもので、1500年前後頃の製作と思われる。

安山岩	宝篋印塔 基礎 塔身 笠 相輪	4 2	・14c後半～15c前半頃のもの（笠1・相輪1）、15c半ば～後半頃のもの（笠1・相輪1）、16c前半～半ば（笠1）、16c後半～17c前半（笠1）が認められる。 ・15c半ば～後半頃の笠1点は、下端から最上端の枘穴に貫通する納入孔を穿ったもので、宝篋印塔笠としては珍しい彫出内容となっている。
緑泥片岩	五輪塔 地輪 水輪 火輪 風空輪	1 1 4	・地輪1点は上端1段で、上面中央に枘穴を彫る。1500年前後ころの製作と思われる。 ・水輪1点も、上記地輪とは別物であるが同時期の製作と思われる。金剛界四仏種子陰刻。 ・火輪4点のうち2点は1500年前後頃、他の2点は16c前半～半ば頃と思われる。
緑泥片岩	宝篋印塔 基礎 塔身 笠 相輪	1	・相輪1点は総高30.5cmで下端に枘（背高1.5cm）を造り、最大横幅7.5cmの非常に細身の相輪となっている。擦部は5輪を造り出し、上下請花、火焰を刻む宝珠も形骸化が認められ、16c前半～半ば頃の製作と思われる。

(3) 概 観

年神社裏手で確認される石塔群は、現状から見て隣接する明教寺石塔群と同じく、周囲から出たものを集積したものと思われ、実際両石塔群は石材・製作時期ともにはほぼ同じ様相を示している。中には14c後半から15c前半まで遡れるものもあり、当地の歴史を探る上から重要な石塔群と思われる。

現在確認される各種目の形態と石材から分析すると、大きく3期に分類される。

【第1期…1300年代後半～1500年代前半：安山岩製塔】

最初に確認される石塔群は、安山岩製の宝篋印塔相輪と五輪塔の火輪・風空輪で、それぞれ各1点ずつ認められる。中でも宝篋印塔相輪は擦部（上1輪）と上部請花、それに宝珠部分が残った残欠であるが、その形態は明らかに南北朝後期（14c後半）の様式を継承したもので、製作時期は14c後半～15c前半頃と思われる。

その年神社相輪と同形態の完形相輪（枘のみ欠損）と、それと一具の笠が明教寺で確認されるが、同形態の相輪は、県内では遠嶽石塔群（小長井町南平）や古園石塔群（南有馬町）で確認される。とくに遠嶽石塔群のものは、かつて故稻田三千年氏が確認された至徳2（1385）年の紀年銘をもつものであり、当神社の相輪はその至徳2（1385）年宝篋印塔の相輪に通じるものである（註）。

また、五輪塔火輪の1点と風空輪1点に、上記相輪とほぼ同じ時期のものが認められる。この火輪は軒横幅33.8cmの中型に属する火輪で、軒が厚くて下端が張り出した形態をしている（中央軒厚6.3cm、両端軒厚6.4cm、下端張り出し3.5cm）。全高18.5cmに対しやや軒横幅短い点が後代の製作を示しているが、13c後半頃の武雄五輪塔火輪（宝塔笠の可能性もある。佐賀県武雄市）や、14c前半頃に想定される阿弥陀寺宝塔笠（佐世保市中里町阿弥陀寺跡）の傾向を受け継いだものである。

五輪塔風空輪は、もちろん一石で造られているが、総高19.8cmで風輪上端横幅17.8cm、

下端横幅10.5cm、風輪背高6.8cmのやや半月形に近い形態をもち、その上にはば団形に近い空輪が載る（空輪背高12.0cm、最大横幅12.0cm）。とくに風輪上端横幅17.8cmに対し、空輪横幅は12.0cmと短く、本来の風空輪の形態を継承している。ただ、風輪背高が短く押しつぶした傾向が認められるところから考えれば、14c後半というよりも主に15c前半頃としたほうが妥当と考える。

なお、15c半ば～後半頃の遺品は、年神社では認められないが、明教寺石塔群中に宝篋印塔笠1点（納入孔を穿った笠）がある。また15c後半～16c前半頃の火輪1点が明教寺石塔群中にある。さらに、明教寺石塔群中ただ1点認められる玄武岩製の火輪1点も1500年前後頃のものと認められる。

註 現在、至徳2年銘の遠嶽宝篋印塔には16c後半～17c前半ころの相輪が載っている。

本来は、年神社相輪と同じ形式の相輪が載るものであり、遠嶽石塔群中に同形態のものが数点確認される。

【第2期…1500年前後～1500年半ば：主に緑泥片岩製塔】

この時期に入る石塔群は、基本的に西彼杵半島産の緑泥片岩製塔で占められている。年神社で五輪塔種目計5点、明教寺で五輪塔種目計6点・宝篋印塔種目1点が確認される。両石塔群合わせて計12点の緑泥片岩製各種目が認められるが、そのほとんどは1500年代前半～半ば頃のものである。

この時期に入る緑泥片岩製塔は平松神社（諫早市本明町）でも確認されるが、明教寺石塔群の中で五輪塔地輪1点と水輪1点それに火輪2点がやや古く1500年前後頃の製作と思われる。

ただし、明教寺石塔群中、安山岩製の笠1点のみがこの時期の製作に入るが、この緑泥片岩製塔と第1期安山岩製塔とは一部で重複しながらも基本的には第1期安山岩製塔の後に緑泥片岩製塔が建塔されたものと思われる。

【第3期…1500年代半ば～1600年代前半：安山岩製塔】

この時期に入る安山岩製塔は、年神社で18点、明教寺で7点、計25点が確認される。この時期の安山岩製塔は、なにも当地区のみで認められる傾向でなく、県下全域で認められるものである。その背景には、緑泥片岩製塔の仏塔製作停止がある。

緑泥片岩製の仏塔は、中世にあっては島原半島・諫早・北高地区・松浦市今福地区・福島・鷹島・壱岐・対馬を除いた長崎県本土部や島嶼部で鎌倉期より建塔されていたが、1500年代に入ると西彼杵半島における石材供給が貧弱化し、また大村純忠のキリストン政策によってそれまでの仏塔製作が完全に停止したことなどから、1500年代後半には全く製作されてない。そのため、キリストン弾圧期や領域的にキリストン信仰を強制しなかった地域では、旧来の緑泥片岩製塔を補う形で佐賀形式の安山岩製塔が搬入され建塔されている。

諫早地区の場合、「西郷記」などに記されているように、一部キリストンによって仏塔などの破壊活動が実施されているが、本来当地区は主に佐賀形式の安山岩製塔で占められ

ている。そのためもあってか、第2期の緑泥片岩製塔の後には佐賀形式の安山岩製塔が多く認められる。

以上、年神社と明教寺の両石塔群で認められる傾向を示したが、下記資料Iは両石塔群で確認される各石塔の製作時期を石材でもって分類したものである。この資料から下記のことが窺われる。

- ① 1400年前後から安山岩製塔が確認されるところから、当地区の開発が非常に早い段階から進んでいたことが理解される。

このことは、現本明町の平松神社で1200年前後頃の滑石製宝塔宝珠や鎌倉後期頃の自然石板碑（釈迦三尊種子彫出）が確認されることからも是認され、当地が本明川沿いに展開された経済（庄園）上の中心的役割を果たしていたことが窺われる。

- ② 第2期緑泥片岩製塔の建塔時期が極めて特徴的である。この分類表で示された傾向は、当地区の中世期の様相を知る上で極めて示唆的であり、1500年前後から半ばにかけて何らかの政治的変動があったように思われる。この傾向が何を示すのか、今後文書資料との検討が必要と思われる。
- ③ この地域は歴史的に大村勢力との境をなした地域もあるが、両地域における石造文化の展開は明らかに異質である。

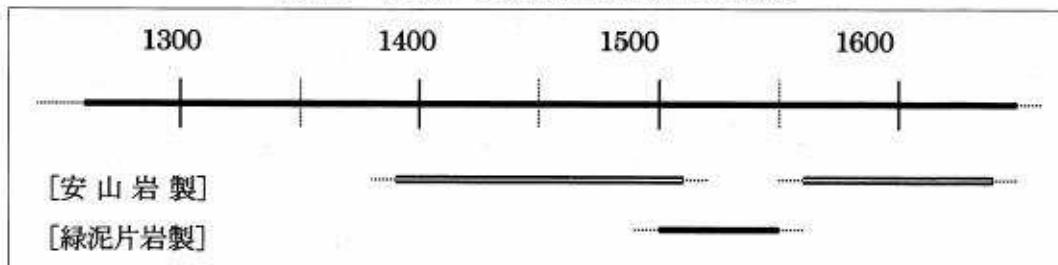
本明町を含めた現諫早地域にあっては最初から佐賀形式の安山岩製塔で占められ、途中（16c前半～半ば）で緑泥片岩製塔が建塔されている。

それにたいして、現大村地域における中世石造物の様相は、基本的には鎌倉後期から室町後期まで緑泥片岩製塔で占められている。ただ途中（南北後期～室町前期）で佐賀形式の安山岩製塔が一部まとまって建塔されており、また非常に特殊な出方として鈴田地区で1点のみ南北朝後期頃の肥後凝灰岩製塔が確認される。さらに年神社などで確認される14c後半から15c前半ころの安山岩製宝篋印塔は、大村側では全く確認されない。

このように現大村地域の様相は、現諫早地域とは逆の展開を示しており、中世における両地域の政治社会上の異質性が認められる。

なお、現森山町の出方に現諫早地域と同様の展開が見られることを付記しておく。

資料I 年神社・明教寺石塔群製作年代分類表



(4) その他の遺品

年神社本殿裏手に上部を山形に整形した類型板碑がある。石材は安山岩で総高150cmの江戸

期特有の形態をしている。その他の法量は、下端横幅48.0cm、上端横幅47.0cm、下端厚15.0cm、上端厚12.5cmで、背面は粗削りで約8.0cm盛り上がって緩やかな半円状をなす。正面は上部を花頭状に0.5cmほど彫り下げた平面に、下部に坐像の観世音菩薩像を彫り、その上方と下方に次のような銘文を陰刻している。

	金□禪門
寛文十一辛亥(?)天九月吉祥日	□□禪門
種子(サ) [蓮台] 南無大慈大悲正觀世音菩薩	□□禪門
肥前國高來郡諫早庄□□村	□□禪門
(「大渡」か)	□□禪門
	□□ (?)
	□□ (?)

[※ □不明 種子サ(正觀音)]

形態や彫出内容から、寛文11(1671)年の紀年銘は間違いないものと思われる。この觀音菩薩板碑は觀音講の所産であるが、鳥居が同じ寛文11年銘であることから、鳥居と同時期に建立されたものと思われる。また同所には「寛延二天/觀世音講中/十月廿三日」(寛延2年:1749)と陰刻された觀音石像もあり、当地区における觀音信仰の伝統が読み取れる。

なお、鳥居の拓本は探っていないが、肉眼で判読した範囲では、一部觀音板碑と同様の内容が陰刻されていることを付記しておく。

2. 平松社石塔群

(1) 所在地 諫早市本明町

(2) 石材・種目・点数

石材	種目	点数	備考
滑石	宝塔基礎 塔身 笠 宝珠	1	宝珠部分総高6.0cm、最大径5.5cmで、下端に背高2.0cm・上端幅4.3cm・下端幅2.5cmの逆円錐形の柄は造り出されている。形状ならびに石材が滑石製であることから、宝珠笠にのる宝珠と思われ、1200年前後の製作であろう。
砂岩	自然石板碑 (類型板碑)	1	総高約120cm・最大横幅81.0cm・厚11.0cmの砂岩板正面に、上部に種子バクと右下に種子アン、左下に種子マンが縦長に大きく薬研彫りされている。积迦三尊自然石板碑であり、その彫出内容から鎌倉時代とくに後期頃の作と思われる。
安山岩	五輪塔地輪 水輪 火輪 風空輪	1 6 5 5	形骸化した形態から、すべて16c末から17c半ば頃の製作と思われる。とくに風空輪5点は、すべて17c前半~半ば頃と思われる。
安山岩	宝篋印塔基礎 塔身 笠 相輪	1 1 6 1	・基礎1点・塔身1点・相輪1点は、ともに16c後半~17c前半頃の作。 ・笠6点のうち1点は15c前半~半ば、1点は1500年前後ころ、その他4点は16c後半~17c前半頃と思われる。

緑泥片岩	五輪塔 地輪 水輪 火輪 風空輪	3 1	・水輪3点・風空輪1点は、ともに1500年前半～半ば頃の作と思われる。
------	---------------------------	--------	-------------------------------------

(3) 概観

当石塔群で、とくに重要な遺品といえば、滑石製の宝珠と砂岩製自然石板碑であろう。他の五輪塔・宝篋印塔は、年神社・明教寺石塔群の建塔状況と同じ様相を示している。

【宝塔宝珠】

滑石製の宝珠は、現総高6.0cm・最大径5.5cmの小形の宝珠で、笠上端の柄穴にはめるための柄が逆円錐形状に造り出されている。

この宝珠が納まる笠の事例として、佐賀県鹿島市貝瀬の貝瀬天満宮の宝塔笠がある。石材はやや緑泥片岩に近い滑石製であるが、この笠は軒横幅20.0cmの小形で、上端から笠裏面まで貫通する柄穴が穿たれている（第42図参照）。この笠が出た貝瀬地区では、前方の岩屋山で滑石製の宝塔塔身が確認され、同所で出た滑石製の石仏を含め、現在は蓮巖院（鹿島市能古見）で保管されている。この塔身と一具ではないが、ほぼ同時期の宝塔笠として貝瀬天満宮の笠は位置付けられる。製作時期は、蓮巖院保管の塔身・石仏が平安後期となっており、形態も首肯できる年代であることから、貝瀬宝塔笠もほぼ同時期の製作と思われる。

ところで、形状・石材から平松社宝珠に通じる宝珠は、県内でも数点確認される。東彼杵町、西海町、大瀬戸町でそれぞれ1点ずつ認められるが、この3点はともに平松社宝珠より一回り大きく、しかも宝珠部分が円錐状に尖り、下端に露盤を意識した方形の造り出しをもっている。さらに下端部には四角柱状の大きな柄を造り、形態的にある程度様式が完成してきたころの製作と思われる。

これに対し、平松社宝珠の方がより精巧で彫出内容も優れ、本来の宝珠の形状を示しており、上記3点の宝珠よりやや時代が古いように思われる。1200年前後それとも1100年代後半の製作として方が妥当と思われ、先述した鹿島蓮巖院宝塔塔身などとほぼ同時期の製作と考えられる。経塚に伴う地上標識としての宝塔宝珠であろう。

なお、同所では以前、滑石製の笠塔婆竿石も確認されており、今回の宝珠を含め、当地の歴史性の深さが窺われる。

【釈迦三尊自然石板碑】

当地の平安後期以来の伝統が鎌倉期にあっても存続していたことを示す遺品が、この釈迦三尊自然石板碑である。

参道階段右側に立つこの自然石板碑は砂岩製で、現総高120cm・最大横幅81.0cmほどの板状碑面に、上方に「バク」（釈迦如来）、右下に「アン」（普賢菩薩）、左下に「マン」（文殊菩薩）の種子が、それぞれ薬研彫りで陰刻されている。釈迦三尊の一般的な配置からいえば、アン（普賢菩薩）とマン（文殊菩薩）は左右逆である。

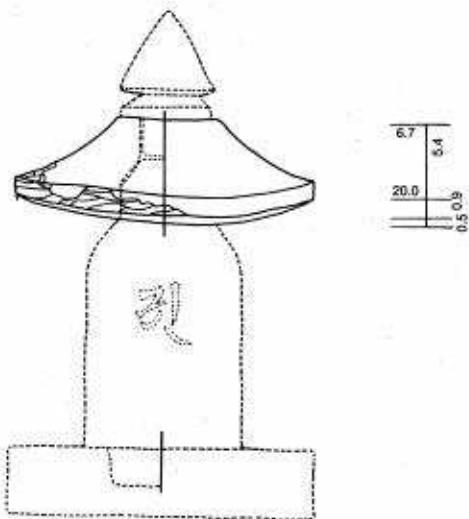
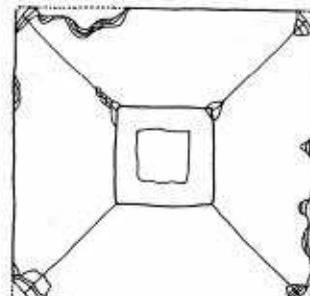
この自然石板碑の製作年代を探る一番の決め手は、種子の彫出の仕方にある。三尊の種子は、ともに大振りで縦長に彫られている。バク（釈迦如来）は縦38.5cm・横37.0cm、アン（普賢菩薩）は縦31.0cm・横20.0cm、とマン（文殊菩薩）は縦30.0cm・横25.0cmの枠内に大体彫られており、碑面面積に対してもいかに大きく縦長に彫られているかが理解されると思う。

彫出の仕方は薬研彫りであるがやや浅く、これと同様のものは千々石町阿弥陀寺跡の自然石板碑（鎌倉後期頃）に彫られた「ア」（胎藏界大日如来・種子縦51.5cm・横48.0cm）に通じるものがある。この阿弥陀寺跡自然石板碑は県内最大の種子を彫ったもので、同町榎田の女人堂跡にある自然石板碑同様、鎌倉後期に比定される。のことから考えても、おそらくこの平松社自然石板碑も鎌倉時代後期頃には製作されていたものと思われる。

また大村市中里町内倉の通称「鈴田道意」の墓は角柱塔という非常に珍しい塔形をした石塔であるが、石材がこの釈迦三尊自然石板碑と同じ砂岩製で、しかも角柱塔上方に縦長に大きく彫られた金剛界四仏種子の彫出の仕方が似ている。この角柱塔は、種子キリーク側正面に「閑江道阿居士」と陰刻があり、「鈴田道意」の墓塔となっている。ただ、その法名と上部金剛界四仏種子の彫り方は明かに違っており、法名部分は後代に彫られたように思われる。本来の角柱塔そのものは、鎌倉から南北朝前期頃までは建塔されていたようと思われる。

なにはともあれ、この平松社釈迦三尊自然石板碑は、鎌倉後期頃には製作されたものと思われる。

なお、長崎県内で、このような古式仏塔で釈迦三尊を彫ったものは他にない。そういう面でも、この自然石板碑は中世宗教を探る上から非常に貴重な遺品と思われる。



鹿島市貝瀬（貝瀬天満宮）宝塔（推定高約40cm弱）
※相輪の場合は総高約55cm

第42図 宝塔宝珠実測図

VII 総括

以上、今回出土した遺構・遺物について記述したが、ここで若干のまとめを行い総括したい。

1. 建物、その他遺構について

今回検出された遺構は建物を中心であり、それも瓦葺でない総掘建柱の立物である。同時期の総領であった西郷氏が築城した現在の諫早公園の居城が李朝瓦を一部使用した城館を構えたと考えられるのとは一種異なっている。このことは尾和谷城に先行する13~14世紀と考えられる平松城の根小屋の調査でも瓦が出土しなかったのと同様の傾向を示している。両城ともに大村との境目に位置し、平松城から尾和谷城への移行・継続が想定される。

さて、建物を構成する柱穴は1区で767本、2区で753本を検出した。このなかで建物あるいは柵として復元に利用した柱穴が、1区で約62%の470有余本、2区では約46%の350有余本である。

1区での柱穴の出土状況は切り合いを示すものは少ないものの、300本程を復元できなかつたのは、上屋が複雑な構造を示すのか、あるいは柱穴を掘ったものの利用しなかったかどちらかである。

また1区では柱穴群の縦まりが約400~500m²に集約され、それらが相互に約20~30m間隔を置いて立てこまれている。この一定の間隔を置いたのは火災時の類焼の予防、平場あるいは屋敷畠の存在などが考慮されるが、遺跡内における場の利用の在り方に好資料を与えるものと思われる。

さて、1区では柱穴に柱在が炭化して残っていたり、また立ち腐れ状態で柱穴の芯部分、即ち柱材の痕跡を想定させるものが多々存在した。これは、柱材を途中で切断して再利用したか(建物14と建物13の関係)、あるいは建物が建ったままの状態で朽ち果てたかの状況を示している。この現象は建物としての機能の廃止を示すものとして理解される。

また建物13、14に重なるように建物15が存在する。これらの建物は一時期の所産でなく、重複した結果であり、建物1、2、28や建物5、6の関係、また建物9、10、11や建物17、18の関係も同様である。

重複関係に在る建物の分離を、柱芯間の距離で分類を試みたものの、200cm、即ち6.6尺以外に多様の柱間距離が採用されており、有為な差を見出せなかった。これは建物内の部屋などの用途の違いにより異なる柱間距離が使用されていることに他ならないようだ。

そこで、出土遺物や立地の状況、建物の桁行き(主軸)の分布などから建物の分離を勘案すると、以下のように整理できそうである。

I期…建物14、16、18、5、6、11

II期…建物8、13、17、9、7、23、10、29、22、20、21、19、1、2、3、4、28

III期…建物15

これに、他の遺構を加えると

I期…池状遺構

II期…ミゾ1、土壙4、13（I期か？）

が考えられる。他の遺構は、III期以降、現代までの所産である。

さて、検出された柱穴のうち、300有余本の未利用柱穴の存在は、建物の上屋構造の複雑さに伴う研究の立ち遅れが痛感される。ただ我われ調査者も上屋構造の復元を考慮しつつ建物の想定を行ったが、これとても確実とは言えない憾みを有している。特に上屋構造のうち平屋構造なのか、階層を持つ2階建以上のものなのかなの想定はなおさらである。

2区では下大渡野町2273、2293、2292、2290番地の4筆と公道部分を調査した。2273番地は2区の北端、2293番地は2273番地の南側、2292番地は西隣、2290番地は公道を挟んだ西端の位置関係にある。検出された遺構は1区同様柱穴が主であったが、筆毎に纏まって検出され、筆によって土地利用が規制されていた様子を窺うことが出来た。特に2292番地は通称地蔵田と呼ばれ、かつて五輪塔の出土が見られたということであるが、第2年次の土壙を除けば今回、遺構の検出はなされなかった。2区を全体的に見ると、1区同様建物群が20m前後の緩衝地帯を設けて営まれている。

2区のなかで、建替えが頻繁に行われたのが2293番地である。柱穴群は大いに輻輳し、建物を復元するのに困難であったが、3棟の建物が建替えられた結果であることが判明した。2区における主たる建物であり、この地番内でわずかに柱穴の位置をずらしながらも建替・利用する必要のある建物であったのであろう。

この他、建物の切り合い関係は建物4と5、6と7、8と9があり、建物6、8、9はG7ピット33を共用し、また建物9、10はF7ピット30を共用している。さらに建物10と11は近接しており、前後関係が考えられる。

以上を整理すると

I期…建物3、4

II期…建物2、1、5、7、8、10、6、12（土壙3）

III期…建物9、11

となりそうである。

これに他の遺構を整理すると、

II期…土壙1、2、5、祭祀遺構

他の遺構は、III期以降現代までの所産である。

2区では建物12（土壙3）に特異な建物の存在が指摘でき、これは神社関係の本殿と見られる建物であろう。

他に建物9が寺院と想定される。これは四周に回り縁、或は庇を有していることと、北壁から2尺・約60cm柱を伸ばし（F7ピット21、88）、この柱から南に6.6尺・200cmの位置に柱（F7ピット36、39）を立て、厨子を安置する様子を見せることである。因みに、江戸時代の『郷

図』の中に「クランラン、咸應寺跡」と記載があり、また直西下位に通称「ブクデ、仏供田」と呼ばれる田があり、その蓋然性を強くする。この建物9に先行する建物は不明であるが、建物1～3を想定しておきたい。

ただ、以上は鎮壇具、あるいは宗教関係の遺物の検出がなされず想定の域を出ないが、往時の政治状況などを考えると不可欠の宗教的な建物と思われる。

2. 検出遺物について

遺構から検出された遺物を中心に記述・分類したが、ここでは遺物以外の物をも含めた遺物群の時間軸と、建物群の併行関係について記述したい。

遺構内外から出土したものの中に古い一群を検出することができる。すなわち青磁の雷文帯蓮弁文碗（132～135）と口縁部がやや端半する無文の碗（45）、無文の碗で内面見込み部の釉薬を円形に剥いでいる碗（43）、稜花皿（138）、青花碗B類（148）などで、14世紀中頃～15世紀後半に位置付けられるもので、本遺跡の場合は15世紀代を中心とするものであろう。I期と位置付ける。

次に中心となるのが、青花の大部分と、青磁で内面見込みに印花文を押印し、外面に剣先蓮弁を線描きする一群である。建物の大部分もこの期に集中する傾向を見せており、15世紀後半～16世紀後半に位置付けられ、本遺跡II期のものである。

最後は唐津陶の溝縁皿、二彩唐津、銅緑釉の皿、現川焼などを包括する17世紀～18世紀前半に位置付けられるもので、本遺跡III期である。

以上の3期が本遺跡に残された遺構群の存在した時期であり、概ね遺構の時期分類と軌を一にしている。

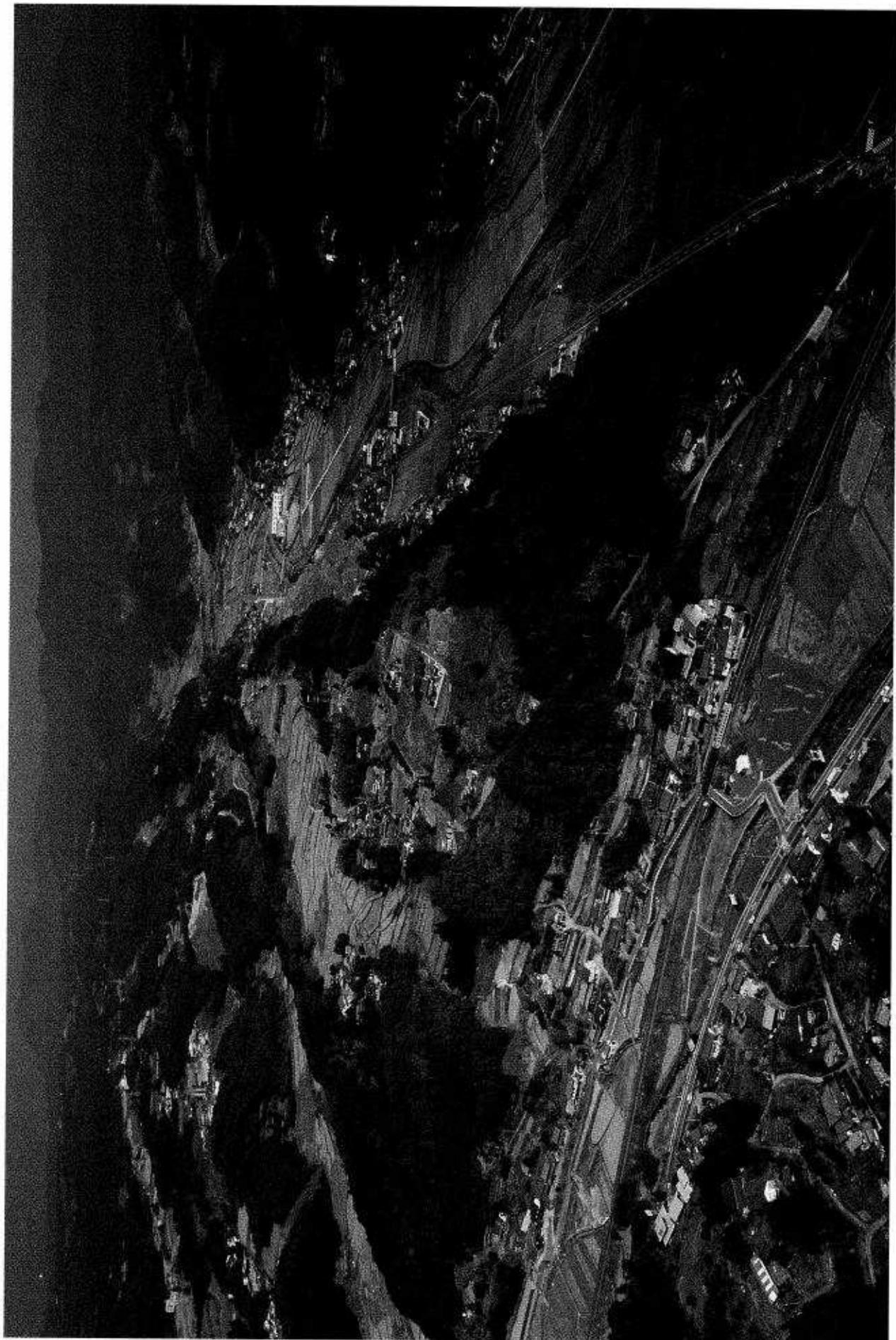
すなわち、I期が「尾和谷」名称の初見の文明6年頃に相当し、境目の城館としてこの地を占拠し、

II期が尾和谷軍兵衛、弥三郎が活躍した元亀・天正の頃に相当する。1区と2区の建物は柱穴を通してみた場合、際立った違いを見せている。すなわち、1区が建替えの少ない非日常の空間の存在を想定させるのに対し、2区は頻繁に建替えを行っており、日常の空間を想起させることである。非常態と常態の建物群、城的な建物群と館的な建物群とも評価できよう。

III期には建物遺構が極端に減少し、II期以降かなりの面積が開田・開畠されたことを理解させる。これに伴いこの地区の居住空間は極めて現在地に近接したことが判明する。III期はこれまでの時期を含んでいる。

以上により、本遺跡が平松城に後続する大村との境目の城として存在したと総括できよう。

図版



尾和谷城跡全景（北←）

図版 2



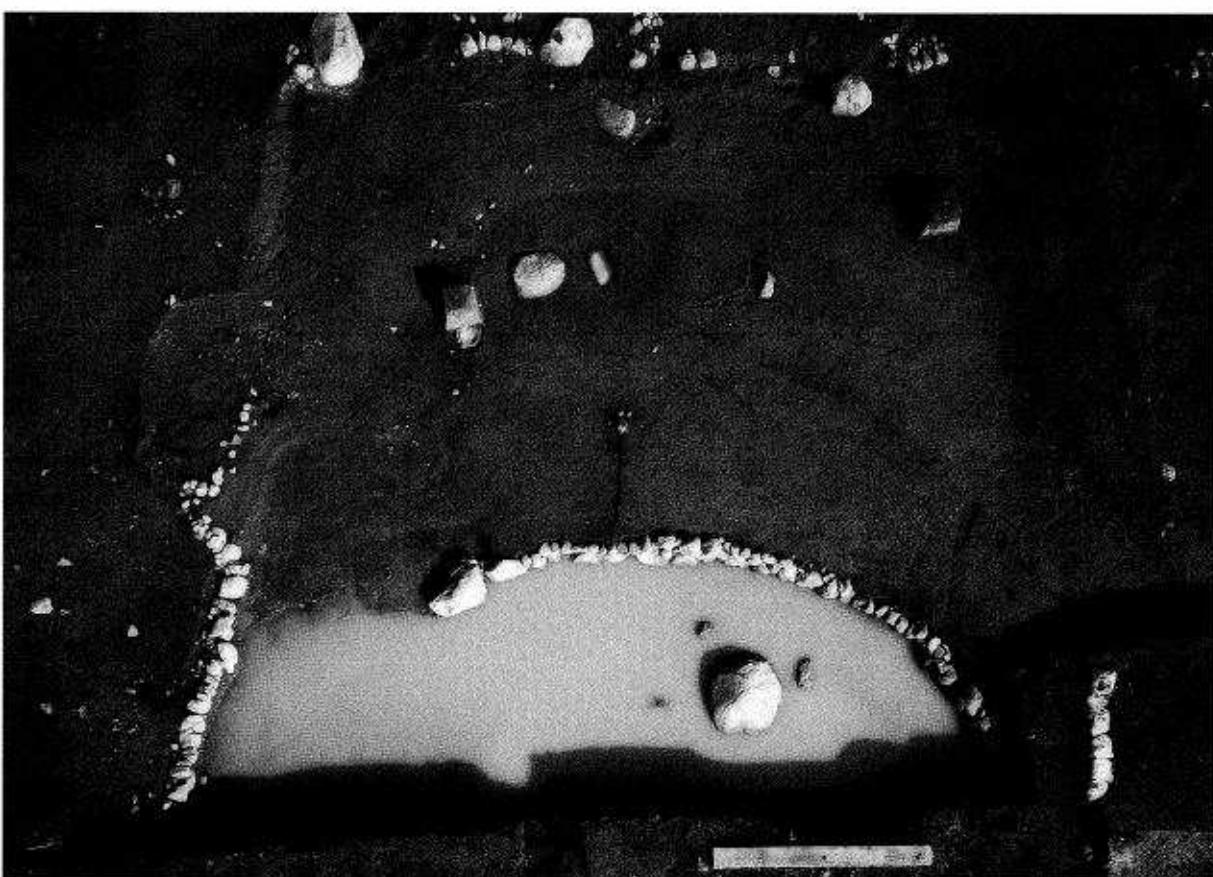
1. 1区・2区全景 (北→)



2. 1区全景 (北→)



1. 1区 A~Cトレンチ全景 (建物 1~4、28; 北↑)

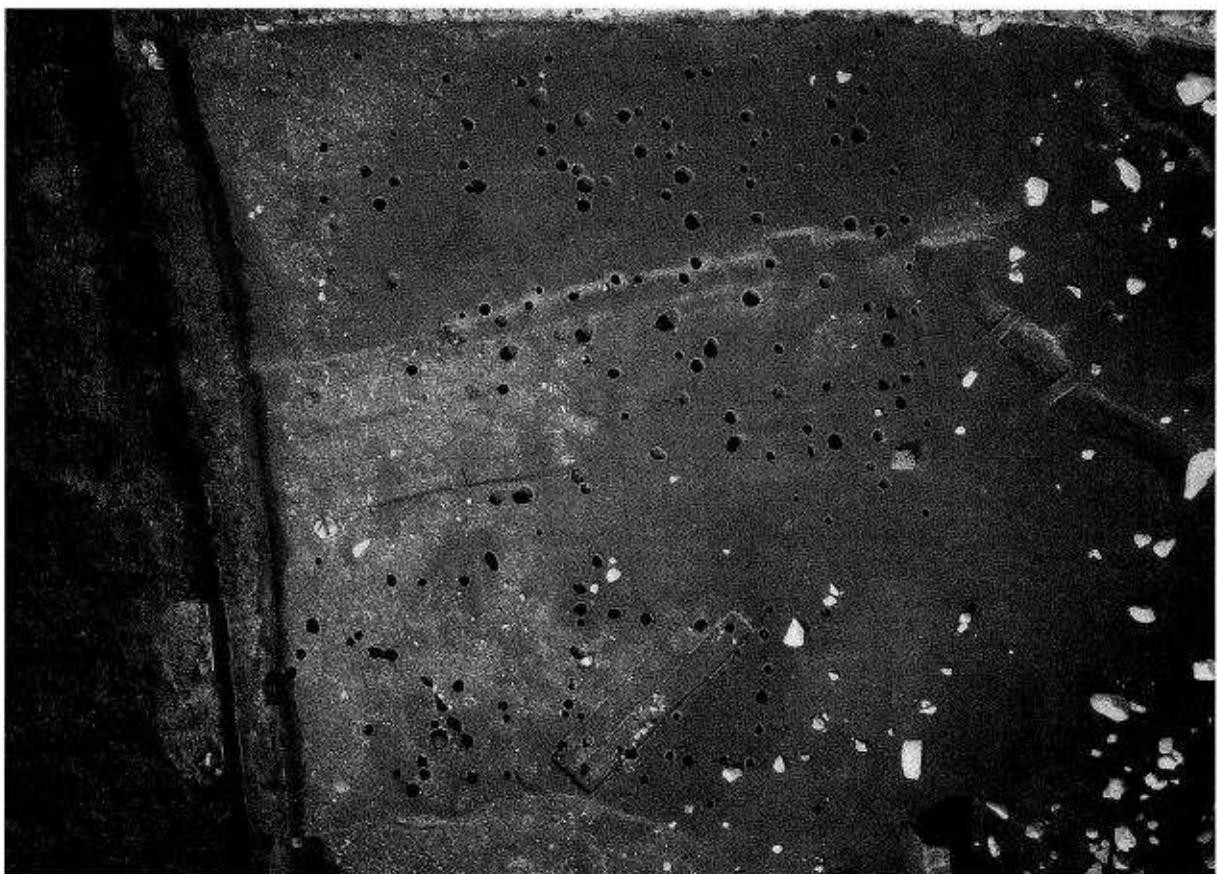


2. 1区 A 3・4トレンチ池状及びミゾ様遺構 (北↑)

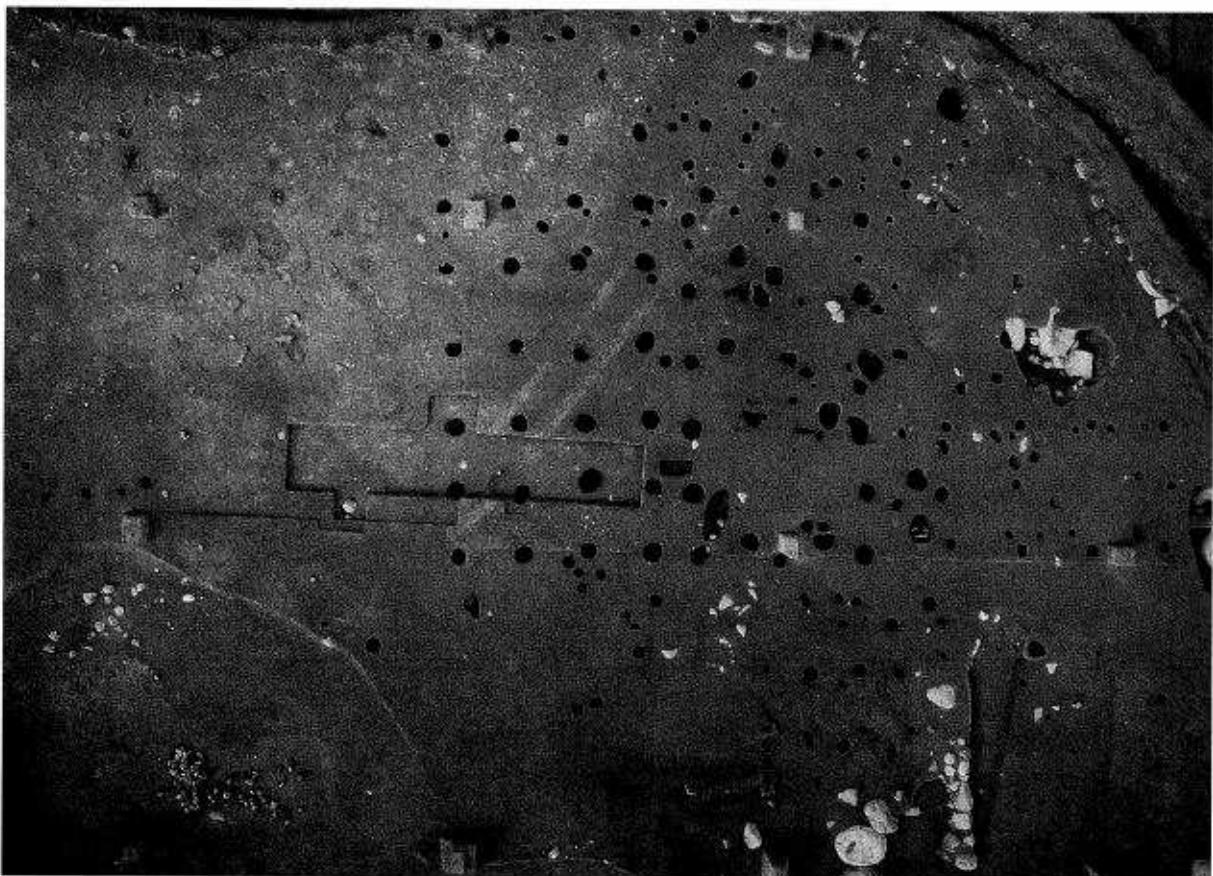
図版4



1. 1区C~K トレンチ全景 (建物5~21、29; 北←)



2. 1区C~E トレンチ全景 (建物7~12; 北↑)



1. 1区H・Iトレンチ全景（建物13～18、29、土壤5、8～10；北↑）

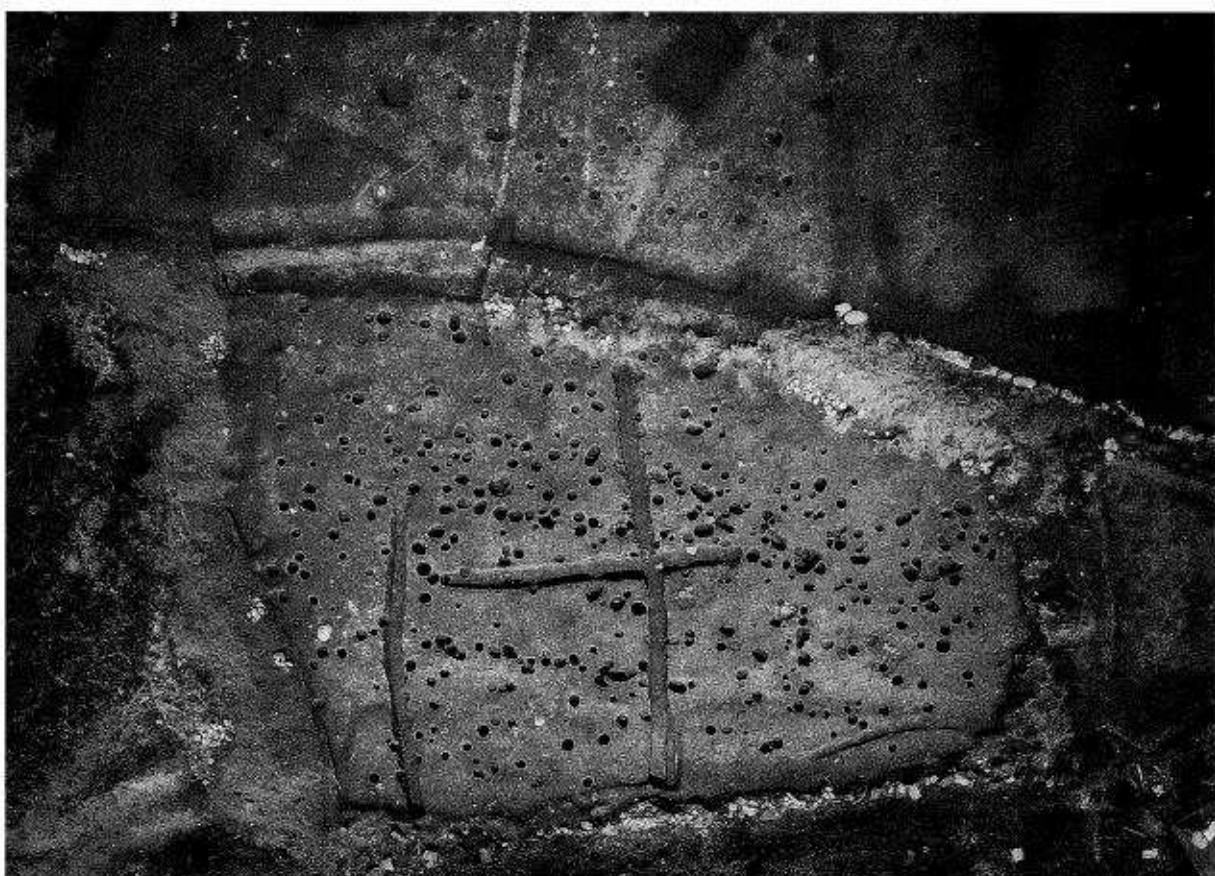


2. 1区V～Zトレンチ全景（建物24～27；北↑）

図版 6



1. 2区全景（北→）



2. 2区C～F トレンチ全景（建物1～3、ミゾ1～4、土壌1、2、5；北↑）



1. 2区C・D トレンチ全景（建物4、5、土壤1、2、5；北↑）



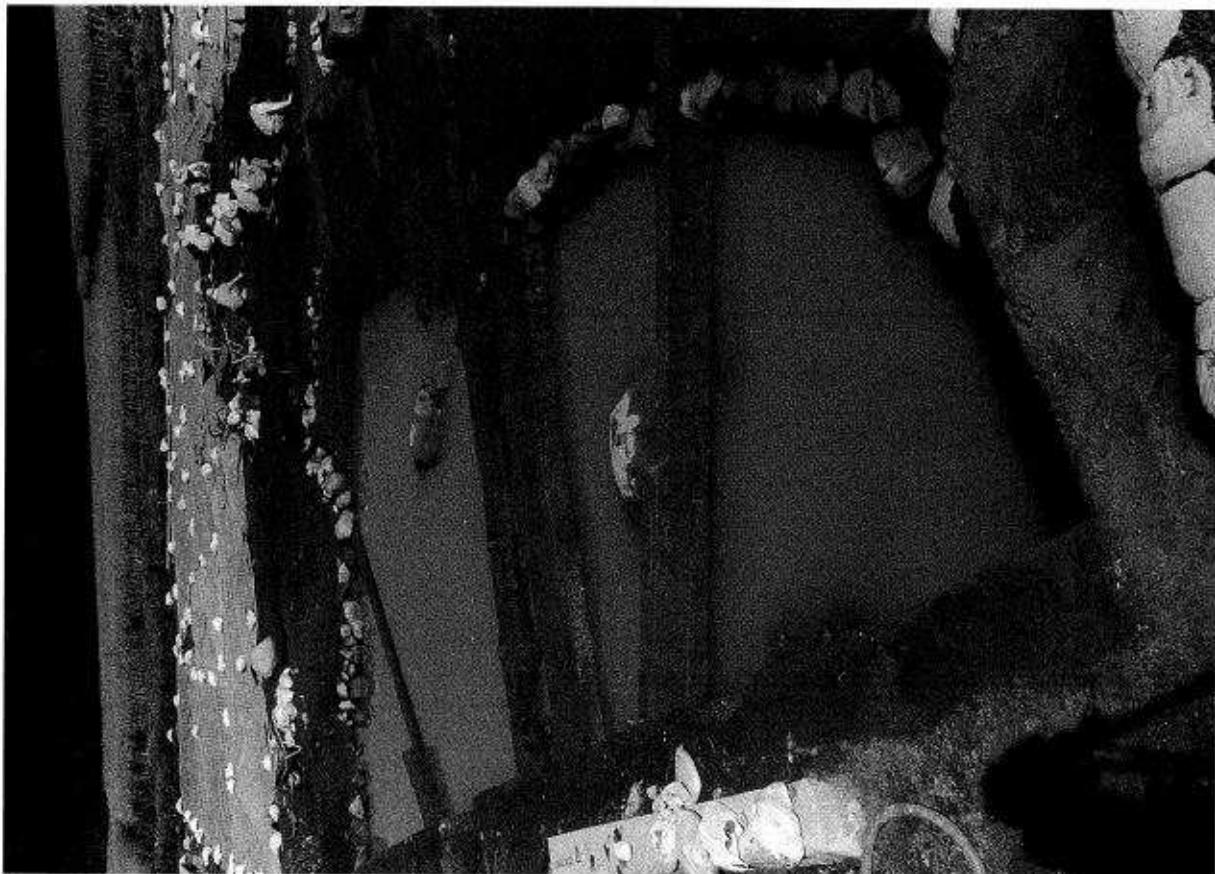
2. 2区E~H トレンチ全景（建物6~12、炭窯、公道；北←）

図版 8



1. 1区Aトレンチ 池状遺構全景（北→）





1. 1区 Aトレンチ 池状遺構湛水状況（北↑）

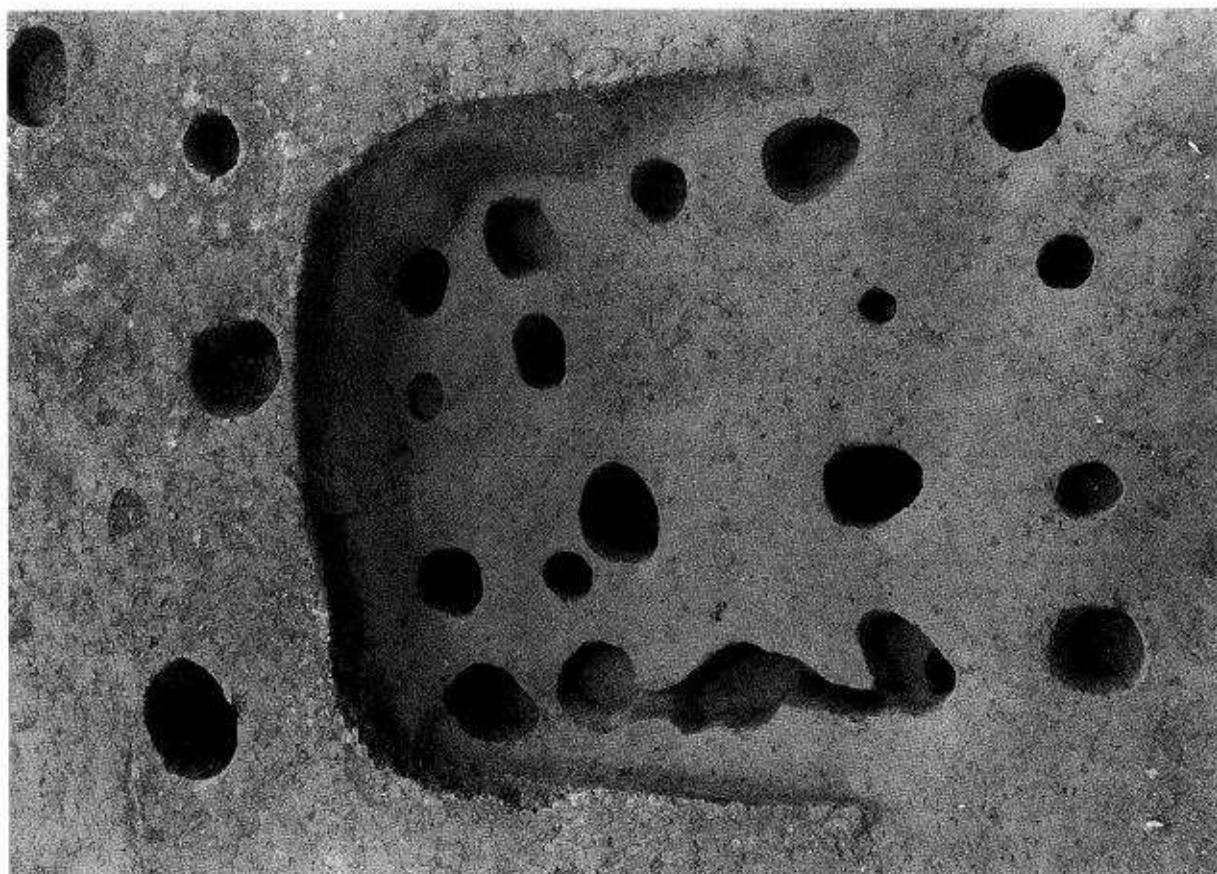


2. 1区 A～Cトレンチ ミゾ1完掘状況（北←）

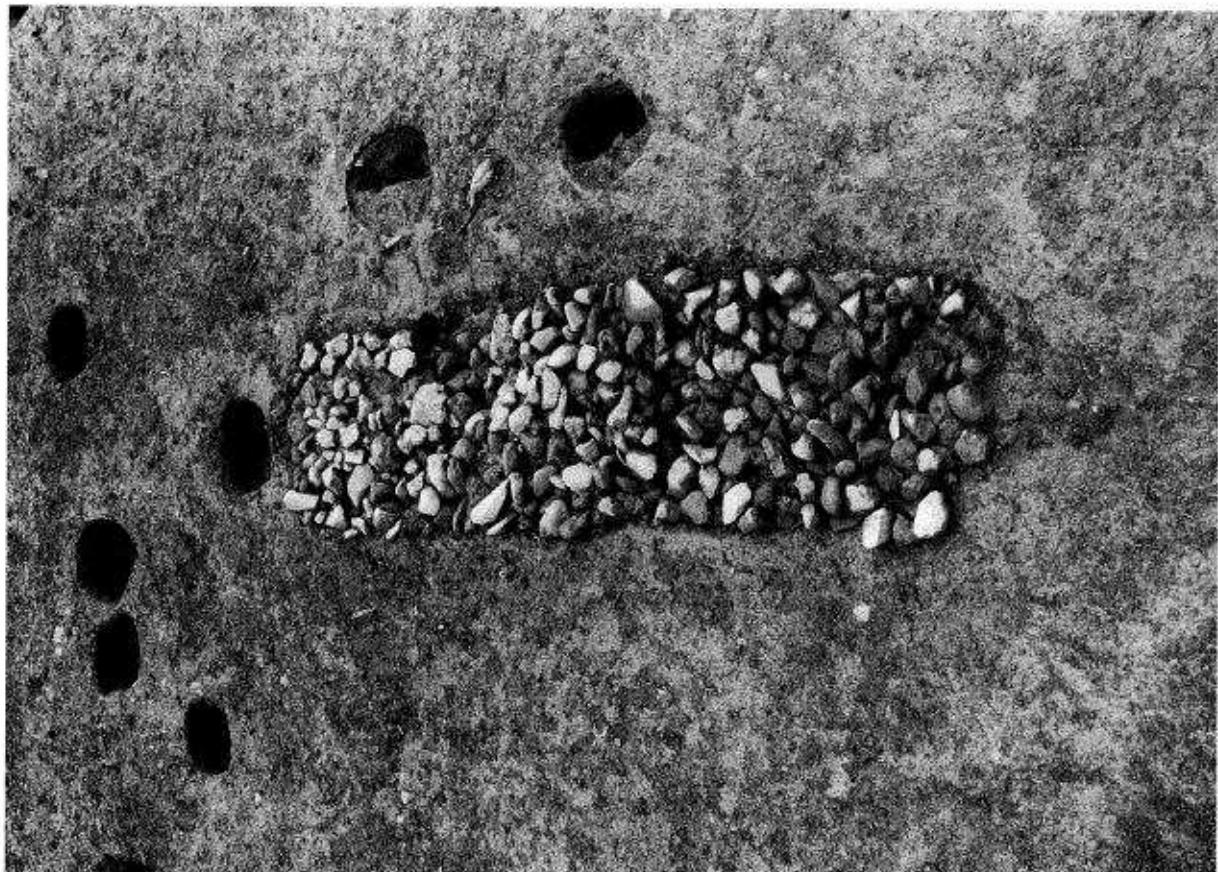
図版10



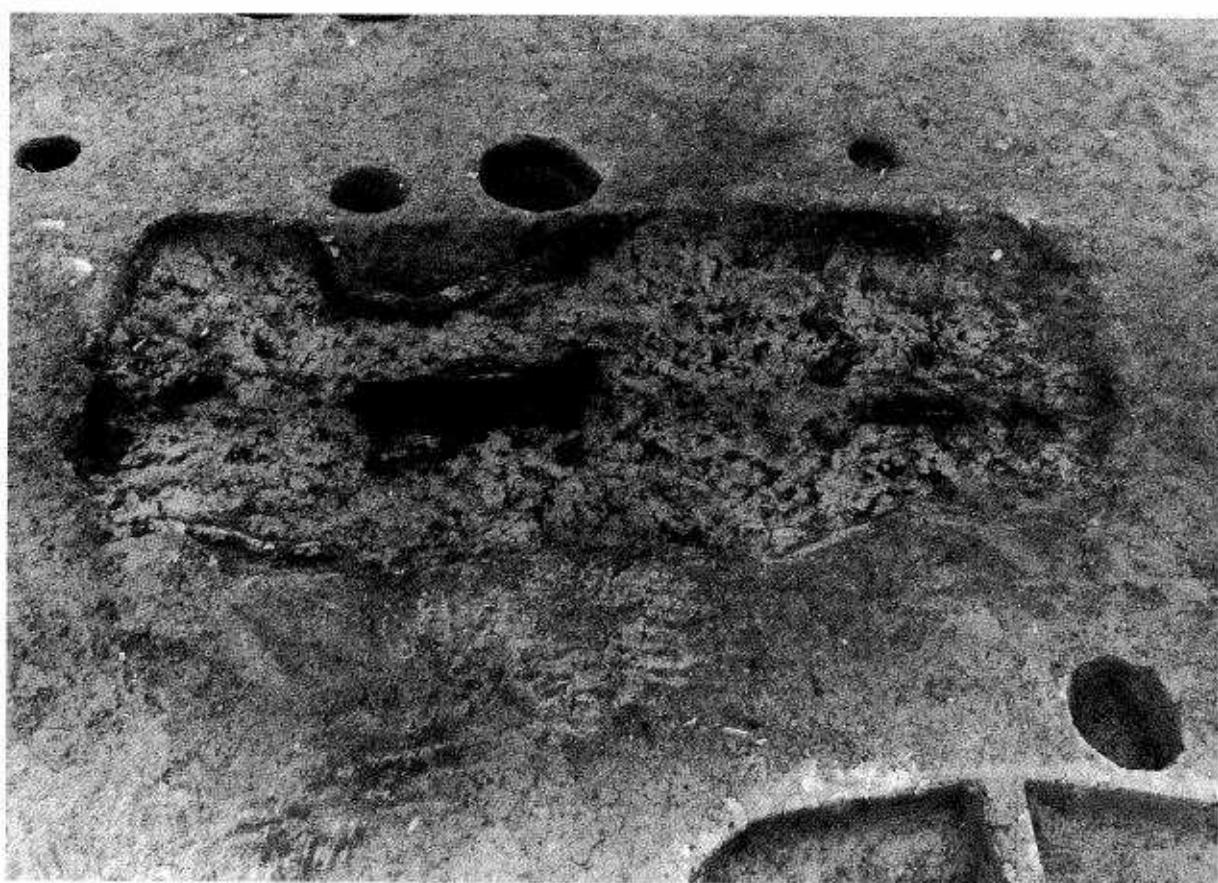
1. 1区A・Bトレンチ ミゾ3完掘状況（北←）



2. 2区F7トレンチ 土壌3・建物12 完掘状況



1. 2区F7トレンチ ミゾ9検出状況（北↓）

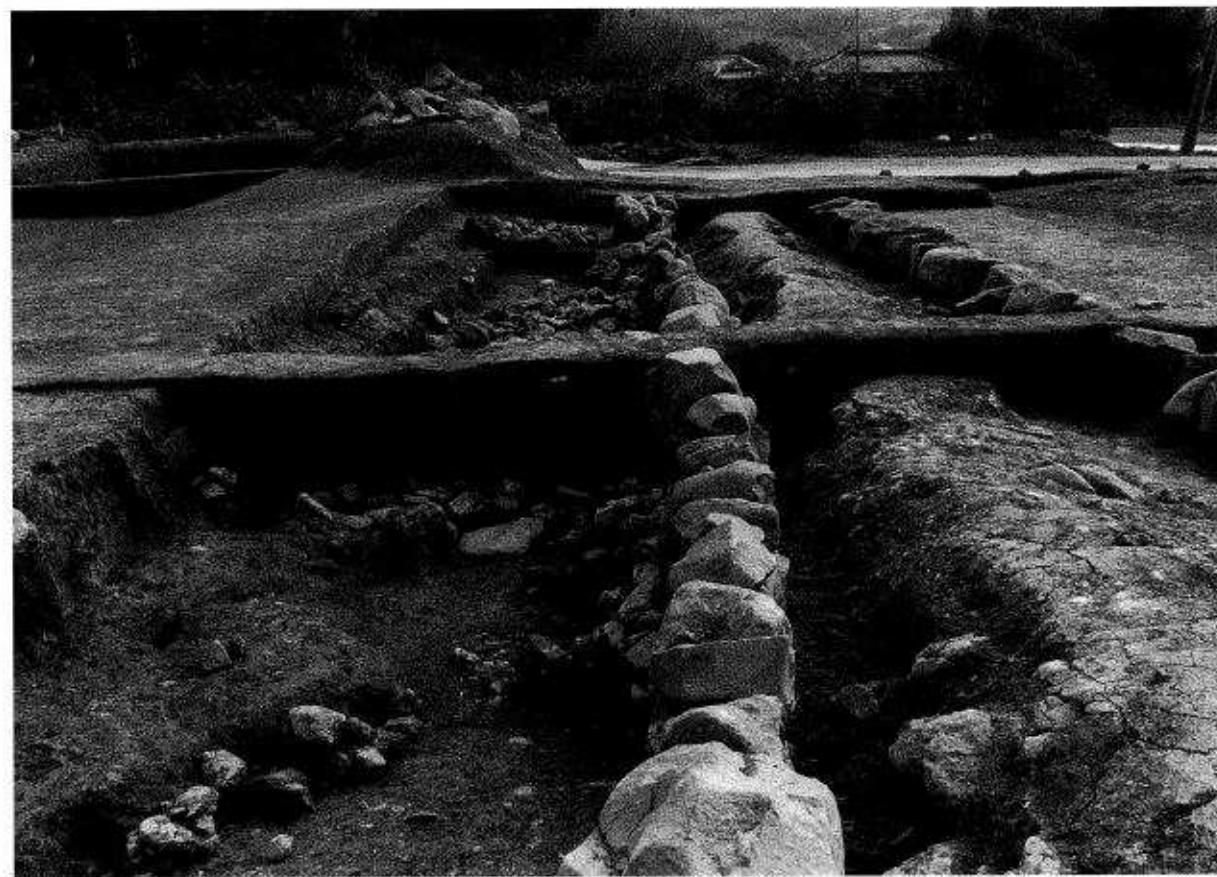


2. 2区F7トレンチ 炭窯完掘状況（右下は土壤3・建物12；北←）

図版12



1. 2区F4トレンチ ミゾ3 (桟瓦、塊石出土状況; 北←)



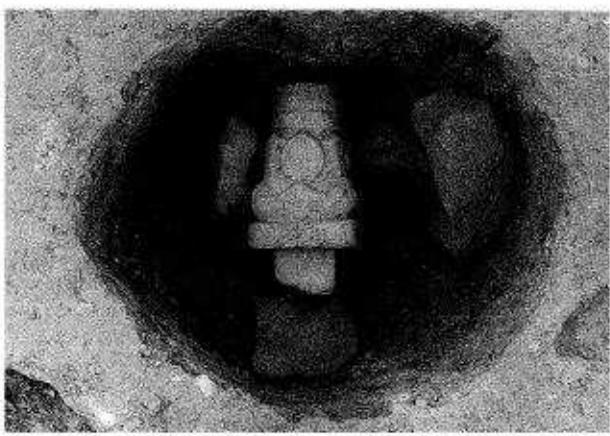
2. 2区F~Hトレンチ 公道 (北↓)



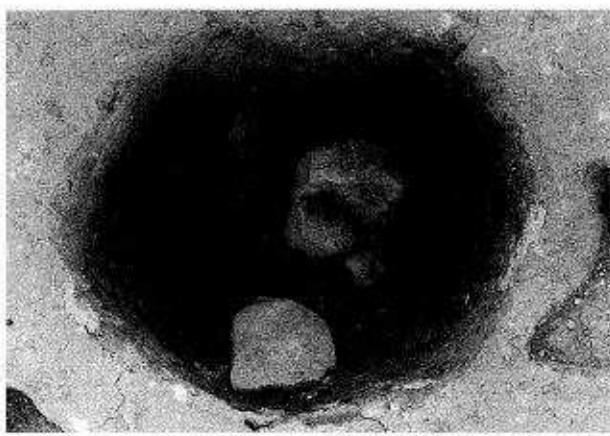
1. 2区G 7 土壙 4 検出状況



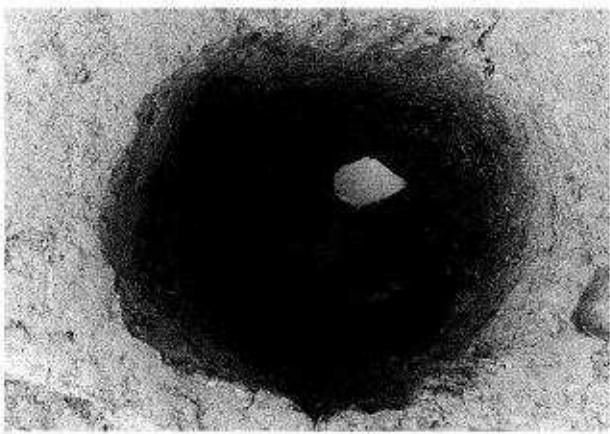
2. 2区H 9 土壙 6 検出状況



3. 2区F 2 祭祀遺構(ピット29)宝篋印塔相輪(65)出土状況



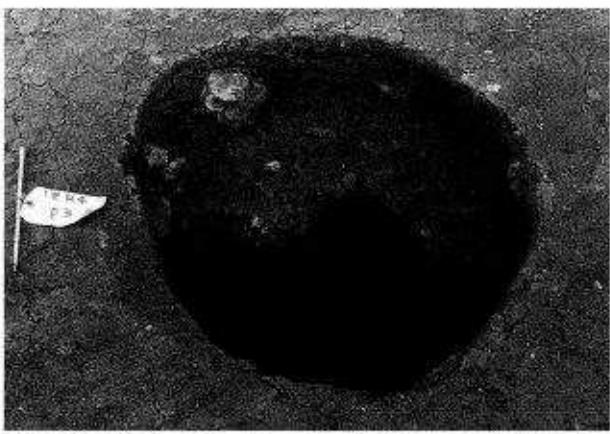
4. 2区F 2 祭祀遺構(ピット29)宝篋印塔相輪取上げ後の状況



5. 2区F 2 祭祀遺構(ピット29)白磁碗(44)出土状況



6. 1区G 3 ピット1 柱痕



7. 1区H 4 ピット3 柱痕



8. 1区I 5 ピット5 柱痕

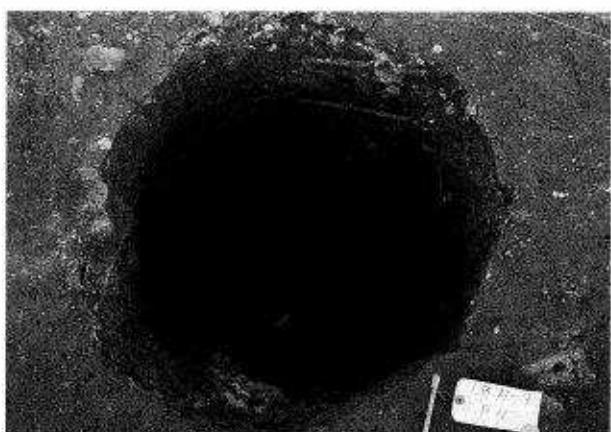
図版14



1 2区F 3ピット15、15-1~5



2 2区G 7ピット2、63



3 1区H 3ピット4 青花(11)出土状況



4 2区E 2ピット3 茶臼(53)出土状況



5 2区E 2ピット3 同上



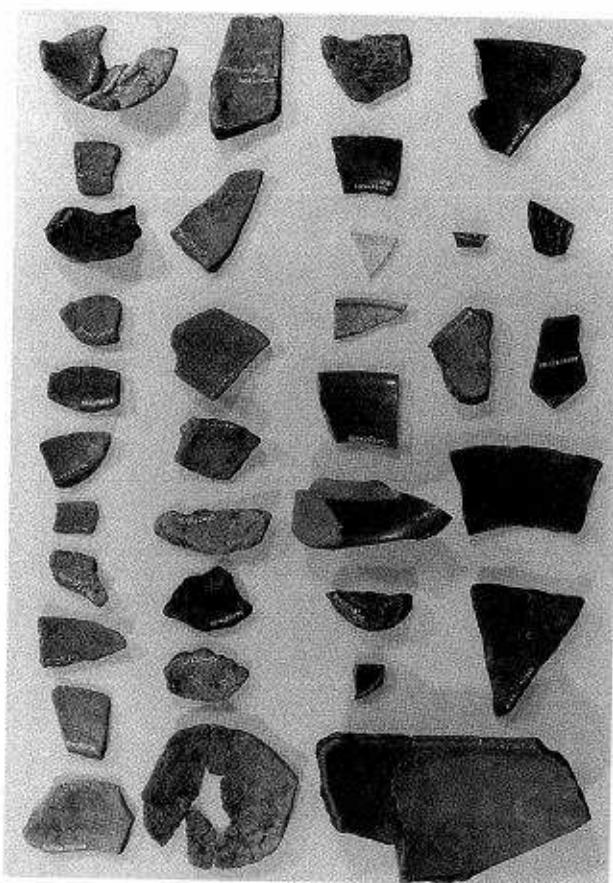
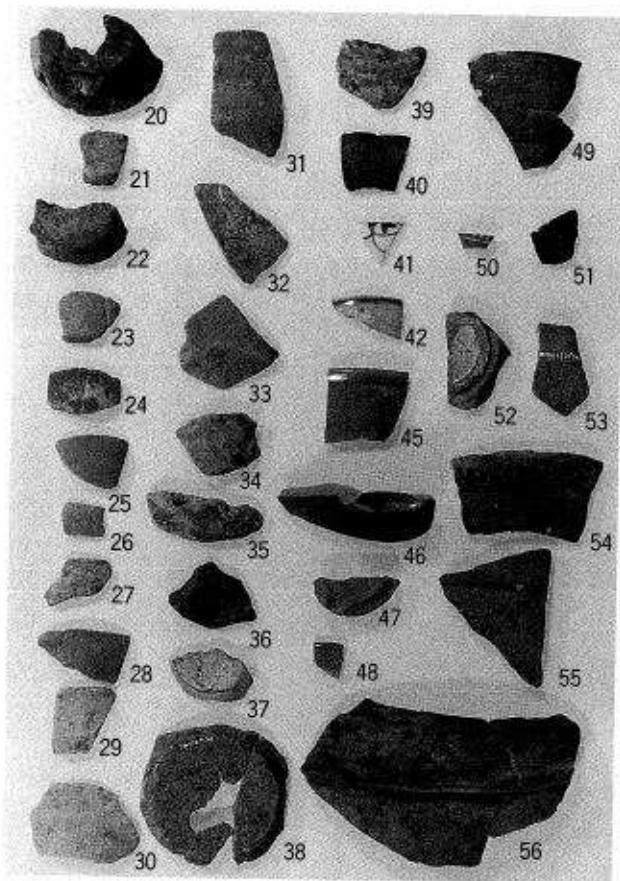
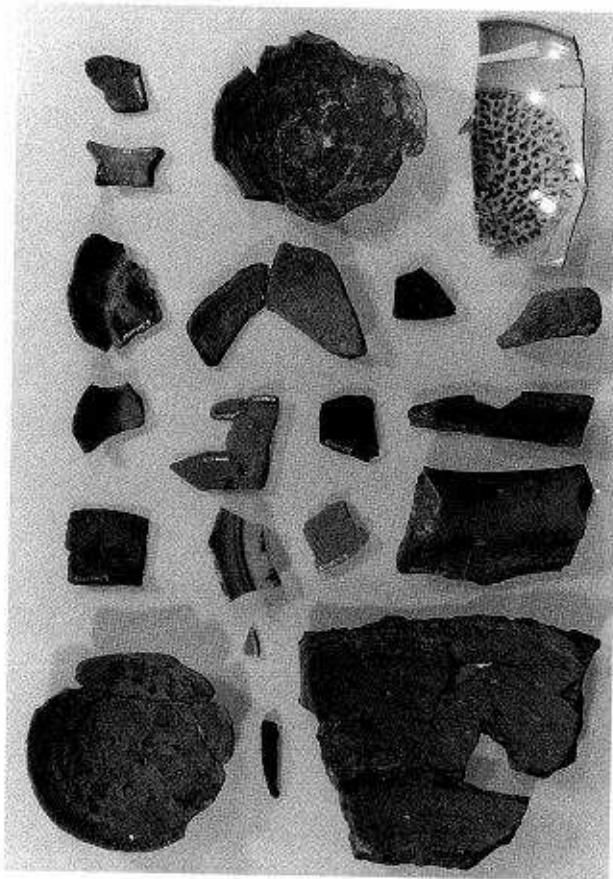
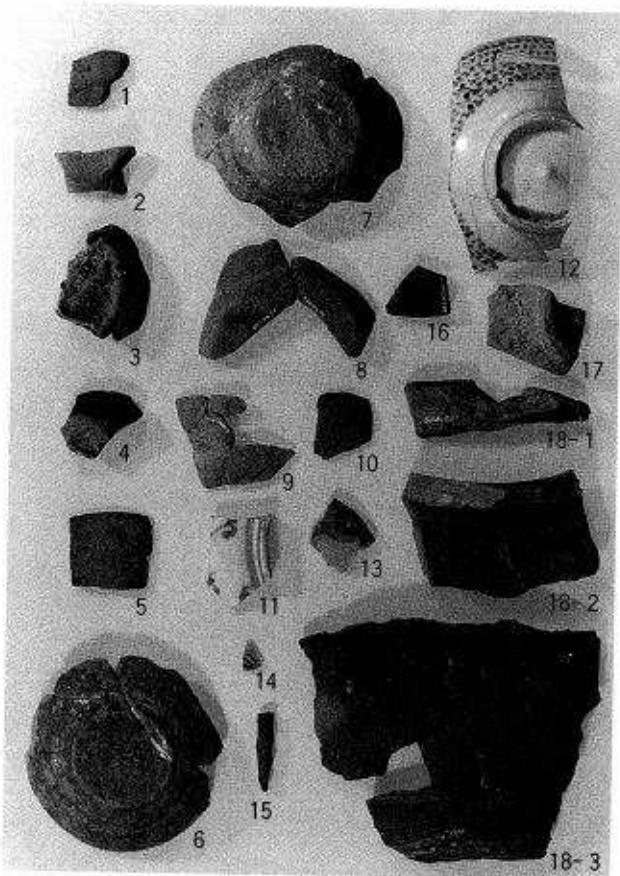
6 2区E 3ピット11土師質火舍(61)出土状況



7 2区F 3ピット15-1 土師質火舍(59)出土状況

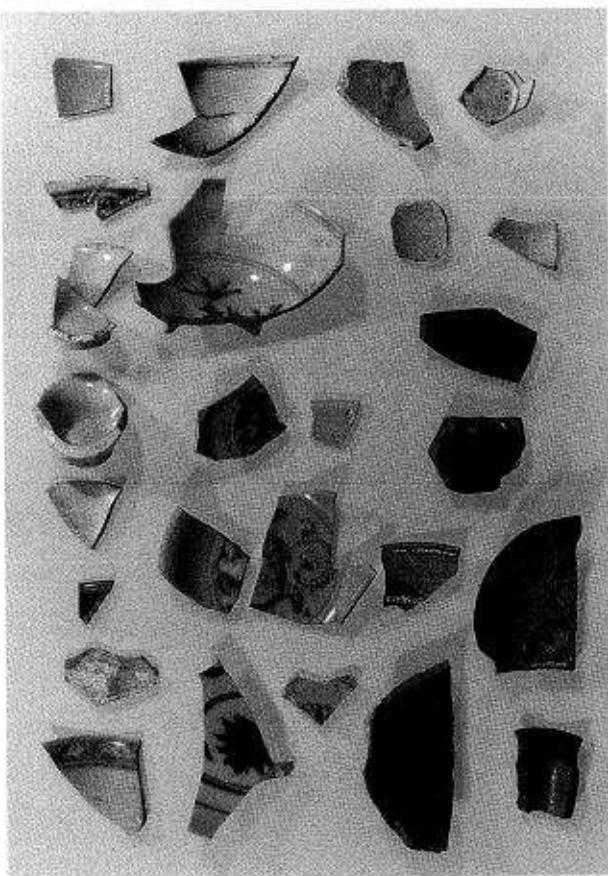
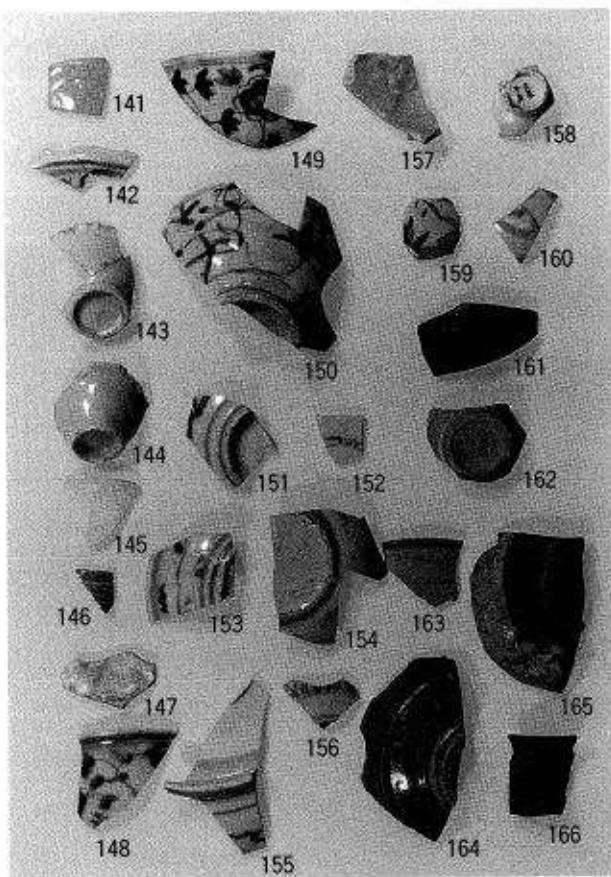
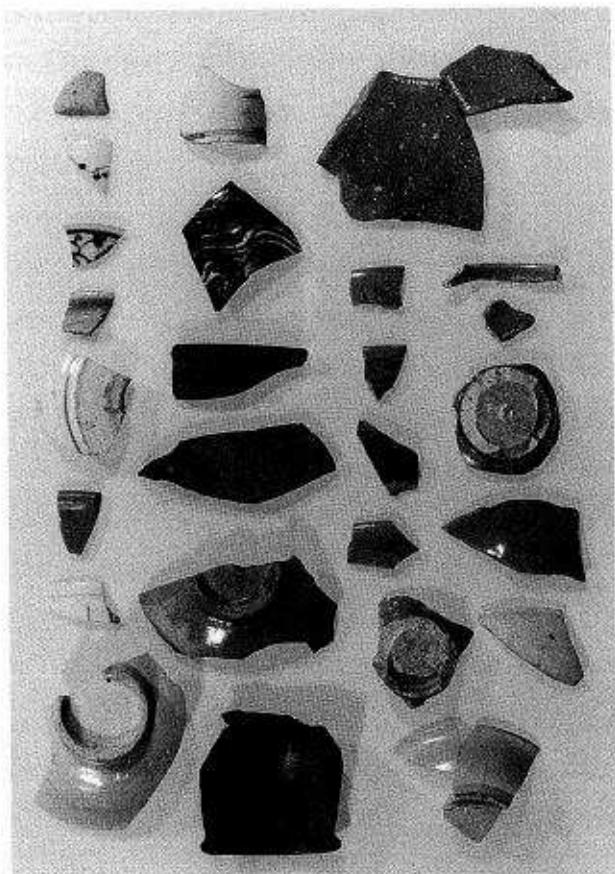
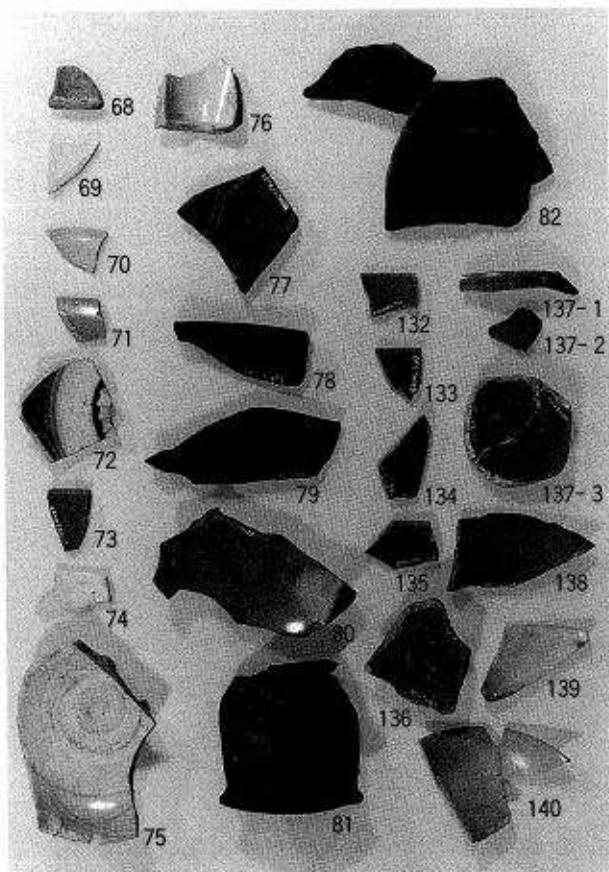


8 2区F 3ピット143青磁碗(43)出土状況

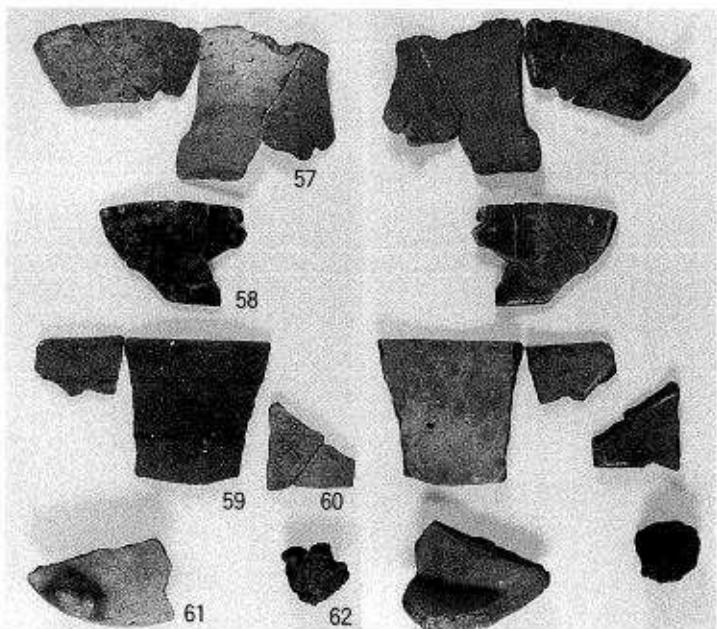
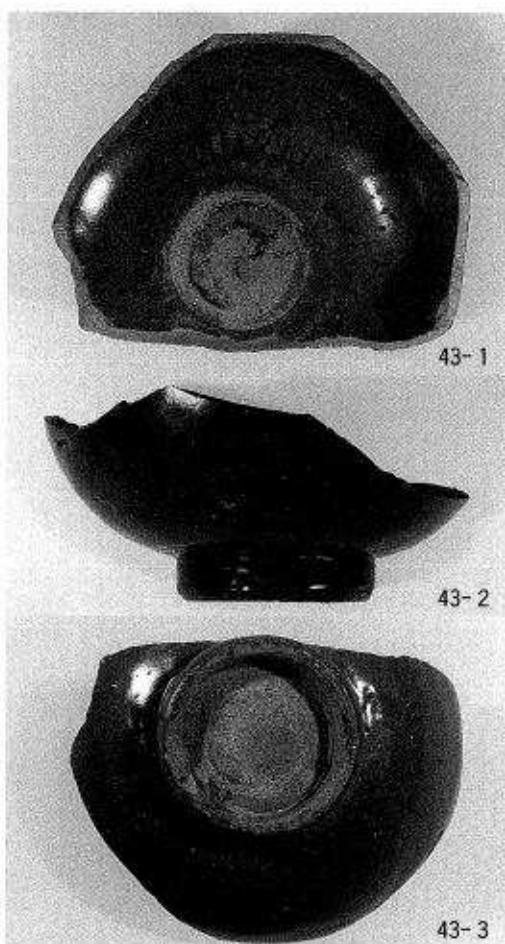
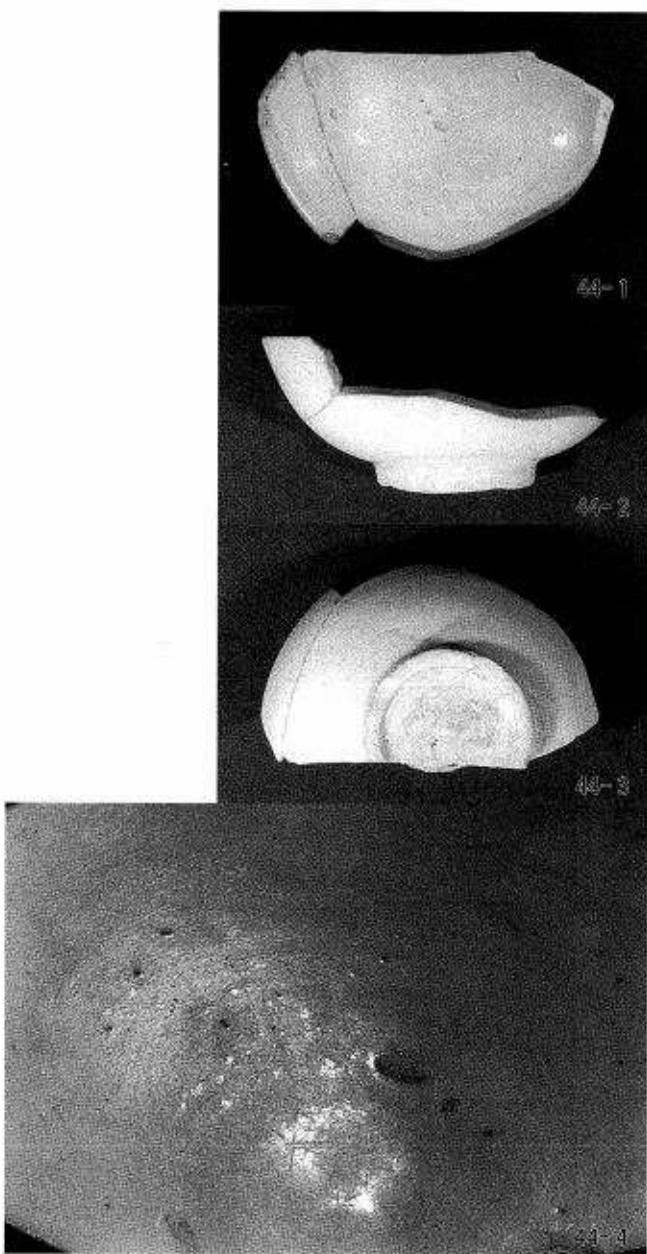
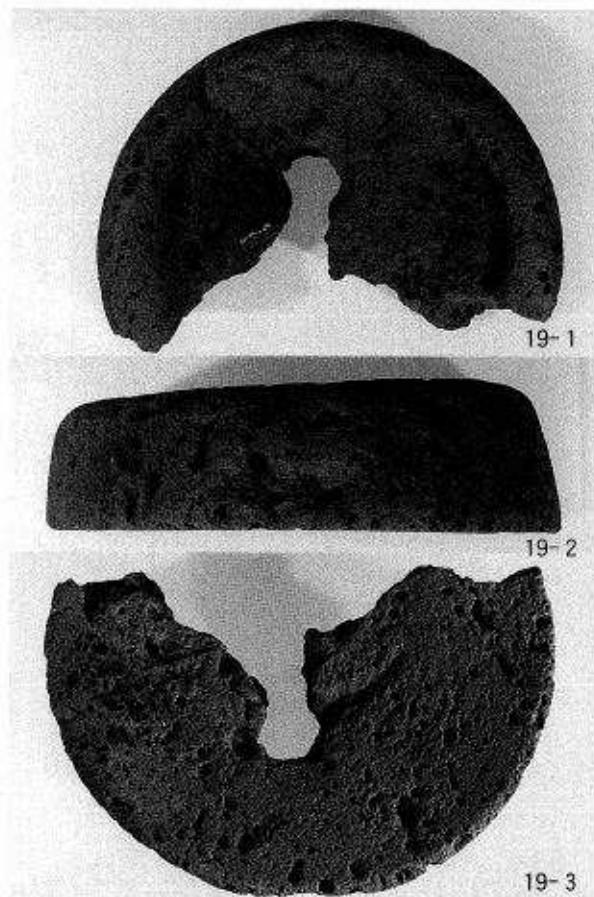


遗物写真

図版16

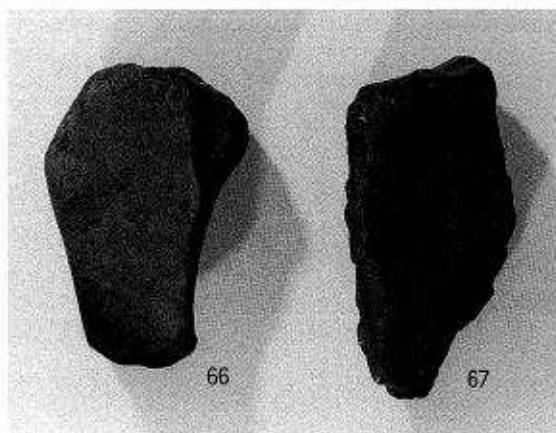
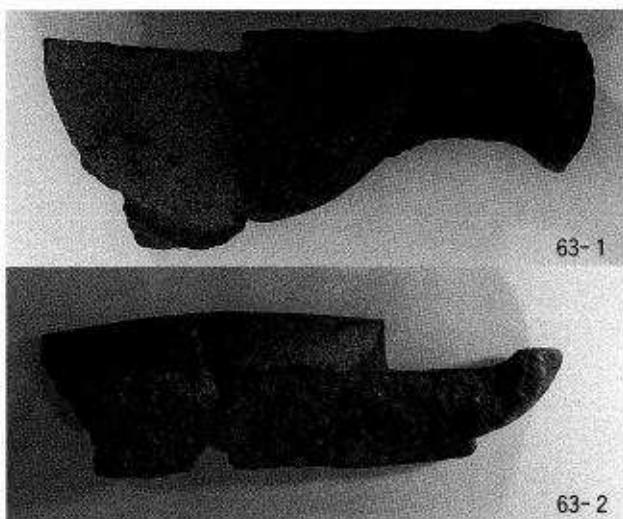


遺 物 写 真

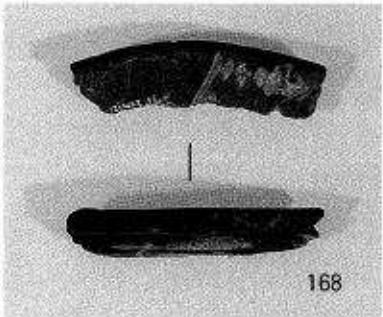
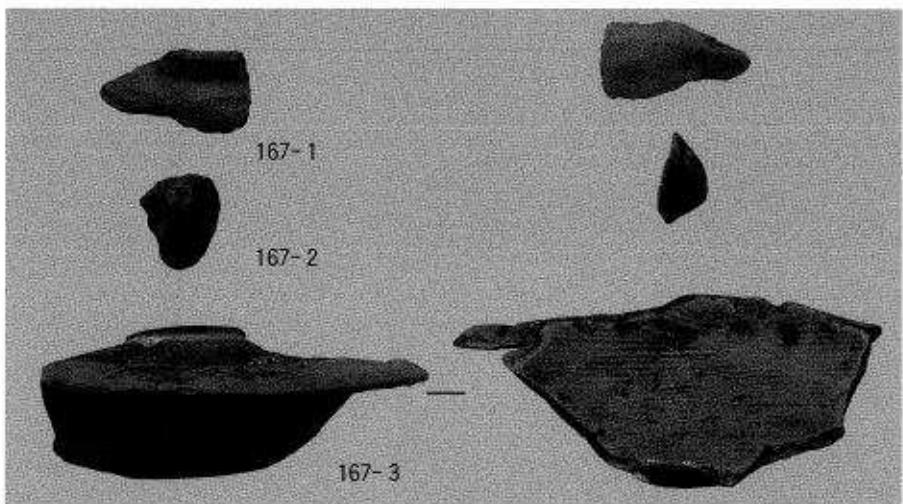
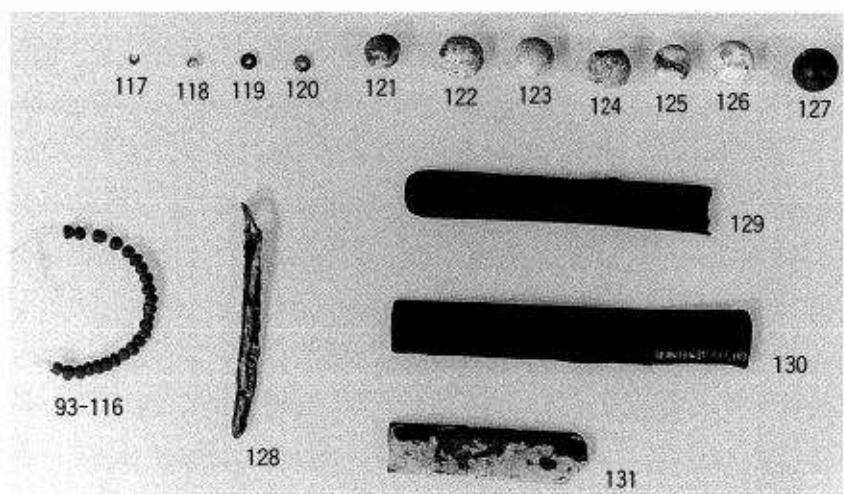
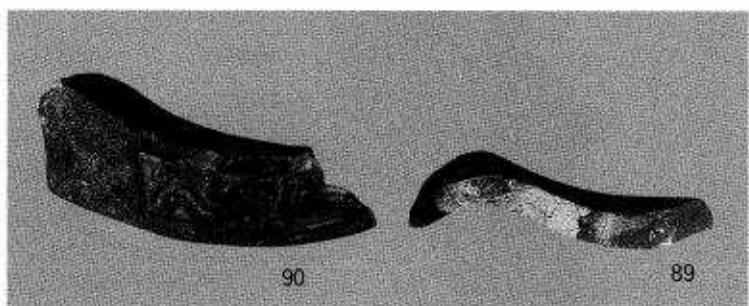
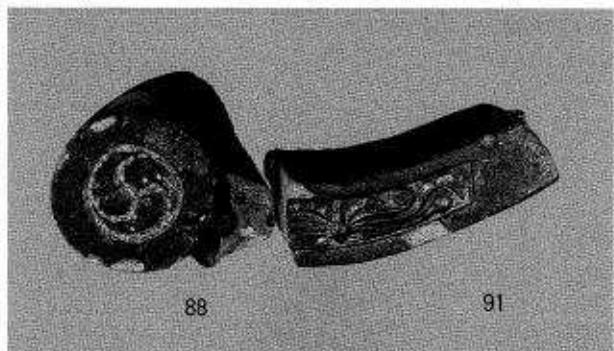
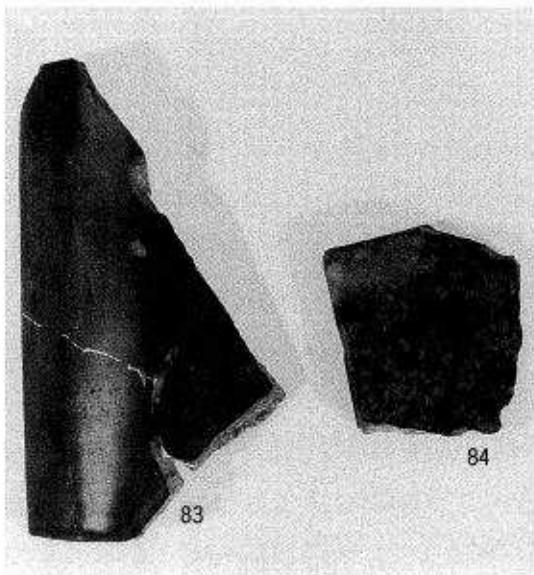


遺 物 写 真

図版18



明教寺墓地確認宝鏡印塔火輪



遺物写真

報告書抄録

ふりがな	おわたに							
書名	尾和谷城跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	秀島貞康、古賀力、橋本幸男、大石一久							
編集機関	諫早市教育委員会							
所在地	諫早市東小路町7番1号 TEL0957-22-1500							
発行年月日	2004年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
お わ た に 尾和谷城跡	い さ き は や ま ち 諫 早 市 かみお わた の まち 上 大 渡 野 町 しもお わた の まち 下 大 渡 野 町			33度 53分 07秒	130度 01分 23秒	確認調査 H120222～ 0327 試掘調査 H130117～ 0319 本調査 H140625～ H150325	15,000m ²	中山間地 域総合整 備事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
尾和谷城跡	城跡	戦国	建物柱穴 池状遺構 ミゾ状遺構 土壤	輸入陶磁器 土師器・陶器・ 磁器 鉄滓 鋳造製品		大村市との番手城		

文化振興課

諫早市文化財調査報告書 第16集

尾 和 谷 城 跡

2004. 3. 19

発行所 講早市教育委員会
 講早市東小路町7番1号

印刷所 (株)昭和堂
 講早市長野町1007-2